

内モンゴル・フルンボイル草原地域における多民族の

固定式住居に関する研究

—バルガモンゴル族・エヴェンキ族・ダウール族を対象として—

A Study Regarding the Fixed Housing of Multiethnic Groups in the  
Hulunbuir Grassland Region of Inner Mongolia

—Baragmongol, Evenki and Dawur Nations as Targets—

2023 年

斯琴托亚（スチントヤ）

## 目次

### 第1章 研究の背景と目的

1.1.研究の背景と目的	1
1.1.1.研究背景	1
1.1.2.研究目的	1
1.2.既往研究と本研究の位置付け	2
1.2.1.既往研究	2
1.2.2.本研究の位置付	3
1.3.研究の方法と調査概要	4
1.4.論文構成	5

### 第2章 フルンボイル草原地域における多民族の概況

2.1.本章の目的	10
2.2.歴史背景	11
2.3.フルンボイル草原地域の牧畜業を営む3民族の基本状況	12
2.3.1.バルガモンゴル族牧畜民の概況	14
2.3.2.エヴェンキ族の牧畜民の概況	14
2.3.3.ダウール族の牧畜民の概況	14
2.4.まとめ	15

### 第3章 新バルガ右旗におけるバルガモンゴル族牧畜民の住居と生活様態

3.1.本章の目的	17
3.2.調査地の概要	17
3.3.牧畜民の実態	17
3.3.1.家族の基本状況	17
3.3.2.放牧様式と住居の現状	18
3.3.3.家族の移動状況	20
3.3.4.土地利用と所有住居状況	21
3.4.牧畜民の住居	23
3.4.1.バイシンの建設時期	23
3.4.2.バイシンの平面タイプ	27
3.4.3.居室の利用用途と呼び名	29
3.5.暖房器具	32

3.5.1.暖房器具の種類	32
3.5.2.暖房器具と住宅の関係	33
3.6.まとめ	35

#### 第4章 エヴェンキ族自治旗におけるエヴェンキ族牧畜民の住居と生活様態

4.1.本章の目的	38
4.2.調査地の概要	38
4.3.牧畜民の実態	39
4.3.1.家族の基本状況	39
4.3.2.家族の移動状況	40
4.3.3.放牧様式と土地利用	41
4.4.牧畜民の住居	44
4.4.1.バイシンとの位置関係	44
4.4.2.バイシンの建設時期	45
4.4.3.平面タイプ	49
4.4.4.居室の利用用途と呼び名	52
4.5.暖房器具	54
4.5.1.暖房器具の種類	54
4.5.2.年代別で見た暖房器具の利用状況	56
4.5.3.暖房と平面関係	56
4.6.まとめ	57

#### 第5章 エヴェンキ族自治旗におけるダウール族牧畜民の住居と生活様態

5.1.本章の目的	60
5.2.調査地の概要	61
5.3.牧畜民の実態	61
5.3.1.家族基本状況	61
5.3.2.収入	62
5.3.3.放牧様式と土地利用	63
5.4.牧畜民の住居	66
5.4.1.平面タイプ	66
5.4.2.バイシンの建設時期	69
5.4.3.居室の利用用途と呼び名	74
5.5.暖房器具	77

5.5.1 暖房器具の種類	77
5.5.2.年代別で見た暖房器具の利用状況	79
5.6.まとめ	80

## 第6章 フルンボイル草原地域における多民族牧畜民の住居

6.1.本章の目的	82
6.2.放牧様式	82
6.2.1.放牧方法	82
6.2.2.放牧地利用	82
6.3.牧畜民の住居	83
6.3.1.バイシンの建設時期	83
6.3.2.平面タイプ	84
6.3.3.居室の利用用途と呼び名	85
6.4.暖房器具	87
6.4.1.暖房器具の変化	87
6.5.比較によるフルンボイル草原地域における居住空間の特徴	88
6.5.1. 3民族との比較による共通点	88
6.5.2. 3民族との比較による相違点	88

## 第7章 結論

7.1. 調査地3民族の要約	90
7.2. フルンボイル草原地域における牧畜業を営む3民族の住居平面変化及び使い方の要約	92
7.3. 今後の課題	94

## 資料

本論に関するヒアリング項目シート

本論に関する公表・投稿論文一覧

## 第1章 研究の背景と目的

### 1.1. 研究の背景と目的

#### 1.1.1. 研究背景

フルンボイル (kölönboir) 市は\*1、中国内蒙古自治区 (以下内モンゴルと略す) の東北部に位置し、南は内モンゴル興安盟、北及び北西はロシアにそれぞれ隣接し、西及び南西はモンゴル国、東は黒龍江省と接している。東西 630 km、南北 700km である。フルンボイル草原は世界で 4 つある大草原地帯の一つである。歴史上モンゴル民族をはじめ多くの遊牧民族が活躍した舞台として知られている。18 世紀ころ、フルンボイル地域は清朝北方边境の地であるため、エヴェンキ (ewengki)、ダウール (dagur)、バルガ (bargu) が八旗\*2 に編成され、漢族の流入や定住農耕化が比較的遅れ、長い間遊牧生活が続けられた。1912 年にダウール人による分離独立があり、その後、日本の勢力下にある満州国によって興安北省が置かれた。1948 年に内モンゴル自治区に属し、フルンボイル盟が設置された。1969 年に黒龍江省に編入されたが、1979 年に内モンゴル自治区に返還される。2001 年にフルンボイル盟が廃止され、フルンボイル市が成立した<sup>1)</sup>。

1949 年の中華人民共和国建国以降、人民公社、大躍進、文化大革命などの政治政策を背景として、漢人入植による人口増加が促進した。中国では 1950 年代から土地改革が行われ、土地所有は集団所有制機関である生産隊 (今のガチャ) が持っていた。1978 年以降に生産請負制度による家畜の私有化、土地分配が始まり、生産隊が廃止された。1983 年に生産隊が所有していた土地をガチャに移管し、ガチャが土地所有権を持つことになった。そして、ガチャが所有する土地の使用権を牧畜民に家畜数や家族人数に応じて分配した。1997 年に第 2 回目の土地分配が実施されたが、これは 1983 年の土地分配で不明確であった土地境界線を明確にしたものであった。2000 年初期分配された牧畜地の区画を有刺鉄線で囲い込んだ。実質上、家畜は分配された区画以外への自由な移動が不可能となった。牧畜民の定着化がより一層加速した。

地理的に見るとフルンボイル市は、西部はバルガ草原地帯、中部は北東から南西に横ぎるヒヤンガン (興安嶺) という山岳地帯、東部は農村地帯の 3 つの生態区域からなりたっている。フルンボイル市の草原は 4 つの旗、新 (シン) バルガ左旗、新バルガ右旗、陳 (ホーチン) バルガ旗、エヴェンキ族自治旗とハイラル区、満州里市、額爾古納市の南部、牙克石市の西部の範囲に広がっている。しかし、区と市は市街地のため放牧を行っていない。ほかの民族は、地理的に森林、山脈のため放牧が行われてなく、農業、林業が主な生業となっている<sup>2)</sup>。

#### 1.1.2. 研究目的

内モンゴルの草原で、モンゴル族以外の複数民族が、近距離で牧畜を営んでいる地域は、フルンボイル市でしか見られない。個々の民族に関する研究は存在しているが、同じ気候

で、同じ生業に携わる異なる民族の住宅平面を取り上げ、相違点を検討した研究はなかったため選定した。

バルガモンゴル族<sup>\*3</sup>、エヴェンキ族<sup>\*4</sup>とダウール族<sup>\*5</sup>の3民族の現地調査の結果をもとに3つの調査地を比較検討し、フルンボイル草原地域における①牧畜民の生活様態、放牧様式と土地利用、②住居の平面とその利用用途を把握し、③その上で、フルンボイル草原地域で牧畜を営む3民族の全体的な居住空間の特徴や変容過程を検討し、同じ気候で、同じ生業を営む異なる3民族の住様式の共通点と相違点それぞれの民族の住慣習の違いを明らかにすることを目的とする。

## 1.2. 既往研究と本研究の位置付け

### 1.2.1. 既往研究

内モンゴル自治区の住居に関する研究

#### 1) 伝統住居に関する研究

モンゴル族の伝統的な移動式住居ゲルについての研究は蓄積されているがエヴェンキ族の伝統的移動式住居斜仁柱（シャランジュ<sup>\*6</sup>）やダウール族の伝統的な住居についての研究は稀である。

モンゴル伝統住居について、INAX ギャラリー企画委員会<sup>3)</sup>、中国人民政治協商会議東烏珠穆沁旗委員会<sup>4)</sup>、田中暎郎<sup>5)</sup>、Ba・布和朝魯<sup>6)</sup>、乾尚彦<sup>7)</sup>、Rincin<sup>8)</sup>、Maidar, D<sup>9)</sup>、G・Sharabdorji<sup>10)</sup>、楊海英<sup>11)</sup>、伊東恒治<sup>12)</sup>らの研究がある。以上はモンゴル族の移動式伝統住居ゲルの建築過程、種類、構造、材料、歴史文化や風俗などを詳細にしたものである。

エヴェンキ族の伝統住居斜仁柱（シャランジュ）について、内蒙古自治区編集部<sup>13)</sup>、黄任远・那晓波<sup>14)</sup>らは住居構造、材料、住居変遷について触れている。内蒙古エヴェンキ族自治旗概況編集部<sup>15)</sup>と涂建軍<sup>16)</sup>らの研究では、エヴェンキ族の住居の変遷や建築方法について述べながら暖房や家具にも触れている。

ダウール族の伝統住居について、毅松<sup>17)</sup> (2012)、毅松<sup>18)</sup> (2013)ではダウール族伝統住居の構造、材料、空間について触れている。毛艳・毅松<sup>19)</sup>らはダウール族の村落の調査によってダウール族の人口、経済、社会、宗教、教育について分析した研究の中で、ダウール族の伝統住居の構造、機能、空間について述べている。ダウール族社会歴史調査<sup>20)</sup>では、エヴェンキ族の移動式住居とダウール族の伝統的な固定住居については、1950年代の調査をもとに、特徴、材料、構造などが記述されている。

#### 2) 固定住居バイシン<sup>\*7</sup>に関する研究

海日汗<sup>21)</sup>はゲルの空間構成がバイシンに至るまでどのような経緯で受け継がれているかについて分析している。野村理恵・中山徹<sup>22)</sup>と野村理恵・今井範子・中山徹<sup>23)</sup>の研究では、内モンゴル草原地域と砂漠地域における牧畜民の生業変化及び居住地移動とそれぞれに伴う生活様態の変容を考察している。特に内モンゴル自治区の中部地域であるシリングル盟

における事例に基づいた研究では、牧地の分配により、ゲルの移動距離が縮小、ゲル利用の縮小と簡易化傾向が見られると指摘した。阿榮照樂・中山徹<sup>24)</sup>らは内モンゴル自治区の西部地域であるアラシャ盟におけるバイシンの変容過程に関する研究のなかで、砂漠地域のアラシャ右旗では複数の固定式住居を季節によって循環移動している。従来住居は牧業に適していたが、近年は観光業に適応する傾向が見られると述べている。イジョウ・中山徹<sup>25)</sup>の研究では、内モンゴル自治区の東部ホルチン地域のバイシンの変容過程、居室の利用、平面分類について分析している。定住化への変化が最も早く進行した地域の一つであるホルチン地域において、モンゴル族の農牧民の居住空間を分析した。住居の形は従来の一室円形（ゲル）から二室、三室へと変化し、近年頃より住宅の後ろ側に倉庫や食堂が増築されている。空間変化により農牧民の日常的な行為も変わっていると指摘している。以上は内モンゴル自治区の固定住居バイシンについて地域別既往研究である。

### 3) フルンボイル市モンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族に関する研究

3 民族の言語、民俗、歴史などの分野について多彩な視点から取り組んだ既往研究が多数ある。例えば、色音<sup>26)</sup>が清朝時代から始まった内モンゴルの蒙地開墾に伴う遊牧、農業、半農半牧経済類型に沿った牧畜民の生活方式や生産について述べている。馬洪祥<sup>27)</sup>がフルンボイル旅蒙商では、商売人の漢民族が貿易によりフルンボイル市に移住した歴史を記述している。大竹昌己<sup>28)</sup>、恩和巴図<sup>29)</sup>、孟志東<sup>30)</sup>(1989)、孟志東<sup>31)</sup>(2007)らのダウール族の言語についての研究がある。勝紹箴・蘇都爾・董瑛<sup>32)</sup>、戴嘉艷<sup>33)</sup>、薩敏娜<sup>34)</sup>、池尻登<sup>35)</sup>らの研究では、ダウール族の文化について紹介している。孔繁志<sup>36)</sup>エヴェンキ族の歴史変遷、宗教、民俗、文学の広い範囲での研究がある。吳守貴<sup>37)</sup>はエヴェンキ族の歴史由来、部族、狩猟、移住などについての研究がある。「新バルガ右旗志」編纂委員会<sup>38)</sup>は、新バルガ右旗の歴史変遷、経済、人口、政治、文化などを詳細に調査し、統計したものである。

### 1.2.2.本研究の位置付

本論の調査対象地であるフルンボイル市の固定住居の変容過程について、本論と同様の視点で牧畜地域を対象としたアラシャ盟とシリンゴル盟、半農半牧地域を対象としたホルチン地域の初期バイシンから現在の固定住居までの変化を明らかにした研究がある。しかしフルンボイル地域に混住している多民族が同じ放牧地域で共生する中、それぞれの固定式住居の変化過程の比較研究は見当たらない。

フルンボイル市の西部は草原地域で、中部は北東から南西に向かって大興安嶺の森林地域で、東部は農業地域が広がっている。そのため放牧は西部に限られ、西部地域で、放牧を生業として営んでいるのは、バルガモンゴル族、エヴェンキ族とダウール族である。この視点から、2013年6月に新バルガ右旗アラタンエメル鎮、2014年8月にエヴェンキ族自治旗輝ソムとバヤンタラダウール民族郷で実地調査を行い、各地ごとに住居の変容を論

じた。

### 1.3.研究の方法と調査概要

本論はまず、文献を整理することによって、本論の位置付けを行い、フルンボイル草原地域の牧畜業に関わる基本状況を整理する。

調査方法は実地調査と聞き取り調査である(表 1-1)。牧畜業を営む牧畜民の現住居の実地測量と住居の建設時期、生業、家族構成、放牧様式、牧畜民の住居、家畜小屋、敷地、各居室の利用用途と名称などについて聞き取り調査を行った。平面図を作成し、全敷地と各バイシンの外観や内観を明確にするために写真で記録した。

調査 1 (第 3 章) は 2013 年に行った平成 24 年度科学研究費補助金(基盤研究 B、研究代表者:中山徹)「フルンボイル新バルガ右旗におけるバルガモンゴル族の生活様態と住居」による研究成果の一部である。調査 2 (第 4 章) と調査 3 (第 5 章) は 2014 年に行った(研究代表者:中山徹)「フルンボイル草原地域におけるエヴェンキ族とダウール族牧畜民の生活様態と住居」による研究成果である。また実地調査の 3 地域の調査に基づき(第 6 章)内モンゴルフルンボイル草原地域における多民族牧畜民の生活様態や居住空間の相違点を検討する。

まず、各調査地のガチャ長を訪問し、①初期バイシンを所有している、もしくは、所有していた(初期バイシンを現在も所有している場合と、初期バイシンは撤去して新しいバイシンに建て替えたが初期バイシンの平面など覚えている方)、②住居の建て替え時期をよく知っている、③最近、新しくバイシンを建てたとの 3 つの条件を満たす世帯の紹介を得た。

表 1-1 調査概要

調査	調査概要	関連章
1	フルンボイル新バルガ右旗におけるバルガモンゴル族の生活様態と住居 調査時期:2013年6月 調査地:フルンボイル市バルガ右旗19世帯 調査方法:聞き取り調査、実地調査	第3章
2	フルンボイル草原地域におけるエヴェンキ族牧畜民の生活様態と住居 調査時期:2014年9月 調査地:フルンボイル市エヴェンキ自治旗・輝ソム20世帯 調査方法:聞き取り調査、実地調査	第4章
3	フルンボイル草原地域におけるダウール族牧畜民の生活様態と住居 調査時期:2014年9月 調査地:フルンボイル市エヴェンキ自治旗・バヤンタラダウール民族郷19世帯 調査方法:聞き取り調査、実地調査	第5章

実地調査対象地はフルンボイル地域に属し、半乾燥気候であり、牧畜業に従事しながら草原地域で続けている 3 つのソム(表 1-1)で調査を行った。調査内容は以下のとおりであ

る。

2013年6月19日から7月4日までの2週間、新バルガ右旗のアラタンエメール(alatanemegel)<sup>39)</sup> 鎮<sup>40)</sup>における19世帯、2014年9月16日から9月25日、エヴェンキ族自治旗輝ソム<sup>41)</sup>でエヴェンキ族の20世帯、2014年9月7日から9月15日まで、バヤンタラダウル民族郷<sup>42)</sup>でダウル族の19世帯の牧畜民の居住空間に対する調査を実施した。また、実地調査を行う同時に資料収集も実施した。

### 【その他調査】

表1-1の調査を行った際、同時に資料収集を実施した。

- ①赤峰市ベーリン右旗政府関連機関を訪問し、調査協力願いと資料収集を実施した。(2012年8月)
- ②ヒンガン盟右翼前期旗政府関連機関を訪問し、調査協力願いと資料収集を実施した。(2016年7月)
- ③フフホト市、内モンゴル大学蒙古学院及び内モンゴル図書館やエヴェンキ族自治旗博物館、バヤンタラダウル民族郷博物館において資料収集を実施した。



図1-1 調査地位置図

出典：「内蒙古自治区地図集：中国地図出版社, 2006年第9版, p.53」<sup>43)</sup>をもとに筆者作成

## 1.4.論文構成

本論文は全7章で構成されている(図1-2)。

第1章は序論に相当し、本研究の背景と目的を明確にし、伝統住居や固定住居に焦点を絞って既往研究を整理し、研究方法や調査概要を述べた。

第2章では、フルンボイル草原地域の牧畜業の特徴を述べた。

第3章では、フルンボイル市新バルガ右旗におけるバルガモンゴル族の生活様態と基本状況を把握し、住居平面変化過程と居室の利用用途を分析した。

第4章では、フルンボイル草原地域におけるエヴェンキ族牧畜民生活様態と基本状況を把握し、住居平面変化過程と居室の利用用途を分析した。

第5章では、フルンボイル草原地域におけるダウール族牧畜民の生活様態と基本状況を把握し、住居平面変化過程と居室の利用用途を分析した。

第6章では、3つの調査地の異なる3民族の住居の平面タイプを比較分析し、居室の呼び名、利用用途、暖房器具を整理したうえで、フルンボイル市草原地域全体の住居の特徴を出し、そして相違点や共通点を検討する。

第7章では、第3章から第6章までの要約と今後の課題を述べる。

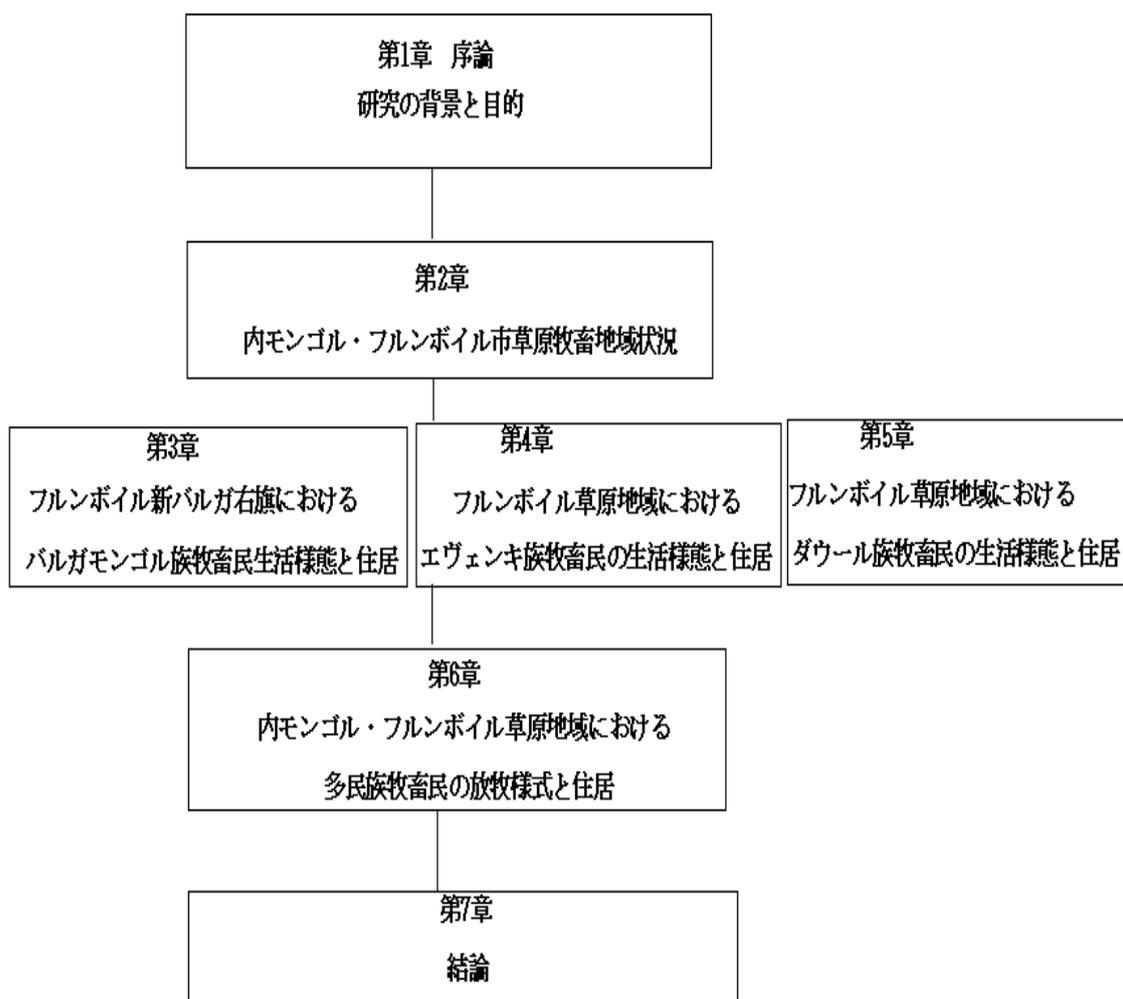


図 1-2 論文構成

## 注

- 注 1 中国内モンゴル自治区の行政区画は上位から順に自治区>盟、盟級市>区、県級市、旗、自治旗>鎮、ソム、郷>ガチャである。ソムはモンゴル語で、内モンゴルで使われている。郷は面積や人口が鎮、ソムより少なく、経済発展が弱い行政区画である。ガチャは最下位の行政で、村に相当する。フルンボイル市は盟級市である。
- 注 2 八旗とは、清朝がモンゴル遊牧社会を統治するためモンゴル民族に実施した「八旗制度」である。具体的にはモンゴル族を正黄、鑲黄、正白、鑲白、正紅、鑲紅、正藍、鑲藍の8旗に分け統治した。
- 注 3 バルガモンゴル族とは、モンゴル族を構成する部族の一つで、主に中国内モンゴル自治区フルンボイル市新バルガ右旗、新バルガ左旗、陳バルガ旗に分布する。
- 注 4 エヴェンキ族とは、ツングース系民族の一つで、中国内モンゴル自治区フルンボイル市エヴェンキ族自治旗に居住している。
- 注 5 バヤンタラダウール民族郷は、エヴェンキ族自治旗の北に位置し、旗の中で一番ダウール族が集住している。主に放牧業を営んでいる。
- 注 6 シャランジュはエヴェンキ族の伝統的な住居で、木の棒を三本斜めにかけて組み立てる、その上に木の棒を載せ、さらにその上に白樺などの木の皮や動物の皮などをかぶせたものである。
- 注 7 バイシンとはモンゴル語で平屋のことである。草原で牧畜業をしている牧畜民は移動式住居と固定式住居を使っている。移動式住居はゲル、固定式住居はバイシンと呼ばれる。バイシンは、レンガ、木、石等の材料で建てられている固定式一階建ての建築物である。

## 文献

- 1) 中国旅游资讯 “呼伦贝尔市行政区划・交通地图・人口面积・历史变革・旅游”  
<http://www.365135.com/neimenggu.hulunbeier.shtml> (2021/9/12 閲覧)
- 2) 中华人民共和国中央人民政府 “内蒙古・呼伦贝尔市・乡镇介绍・巴彦塔拉达斡尔族乡”  
<http://www.365135.com/neimenggu/hulunbeier01/1325.shtml> (2021/2/20 閲覧)
- 3) INAX ギャラリー企画委員会編：遊牧民の建築術 ゲルのコスモロジー，INAX ギャラリー，1993
- 4) 中国人民政治協商会議 東烏珠穆沁旗委員会：蒙古包文化，内蒙古科学技術出版社，1996
- 5) 田中暎郎：中国内モンゴル自治区の地域性と各地モンゴル民族の民居，ゲル，宗教建築の現状について(その1)，日本建築学会技術報告集，第10号，2000
- 6) Ba・布和朝魯：蒙古包文化，内蒙古人民出版社，2003
- 7) 乾尚彦：モンゴルゲル，新建築住宅特集 48，1990
- 8) Rincin：Mongol ger yin soyol (モンゴルゲルの文化)，内蒙古科学技术出版社，1996
- 9) Maidar, D・Darisuren, L：Ger oron suutsny tuukhen toim, Ulaanbaatar, 1976
- 10) G・Sharabdorji：Mongol ger, Ulaanbaatar

- 11) 楊海英:天幕に表象される宇宙観, 小長谷有紀・楊海英編著:草原の遊牧文化 大モンゴル展によせて, 財団法人千里文化財団, 1998
- 12) 伊東恒治:北支蒙疆の住居, 弘文堂書房, 1943
- 13) 内蒙古自治区編輯組 中国少数民族社会歴史調査資料叢刊修訂編輯委員会:鄂温克族(エヴェンキ)社会歴史調査, 民族出版社, 2009
- 14) 黄任远・那晓波:走进中国少数民族丛书 鄂温克族(エヴェンキ), 黑龙江省社会科学院, 2011
- 15) 鄂温克旗(エヴェンキ)自治旗概況編集組 鄂温克旗(エヴェンキ)自治旗概況修訂本編輯組:内蒙古鄂温克族(エヴェンキ)自治旗概況, 民族出版社, 2007
- 16) 涂建軍:天辺那旬麗的彩虹—鄂温克族(エヴェンキ)族風情, 2014
- 17) 毅松:走进中国少数民族丛书达斡尔族(ダウール), 辽宁民族出版社, 2012
- 18) 毅松:春天里盛開的映山紅—达斡尔族(ダウール)風情, 内蒙古人民出版社, 2013
- 19) 毛艳・毅松:达斡尔族(ダウール)内蒙古莫力达瓦旗哈力村调查, 云南大学出版社, 2003
- 20) 内蒙古自治区編輯組 中国少数民族社会歴史調査資料叢刊修訂編輯委員会:达斡尔(ダウール)族社会歴史調査, 民族出版社, 2009.
- 21) 海日汗:モンゴル族住居の空間構成概念に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 579, pp. 179-186, 2004
- 22) 野村理恵・中山徹:年間を通じたゲルと固定家屋の利用実態 中国・内モンゴル自治区ウジュムチン旗における牧畜民の定着化と居住環境変化, 日本建築学会, Vol. 654 No. 1 p. 1917, 2010
- 23) 野村理恵・今井範子・中山徹:中国内モンゴル自治区砂漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第1報) アラシャ盟における環境政策による居住地移動と生活様態の変化, 家政学研究(奈良女子大学), Vol. 56 No. 2 pp. 39-48, 2010
- 24) 阿榮照樂・中山徹:内モンゴルゴビ草原における牧畜民の固定家屋(バイシン)の現状とその間取り, 日本家政学会誌, vol. 69(6), 448-461, 2018
- 25) イジョウ・中山徹:ヒンガン盟右翼前旗タブングルガチャにおけるモンゴル族の住居に関する研究—内モンゴル・ホルチン半農半牧地域を事例として, 日本家政学会誌, vol. 69, 44-59, 2018
- 26) 色音:蒙古遊牧社会的変遷, 内蒙古人民出版社, 1998
- 27) 馬洪祥:呼倫貝爾旅蒙商, 内蒙古文化出版社, 2010
- 28) 大竹昌巳:ダグール語音韻史の再構成, 古代文字資料館, 2013.
- 29) 恩和巴図:達斡爾語詞, 中国人民出版社, 1984.
- 30) 孟志東:達斡爾族研究第三輯, 内蒙古達斡爾歴史語言文学学会出版, 1989.
- 31) 孟志東:中国達斡爾古籍彙編, 内蒙古文化出版社, 2007.
- 32) 勝紹箴, 蘇都爾, 董瑛:達斡爾族文化研究, 遼寧民族出版社, 2014.
- 33) 戴嘉艷:生存智慧与文化選択, 民族出版社, 2014.
- 34) 薩敏娜:達斡爾斡米南文化的觀察与思考 以沃菊芬的儀式為例, 民族出版社, 2011.
- 35) 池尻登:達斡爾族・満州事情案内所, 康德十年 1943.

- 36) 孔繁志:敖鲁古雅的鄂温克(エヴェンキ)人,天津古籍出版社,1994
- 37) 吴守贵:鄂温克族社会历史,民族出版社,2012
- 38) 新巴尔虎右旗志編纂委員会:新巴尔虎右旗志,内蒙古文化出版社,2011
- 39) フフバートル:モンゴル語基礎文法,株式会社インタブックス,1993
- 40) 斯琴托亜・中山徹:フルンボイル草原地域におけるモンゴル族牧畜民の住居間取りの変容と生活様態について—フルンボイル市新バルガ右旗を事例として,奈良女子大学家政学会誌,Vol.64,21-32,2017
- 41) 斯琴托亜:内モンゴル草原地域におけるエヴェンキ族牧畜民の住居変容と生活様態—フルンボイル市エヴェンキ族自治旗輝ソムを事例に,日本家政学会誌,Vol.70,346-360,2019
- 42) 斯琴托亜・中山徹:草原地域におけるダウール族牧畜民の生活様態とバイシンの間取り変容—フルンボイル市・エヴェンキ族自治旗バヤンタラダウール族民族郷を事例に,日本家政学会誌,Vol.73,715-730,2022
- 43) 内蒙古自治区地図集:中国地図出版社,2006

## 第2章 フルンボイル草原地域における多民族の概況

### 2.1. 本章の目的

フルンボイル草原は4つの旗、新バルガ左旗、新バルガ右旗、陳バルガ旗、エヴェンキ族自治旗に広がっている。フルンボイル市は内モンゴル自治区の中で最も少数民族が多く混住しているところである。陳バルガ旗では最初に移住してきたバルガモンゴル族が居住している。新バルガ左旗、新バルガ右旗では2回目に移住してきたバルガモンゴル族が居住している。エヴェンキ族自治旗の北部に位置するバヤンタラダウール民族郷では、ダウール族が居住している。旗の西部に位置する輝ソムではエヴェンキ族が居住している。

本章では、草原地帯における異なる3民族の歴史背景を踏まえた上で、現在の基本状況、牧畜地概況を把握することを目的とする。



写真 2-1 フルンボイル市新バルガ右旗の草原 2013年6月筆者撮影

## 2.2.歴史背景

1683年に、清朝とロシアが黒龍江（アムール川）の北東で戦いがあった。その戦いの後、北へロシア領域に入って暮らしたのは、ブリヤードモンゴル族で、ロシアでもなく、満州でもなく、モンゴル国ハルハに移住したのはバルガモンゴル族だった。このバルガモンゴル族は1734年にハルハのツェツェン汗部からフルンボイル市に移住した。後に新バルガと名付けられた。

1732年に、清朝がオロチョン族 359人、ソロン（エヴェンキ族）1636人、ダウール族 730人、バルガモンゴル族（ホーチン）275人を選んで左翼に4つの旗を組んで、ロシアが侵攻してくる道を防ぐために清朝とロシアの国境で駐屯させた。また右翼に4つの旗を作ってハルハ川までのモンゴル国と清朝の国境で駐屯させられた。この時のバルガモンゴル族は陳バルガ（ホーチン）モンゴル族である。<sup>1)</sup>

呂光天によれば、エヴェンキ族は紀元前二千年前に今のロシア領域のバイガル湖周辺に生存していた<sup>2)</sup>。その後、ロシア人の弾圧により、狩猟と遊牧を生業としながら南下する。400年以上前から今の黒龍江（アムール川）流域の大小興安嶺のなかで狩猟を生業として生存していた。清朝時代に入ると、清朝からの統治により“八旗制”編成され、1732年に国境兵としてハイラル、輝河、伊敏河周囲に長期駐屯させられる<sup>3)</sup>。輝ソムに移住してきたエヴェンキ族がそのモンゴル族の人々と親密な関係を結び草刈りと放牧の技術や経験、乳製品の製造などをモンゴル人に教わっていた。

ダウール族は、1644年以降に黒龍江（アムール川）北岸から嫩江流域へ移住し始める。黒龍江北岸にいたときは、狩猟、農業、漁業をして生業をたてていた。フルンボイル市に移住したあとは、農産物をチチハル地域から入手していた。農産物の価格高騰が原因で、農業が始まるが鉄道の通運で農作物が安く手に入るようになると再び農業をやめ、自家用菜園を持つようになる。また、牧畜業が盛んになり、家畜で農産物を物々交換ができる。清朝初期に、漢人農民の入植や土地開墾が政府によって禁止されていたが、20世紀初期、土地開墾移民政策が実施され、大量の漢族農民が流入した。これによってダウール族の農業生産が発展したが、もともと多様な経営生産方式が融合したダウール族と漢族農民の間に矛盾ができる。それは、主に農業をする漢族は住居周辺を囲むように田んぼを作る。ただし、ダウール族は住居周辺地に家畜を放して、放牧地、草刈地と農地は離れた場所に設置するため、住居周辺の家畜が漢族農民の田んぼを曝すことが多かった<sup>4)</sup>。

### 2.3.フルンボイル草原地域の牧畜業を営む3民族の基本状況

(表 2-1) から見れば、3 民族とも今のモンゴル国、ロシア、中国東北地帯から南下した民族である。異なるのはフルンボイル市に移住してきた年である。

フルンボイル市新バルガ右旗のバルガモンゴル族は 28, 489 人、エヴェンキ族自治旗のエヴェンキ族は 9, 000 人、エヴェンキ族自治旗のダウール族は 14, 239 人である。

生業は、バルガモンゴル族とエヴェンキ族は昔から狩猟、漁業、遊牧を生業としていた。ダウール族は狩猟、農業、牧業を生業していた。現在は 3 民族とも牧業を営んでいる。

フルンボイル市草原地域における主な居住地は、バルガモンゴル族は、陳（ホーチン）バルガ旗、新（シン）バルガ右（左）旗に集住している。エヴェンキ族はエヴェンキ族自治旗の輝ソム、オロチョン族自治旗、アロン旗、ジャラントン旗、陳バルガ旗、モリンダワダウール族自治旗、アルグン市、ハイラル区に分布している。ダウール族は、エヴェンキ族自治旗のバヤンタラダウール民族郷、オロチョン族自治旗、アロン旗、ジャラントン旗、陳バルガ旗、モリンダワダウール族自治旗、エルグナ旗、ハイラル区、新バルガ右旗、新バルガ左旗に集住している。

移住してきた年と元の居住地はそれぞれ違う。バルガモンゴル族は、1732 年に陳バルガ旗に移住し、1734 年にモンゴルツェツェン汗部から新バルガ右（左）旗に移住してきた。エヴェンキ族は、ソロンエヴェンキ 1732 年、トゥンス（ツングース）エヴェンキ 1918 年とヤクトエヴェンキ 1820 年に 3 部族が三段階に分けてバイガル湖の北東レナ下流域からフルンボイル市に移住してきた。1732 年にロシアと清朝国境で駐屯させられたダウール族がフルンボイル市に移住してきたが、エヴェンキ族自治旗には 1957 年の中華人民共和国時代に移住してきた。

言語は、エヴェンキ族とダウール族はアルタイ語系—ツングース語族に属し、バルガモンゴル族はアルタイ語系—モンゴル語族である。3 つの民族の共通言語はモンゴル語と中国語である。これ以外にダウール族はダウール語、エヴェンキ族はエヴェンキ語を話す。

調査対象地である新バルガ右旗、エヴェンキ族自治旗輝ソム、エヴェンキ族自治旗バヤンタラダウール民族郷はフルンボイル市の草原地帯に位置し、すべてが放牧を行っている。3 か所で全 58 世帯によって測量と聞き取り調査を行った。

表 2-1 フルンボイル市のバルガモンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族の基本状況

人口	新バルガ右旗(バルガモンゴル族)	28.489人
	エヴェンキ族自治旗(エヴェンキ族)	9.000人
	エヴェンキ族自治旗(ダウール族)	14.239人
主な居住地	バルガモンゴル族	新バルガ右旗、新バルガ左旗、陳バルガ旗、
	エヴェンキ族	エヴェンキ族自治旗、オロチョン自治旗、アロン旗、ジャラントン旗、陳バルガ旗、モリンドワダウール族自治旗、アルグン市、ハイラル区
	ダウール族	エヴェンキ族自治旗、オロチョン旗、アロン旗、ジャラントン旗、陳バルガ旗、モリンドワ旗、エルグナ旗、ハイラル区、新バルガ左旗と右旗
移住した年	バルガモンゴル族	1732年ホーチン・バルガ、1734年シン・バルガ
	エヴェンキ族	ソロンエヴェンキ1732年、ヤクトエヴェンキ1820年、トウングスエヴェンキ1918年
	ダウール族	1957年～
元の居住地	バルガモンゴル族	モンゴル国ツェツェン汗部
	エヴェンキ族	バイガル湖東北レナ下流域
	ダウール族	黒龍江(アムール川)北部
生業	バルガモンゴル族	狩猟、漁業、遊牧から牧業
	エヴェンキ族	狩猟、漁業、採集から牧業、農業に変化
	ダウール族	狩猟、農業・牧業
言語	バルガモンゴル族	アルタイ語系—モンゴル語族
	エヴェンキ族	アルタイ語系—満・ツングース語族
	ダウール族	アルタイ語系—満・ツングース語族

出典：参考文献 3)、4)、5)、6) のデータをもとに筆者作成

### 2.3.1.バルガモンゴル族の牧畜民の概況

フルンボイル市新バルガ右旗は、フルンボイル市の西部に位置し、南と西はモンゴル国と北はロシアと接している。ここは主にバルガモンゴル族が暮らしている。フルンボイル市で、バルガモンゴル族は、新バルガ右旗、新バルガ左旗、陳バルガ旗に分布している。

2010年の右旗の総人口は35,009人で、そのうちモンゴル族は28,489人、総人口の81.4%を占める。漢族は5,953人で総人口の17.0%を占める。そのほか回族・満族・ダウール族・朝鮮族・エヴェンキ族・オロチョン族など12の民族が居住している。旗の総面積は25,102 km<sup>2</sup>である。東西に最長168.34 kmで、南北最長245 kmである。気候は、半乾燥地域で年間平均降水量は262.3 ml、年間平均気温は1.1℃で、春(4月～5月)の平均気温は7.8℃、夏(6月～8月)の平均気温は19.8℃、秋(9月～10月)の平均気温は6.9℃、冬(11月～3月)の平均気温は-19.3℃である。右旗の行政公署所在地はアラタンエメル鎮にあり、右旗は2ソム(ボイル boyir、ケルルン herulun)と3鎮(アラタンエメル alatanemegel、フルン hulun、アルハシャト aruhashiyatu)、1牧場(オルジン orjin)を管轄する<sup>5) 6)</sup>。

### 2.3.2.エヴェンキ族の牧畜民の概況

エヴェンキ族自治旗はフルンボイル市の南部に位置している。フルンボイル市では、エヴェンキ族が、エヴェンキ族自治旗、陳バルガ旗、モリンダワー・ダウール族自治旗、アロン旗、オロチョン族自治旗、ジャラントン旗、アルグン旗、ハイラル区などに分散して暮らしている。総人口は149,600人(エヴェンキ族は9,000人)である。総面積は19,100 km<sup>2</sup>である。東西に最長173.25 kmで、南北に187.75 kmである。気候は、半乾燥大陸性気候で風が多い。地勢は、東南が高く低い山と丘陵で標高800～1000 m、北西に向かって標高602 mになっている。旗は4つの鎮(バヤントへ bayantoqai、イミン imin 河、紅花、大雁)、1つの民族郷(バヤンタラ bayantala・ダウール民族郷)、5つのソム(輝、イミン、バヤンチャガン bayančagan、シニへ siniken 東、シニへ西)にわかれる。

輝ソム総面積は2,855 km<sup>2</sup>である。271世帯1345人である。エヴェンキ族は1,134人(84.31%)、エヴェンキ族以外はモンゴル族159人(11.82%)、漢民族23人(1.71%)、ダウール族26人(1.93%)、オロチョン族3人(0.22%)など21の民族が居住している<sup>7)</sup>。

### 2.3.3.ダウール族の牧畜民の概況

バヤンタラダウール民族郷はエヴェンキ族自治旗の北部に位置し、総面積は418.4 km<sup>2</sup>、東西距離は24.2 kmである。フルンボイル市では、ダウール族が、アロン旗、オロチョン族自治旗、ジャラントン旗、モリンダワー・ダウール族自治旗、陳バルガ旗、エルグナ旗、新バルガ右旗と左旗、アルグン旗、などに分散して暮らしている。フルンボイル市で暮らすダウール族は70,287人である。

総人口は2,198人(2006年の調査による)、そのうち1,489人はダウール族で総人口の

66.3%である。気候は、冷温帯の大陸性気候である。年間平均気温は-2.4℃、年間降水量は300～450 mmで、無霜期間は113日である。

郷にはバヤンボラル (bayanbulag)、バヤンノール(bayannagur)、バヤンチョグ (bayančog)、バヤンウンドゥル(bayanöndör)、バヤンイラン(bayanilan)、バヤンナウエン (bayannawen)の6つのガチャがある<sup>8)</sup>。



図 2-1 調査対象地域の位置図

出典：内蒙古自治区地図集：中国地図出版社、2006年<sup>9)</sup>をもとに筆者作成

表 2-2 フルンボイル地域の概況

調査地	総面積(km <sup>2</sup> )	総人口(%)	放牧地(km <sup>2</sup> )	羊(頭)
新バルガ右旗ボイルソム	1848.33km <sup>2</sup>	1656人	1681.6km <sup>2</sup>	8.69万
		モンゴル人1609人		
		97%		
エヴェンキ族自治旗輝ソム	3028.1km <sup>2</sup>	4778人	1924.13km <sup>2</sup>	18.8万
		エヴェンキ人2879人		
		61.80%		
エヴェンキ族自治旗バヤンタラ郷	419.3km <sup>2</sup>	2520人	370.2km <sup>2</sup>	2.53万
		ダウール人1512人		
		62.40%		

参考文献 3)、4)、5)、6) のデータをもとに筆者作成

調査地である新バルガ右旗のボイルソム、エヴェンキ族自治旗の輝ソムとバヤンタラダウール民族郷では、総面積と放牧地が一番広く、羊頭数が一番多いのは輝ソムである。ボイルソムでは、総人口の97%がモンゴル人で、輝ソムのエヴェンキ族とバヤンタラダウール民族郷のダウール族は総人口の60%以上を占める。

#### 2.4. まとめ

本章では、本論文の対象地として選定したフルンボイル市は、広大な草原面積を有りして

おり、昔から現在に至るまで多民族が牧畜業を生業とし維持してきたところである。18 世紀から続々移住してきた 3 民族の基本情報である人口、主な居住地、元の居住地、移住した年、生業と言語をまとめて整理した。そこで、3 民族とも移住した年が異なり、生業も異なっていたが、共通語としてモンゴル語を話し、牧畜業を営んでいる。

#### 参考文献

- 1) 巴达玛旺钦编辑整理：呼伦贝尔三部落源流，内蒙古文化出版社，2013
- 2) 涂建軍：天边那绚丽的彩虹—エヴェンキ族風情，内蒙古人民出版社，2014
- 3) 内蒙古鄂温克族自治旗概况：民族出版社，2007
- 4) ダウール族社会歴史調査：民族出版社，2009
- 5) 新巴尔虎右旗志：内蒙古文化出版社，2011
- 6) 新巴尔虎右旗年鉴：黒竜江省教育庁印刷社，2011
- 7) 前掲 3)
- 8) 前掲 4)
- 9) 内蒙古自治区地图集：中国地图出版社，2006

## 第3章 新バルガ右旗におけるバルガモンゴル族牧畜民の住居と生活様態

### 3.1.本章の目的

フルンボイル市新バルガ右旗は、フルンボイル市の西部に位置し、南と西はモンゴル国、北はロシアと接している。ここは主にバルガモンゴル族が暮らしている。調査対象地である右旗では2回に渡り土地分配政策\*1が実施された。土地分配政策は放牧方式の変化に影響を与えていると考える。

本研究では、①放牧方式と住居の関連②バイシンの平面分類と居室の利用用途、呼び名③暖房の種類と暖房と平面関係を明らかにする。

### 3.2.調査地の概要



図 3-1 フルンボイル市新バルガ右旗アラタンエメル鎮

出典：「内蒙古自治区地図集：中国地図出版社, 2006 年第 9 版, p. 53」をもとに筆者作成

2010 年の右旗の総人口は 35,009 人で、そのうちモンゴル族は 28,489 人、総人口の 81.4% を占める。漢族は 5,953 人で総人口の 17.0% を占める。そのほか回族・満族・ダウール族・朝鮮族・エヴェンキ族・オロチョン族など 12 の民族が居住している。右旗の行政公署所在地はアラタンエメル鎮にあり、右旗は 2 ソムと 3 鎮、1 牧場を管轄する。

2013 年 6 月 19 日から 7 月 4 日までの 2 週間、右旗の 19 世帯\*2 を対象として、聞き取り調査及び敷地、住居の実測調査を行った。

### 3.3.牧畜民の実態

#### 3.3.1. 家族の基本状況

聞き取り調査から新バルガ右旗のアラタンエメル鎮の 19 世帯の家族基本情報を作成した(表 3-1)。表は家族構成、家族数、世帯主年齢、民族、副業、敷地、家畜、現在所有している住宅の 8 項目に分けた。家族構成は同居している家族である。家族数は最大で 6 人、

少なくで1人である。世帯主の最高年齢は77歳、一番若い世帯主の年齢は28歳である。民族は世帯主の民族であり、19世帯の世帯主すべてがバルガモンゴル族である。

敷地について、土地分配政策によってすべてが所有しているが、敷地は放牧地<sup>\*3</sup>と草刈地<sup>\*4</sup>の2種類に分けられている。放牧地の所有は100%で、草刈地は半数以上が所有していない。事例④⑤⑥⑧⑩⑪⑫⑬⑮⑯である。牧業をしながら副業をしているのは事例⑦⑱である。五畜<sup>\*5</sup>のうち羊・牛・馬3種類の家畜を飼っている。事例⑨は牛を飼っていない。事例⑦は羊を飼っていない。事例③④⑦⑨⑪⑫⑭は馬を飼っていない。現在所有している住宅はバイシン・ゲル・市街住宅の3種類である。バイシンを所有していないのは事例④⑩である。バイシンの築年数から見ると一番古く建てられたのは1980年で、一番新しく建てられたのは2011年である。ゲルを所有していないのは事例③である。ゲルを1個以上所有しているのは事例⑨⑯⑰⑱である。市街地住宅を持っているのは事例①④⑦⑰⑱である。

表 3-1 家族基本情報

事例	世帯基本情報				生業		敷地面積(ム)		五畜種類(頭)			現在所有住宅状況				
	家族構成	家族数	世帯主年齢	民族	牧業	副業	牧草地	草刈地	牛	羊	馬	バイシン	築年数	ゲル	個数	その他住居
1	祖父母+父母+子2	6	51	モンゴル	○	—	15,700	1,000	70	320	15	あり	1980	あり	1	1
2	父母+子2	4	48	モンゴル	○	—	12,000	2,500	45	600	18	あり	1985	あり	1	—
3	祖母+子1	2	59	モンゴル	○	—	8,000	2,000	16	460	—	あり	1985	—	—	—
4	祖母+夫婦+子2	5	62	モンゴル	○	—	6,000	—	10	330	—	—	—	あり	1	1
5	祖母+父母+子1	5	58	モンゴル	○	—	10,024	—	50	520	20	あり	1984	あり	1	—
6	父母+子1	3	28	モンゴル	○	—	2,000	—	26	150	13	あり	2011	あり	1	—
7	祖父母+父母+子1	5	54	モンゴル	○	△	9,060	3,000	20	—	—	あり	1987	あり	1	1
8	父母+子1	3	44	モンゴル	○	—	6,112	—	40	500	15	あり	1994	あり	1	—
9	祖母+父母+子1	4	62	モンゴル	○	—	4,000	1,000	—	300	—	あり	1990	あり	2	—
10	祖父母+子1	3	57	モンゴル	○	—	12,000	—	60	400	3	—	1986	あり	1	—
11	祖父	1	77	モンゴル	○	—	11,000	—	70	320	—	あり	2002	あり	1	—
12	父母+子3	5	46	モンゴル	○	—	11,000	—	25	260	—	あり	2003	あり	1	—
13	父母+子2	4	49	モンゴル	○	—	12,000	—	40	510	6	あり	2007	あり	1	—
14	父母+子2	4	48	モンゴル	○	—	11,000	3,000	45	350	—	あり	1984	あり	1	—
15	父母+子2	4	43	モンゴル	○	—	13,141	—	10	80	2	あり	2007	あり	1	—
16	祖母+子1	2	63	モンゴル	○	—	20,000	—	70	1300	55	あり	1999	あり	2	—
17	祖父母+父母+子2	6	75	モンゴル	○	—	27,000	1,000	100	340	63	あり	1982	あり	4	1
18	祖母+父母+子1	4	53	モンゴル	○	—	19,000	5,000	57	380	30	あり	1986	あり	1	—
19	祖父母+父母+子2	6	59	モンゴル	○	△	9,000	2,000	12	700	27	あり	1995	あり	5	1

\*事例10はバイシンを売ってしまい今ゲルだけの生活を行っている

\*1畝=666.67m<sup>2</sup>

### 3.3.2. 放牧様式と住居の現状

放牧様式は季節ごとに敷地を換えて放牧を行っている(表 3-2)。その敷地を分類すると以下の①から④になる。

表 3-2 季節放牧による住居の変化

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	禁牧	休牧
1	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
2	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
3	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
4	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
5	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
6	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
7	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬	★	
8	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
9	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		★
10	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
11	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
12	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
13	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
14	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		★
15	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		★
16	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		★
17	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		★
18	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
19	春	春	春	春	春	夏	夏	夏	夏	秋	秋	冬		
★禁牧・休牧政策														
春营地(拠点)						夏营地			秋营地			冬营地		

①年間通じて1箇所放牧：1年間春营地<sup>\*6</sup>（拠点）で暮らし、日帰り放牧<sup>\*7</sup>だけを行う（事例③⑦⑭）。以下春营地を拠点<sup>\*8</sup>と表現する。

②年間通じて2箇所放牧：1つは、拠点以外に夏营地を設け、夏の間はゲルを使って夏营地に移動するもの。夏以外は拠点で放牧する（事例①⑨⑪⑱）。もう1つは、拠点以外に冬营地を設け、冬の間は冬营地に移動するもの（事例④）。

③年間を通じて3箇所放牧：1つは、拠点以外に夏营地と冬营地を設けるもの（事例⑤⑥⑫⑰）。もう1つは、拠点以外に夏营地と秋营地を設けるもの（事例⑬⑯⑲）。

④年間通じて4箇所放牧：拠点以外に夏・冬・秋の3つの季節に营地を設置し、年間を通じて4箇所放牧を行うもの（事例②⑧⑩⑮）。季節放牧<sup>\*9</sup>によって、住まいも変化する。放牧が年間を通じて1箇所（拠点）放牧の場合はバイシンとゲル両方を固定して使用する。ゲルは夏に夏用キッチン、客用寝室として使用している。冬は倉庫用として使用している。拠点以外で放牧する場合は、移動先である夏营地、冬营地、秋营地でゲルを持って2、3ヶ月間家畜と一緒に滞在する。拠点に戻った場合ゲルをバイシンの近くに建て、キッチンまたは倉庫として使用する。

禁牧と休牧とは2003年ころから実施した国家政策である。禁牧は一年を通して分配された敷地内に家畜を放牧できない。牧民と国の間で5年間もしくは10年間の契約を結び1畝(6.66㎡)あたり国から補助金として7元支払われる。禁牧をしているのは事例⑦である。

事例⑦は家畜のうち羊は全て親戚に頼んで飼ってもらっているが、牛だけは拠点の周辺で放牧している。事例⑭も休牧中のため拠点の周辺で放牧を行っている。事例⑮は夏営地と秋営地に敷地を利用している(秋に家畜を敷地内で放牧してはいけないが、家畜の数が多く、国からの補助金だけで餌代が足りないため放牧を行っている)。冬には合作社\*10の仲間の土地を利用している。事例⑯は事例⑮と同じ夏と秋に敷地を利用している。事例⑮と同じで、秋にはやむを得ず敷地で放牧している。事例⑰は夏に敷地を利用しているが、冬はガチャの土地を借りて放牧している。馬はソム範囲内の土地で自由に放している。

春は家畜の出産時期なので移動しない。畜舎を備えた拠点で出産を迎えるのが望ましい。そのため春には19世帯全てが移動せず拠点である固定住居バイシンで過ごす。

夏営地に移動してないのは事例③④⑦⑭である。事例③と事例④事例⑭は労働力不足、家畜数が少ないため移動しなくても拠点周辺の牧草が十分であると考えられる。事例⑦は牛だけを飼っているため夏営地へ移動してない。

秋営地に移動してないのは①③④⑤⑥⑦⑨⑪⑫⑭⑰⑱である。秋営地を草刈地としている世帯が多く、9月には秋営地で草刈をする。秋営地の草を冬の餌として刈って畜舎に蓄えておくため家畜を敷地内の拠点周辺で放牧している。秋営地に移動しているのは事例②⑧⑩⑬⑮⑯⑲である。草刈地が敷地以外の場所に設けている場合と草刈地を元々設けていない場合がある。草刈地を設けてない事例は冬に冬営地を設け、冬に食べる草を購入している。事例⑦⑨⑭⑰は禁牧休牧のために秋営地に移動していない。

冬に冬営地へ移動していないのは事例①③⑦⑨⑪⑬⑭⑯⑱である。これらは、分配された敷地が少なく、禁牧政策を受けているものと労働力の不足から移動することができないなどの理由である。そのため秋に刈った草や購入してある餌を拠点の畜舎のなかで家畜に与える。ただし、冬は降雪量によって移動するかしないかを年ことで決める家庭もいる。

### 3.3.3. 家族の移動状況

牧民は、草原と市街地の2箇所之家を持つ場合が多い。調査対象になった牧民の年齢によって50歳以上の方を祖父母世代、30代から40代の方を父母世代、高校生までの子を子ども世代に分類した。そして、祖父母・父母・子どもの世帯を(A)、祖父母・父母の世帯を(B)、父母・子どもの世帯を(C)、祖父母の世帯を(D)と父母の世帯を(E)の5つのタイプに分けた。

表 3-3 家族の移動状況

	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	事例	
A	a 市街	x	x	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	x	①⑱	
	草原	◎●○	◎●○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎●○		
	b 市街	x	x	◎●	◎●	◎●	◎●	x	x	x	◎●	◎●	◎●	⑰	
	草原	◎●○	◎●○	○	○	○	○	◎●○	◎●○	◎●○	○	○	○		
c 草原	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	◎●○	⑤⑨⑱	
d 市街	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	④	
草原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
B	e 市街	x	x	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	x	②	
	草原	◎○	◎○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎○		
f 草原	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎○	③⑱	
C	j 草原	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	◎●	⑥	
D	h 草原	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	⑪	
E	i 草原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑦⑧⑩ ⑫⑬⑭ ⑮	
		◎祖父母世代(50代以上) ○父母世代(30代から40代)					●子ども世代(高校生まで)					x市街住居を使っていない			
		Aタイプ—祖父母・父母・子ども			Bタイプ—祖父母・父母			Cタイプ—父母・子ども			Dタイプ—祖父母		Eタイプ—父母		

Aタイプは祖父母、父母と子どもがいる世帯である。aは12月から2月までの3ヶ月間、全員が草原の拠点で一緒に生活する。残りの3月から11月まで祖父母と子どもは市街地で暮らし、父母は草原で暮らす。子どもが勉学のために祖父母が市街地で世話をしなければならない。(事例①⑱)。bの場合、1月と2月の冬休み、7月から9月の夏休みには全員と一緒に草原で生活する(事例⑰)。cの場合は、子どもがまだ就学してないため一年を通じて全員が草原で生活している(事例⑤⑨⑱)。dの場合、一年中祖父母と子どもは市街地で暮らし、父母は草原で暮らしている(事例④)。タイプBは、祖父母と父母の世帯である。eの場合、12月から2月までには一緒に草原で暮らし(お正月があるため家族が集まって一緒に生活する)、3月から11月まで祖父母は市街地で暮らしている(事例②)。市街地のほうが娯楽、買い物、暖房などが充実しているため祖父母は市街地に暮らしている。fの場合は、祖父母と父母は一年を通じて草原で暮らしている(事例③⑱)。この場合、祖父母は牧畜にたずさわっている。タイプCは父母と子ども世帯で、一年中草原で暮らしている。若い夫婦で子どもは就学前である(事例⑥)。タイプDは祖父母世帯で、一年中草原で暮らしている(事例⑪)。タイプEは父母世帯であり、一年中草原で暮らしている。子どもたちは大学生で家を離れている(事例⑦⑧⑩⑫⑬⑭⑮)。

### 3.3.4. 土地利用と所有住居状況

1980年代と1990年代に2回に渡って土地分配政策が行われた。それによって、放牧する範囲が制限された。放牧地は、敷地内と敷地外の2種類に分けることができる。敷地内とは、分配された敷地内に拠点をづくり冬・秋・夏ごとに移動する場合は、敷地内に限定されるものである。(事例①②③④⑤⑥⑦⑨⑪⑫⑬⑭⑯⑰⑱)。敷地外は、分配された敷地以外の土地も使うものである。敷地外にはガチャが所有する土地、賃貸地、合作社が管理する土地がある(事例⑧⑩⑮⑰)(表3-4)。

表 3-4 敷地利用と住居状況

	敷地内				ガチャ所有土地			賃貸した土地				合作社管理土地		
	春	冬	夏	秋	冬	夏	秋	春	冬	夏	秋	冬	夏	秋
1	■		●											
2	■	●	●	●										
3	■													
4	●	●												
5	■	●	●											
6	■	●	●											
7	■													
8	■		●	●	●									
9	■		●											
10								●	●	●	●			
11	■		●											
12	■	●	●											
13	■		●	●										
14	■													
15	■		●									●		●
16	■		●	●										
17	■		●		●									
18	■		●											
19	■		●	●										
	■固定住居 バイシン				●移動住居ゲル									

事例④は敷地内でゲルだけを持って生活している。若い夫婦が結婚してすぐ市街地でマンションを買っていた。そこで祖父母と子どもが暮らしているが、若い夫婦2人は草原にバイシンを建てずゲルだけで、草原で家畜の世話をしながら市街地と草原地を行き来して生活している。事例③⑦⑭は敷地内で固定住居バイシンだけを所有している。事例③と⑭は労働力不足のため移動せず、拠点の周りで日帰り放牧を行っている。事例⑦は禁牧のため移動できずゲルを使っていない。ほかの敷地内の事例はゲルとバイシン両方を所有している。

敷地外で放牧している世帯の住居状況は以下の3つに分かれる。事例⑩はゲルだけを利用している。土地分配政策のときに夫がソムで働いていたため土地をもらえなかった。でも、ソムで働いていたということでソムの土地で固定バイシンがあった。退職後、夫一人の退職金で家族を養うことができないのでバイシンを売って、草原で他人の土地を借りて家畜を飼っている。そのため固定住居を建てることができず、一年中ゲルを使っている。事例⑧と⑰はゲルとバイシン両方を所有している。事例⑧は自分の敷地が狭いため、冬に敷地外でガチャの土地を借りている。事例⑰はガチャ長であるため便宜を測ってガチャの土地を使うことができる。ただし降雪量が多くて、敷地内の草が足りない場合、ガチャの土地を借りる世帯が生じる。事例⑮はゲルとバイシン両方を所有している。合作社政策を利用しているため、夏だけ自分の敷地内で放牧を行い、秋と冬は合作社の土地で放牧を行っている。自分の敷地内ではバイシン、合作社の土地ではゲルを使っている。

### 3.4. 牧畜民の住居

#### 3.4.1. バイシンの建設時期

拠点で所有している住居を年代別にまとめたのが（図 3-2）である。土地分配政策が実施される前は全ての事例がゲルを所有していた。第一次土地分配政策が実施されてから最初に建てた建物は日干しレンガでつくられた正方形の 1 室の固定バイシンである。それが、井戸管理人用に（事例⑧）、または倉庫用や冬用畜舎用に（事例⑦）に利用されていた。事例⑦は 1980 年代初めころに 1 室日干しレンガのバイシンを倉庫用に建てたが、後に住居として使うようになった。事例⑧は元々ガチャ政府の井戸があってその井戸の管理人が住む住宅として建てられたが、その後使わなくなり、事例⑧が買い取った。その後改造して暮らしている。

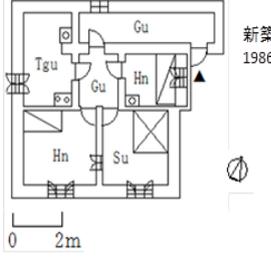
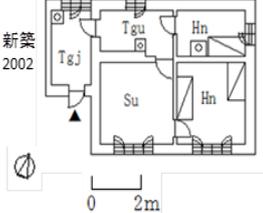
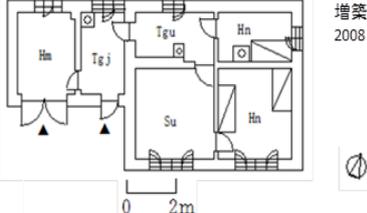
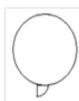
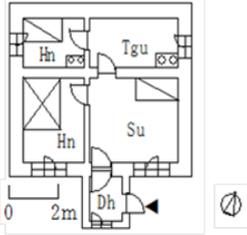
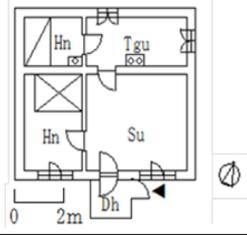
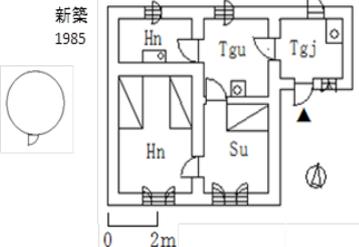
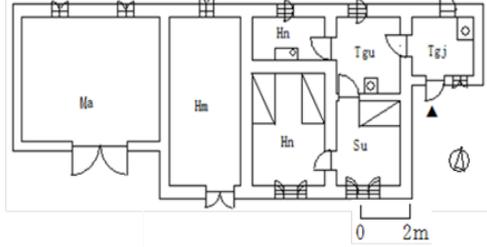
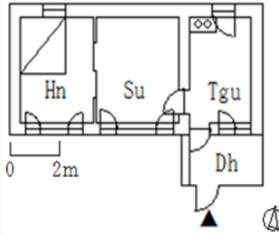
第一次土地分配政策を実施してから第二次土地分配政策が始まるまでに固定住居バイシンを建てたのは 19 世帯のなかで事例①②③⑤⑩⑭⑰⑱の 8 世帯である。他はゲルだけで生活していた。バイシンを建てた 8 世帯すべてがゲルとバイシンを併用している。

第二次土地分配以降に新しくバイシンを建てたのは事例⑦⑧⑯⑱の 4 世帯で、すべてがゲルを併用している。この時に、第一次土地分配政策以降に建てたバイシンを増改築したのは事例①②⑰⑱の 4 世帯である。事例①は西側に増築をして、入口を設置した。事例②は、東側に増築しているが部屋の一部も改築している。事例⑰は東側に夏用キッチンを増築した。事例⑱は、キッチンを北に大きくして、廊下と寝室の壁を潰して 1 つの広い客室に改造した。

2000 年代に入ると分配された敷地を鉄のフェンスで囲み始めた<sup>\*11</sup>。この時期に新しくバイシンを建てたのは事例⑥⑨⑪⑫⑬⑮⑰の 7 世帯である。事例⑰は第一次土地分配時に建てたバイシンを 2000 年以降になって、潰してないが使ってない。約 100 メートル離れたところで新しいバイシンを建てて使用している。

第一次、第二次土地分配時に建てたバイシンを増改築したのは事例③⑦⑭⑱の 5 世帯である。事例③は、東側に増築している。事例⑦は、母屋から離れて増築を行っている。事例⑭は、東側に入口を増築している。事例⑱は廊下をなくして客室を広くしている。

	土地分配 以前	第一次土地分配 1983年~1996年	第二次土地分配 1996年~2000年	土地圈封転移以降 2000年以降
1		 新築 1984	 増築 2001	 2000年以降
2		 新築 1983	 増築 2003	 2000年以降
3		 新築 1985	→	→
4				
5		 新築 1987	→	→
6	✕	✕	✕	 新築 2011
7			 新築 1999	→
8			 新築 1994	 増築 2003
9				 新築 2001

土地分配 以前		第一次土地分配	第二次土地分配	土地囲み政策実施以降
1983年以前		1983年～1996年	1996年～2000年	2000年以降
10		 <p>新築 1986</p>		
11			 <p>新築 2002</p>	 <p>増築 2008</p>
12				 <p>新築 2002</p>
13				 <p>新築 2003</p>
14		 <p>新築 1985</p>	 <p>増築 2005</p>	
15				 <p>新築 2007</p>

	土地分配以前	第一次土地分配	第二次土地分配	土地囲み政策実施以降
	1983年以前	1983年～1996年	1996年～2000年	2000年以降
16			新築 1999 	
17		新築 1982	増築 2010 	
18		新築 1986		改築 2009 
19			新築 1995 	改築 2011 
<p>Tgu⇒ウプリントゴン・ゲル（冬用キッチン） Tgj⇒ジョネトゴン・ゲル（夏用キッチン） Hn⇒ホノホ・ゲル（寝室） Su⇒ソーホ・ゲル（客室） Gu⇒ゴドムジ（廊下） Dh⇒ドハ（入口） Ug⇒オガーフ・ゲル（シャワー室） Ma⇒マシンネフムルグ（車庫） Hm⇒フムルグ（倉庫） ▲入口 ✖当時不存在 ○移動式住居 →そのまま続く / 火事で全焼</p>				

図 3-2 平面タイプ

### 3.4.2. バイシンの平面タイプ

タイプ		事例	図面	
廊下型	南北廊下 A	⑦ ⑧ ⑬ ⑰		
		② ⑩ ⑱		
非廊下型	2行4室 C	① ③ ⑤ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭		
		⑥ ⑨ ⑮		
Tgu⇒ウプリントゴン・ゲル(冬用キッチン) Tgj⇒ジョネトゴン・ゲル(夏用キッチン) Hn⇒ホノホ・ゲル(寝室) Su⇒ソーホ・ゲル(客室) Gu⇒ゴドムジ(廊下) Dh⇒ドハ(入口) Ug⇒オガーフ・ゲル(シャワー室)				

図 3-3 住居タイプ

平面を分類すると廊下型と非廊下型にわけられる。廊下型：入口からまず廊下(Gu)に入って、廊下から各室に入る。廊下は居室として使われてない。南北廊下型 A と東西廊下型 B がある。南北廊下型 A は事例⑦⑧⑬⑰で、東西廊下型 B は事例②⑩⑱である。南北廊下型 A は、第二次土地分配時に建てられた(事例⑦⑧⑬)。入口が南に設けられ、入口から入って南北に廊下がある。事例⑰は第一次土地分配時に建てられた。入口から入ってすぐ小さな玄関のようなスペースが設けられ、南北廊下が設置されている。東西廊下型 B の事例②⑩⑱は第一次土地分配政策のときに建てられ、事例⑱は第二次土地分配政策のときに建てられた。

非廊下型：廊下(Gu)がなく部屋から部屋へと通っていく。2行4室型 C、1行3列型 D の2種類がある。2行4室型 C は南に2室、北に2室と4室の構成である(事例①③⑤⑪⑫⑬⑭)。第一次土地分配以降に建てられたのは事例①③⑤⑭である。1行3列型 D は部屋が3つ東西に並んでいる(事例⑥⑨⑮)。第二次土地分配以降 2000 年代に建てられた。

表 3-5 年代別に見たバイシンのタイプ

年代区分 タイプ 事例	土地分配以前							第一次土地分配から第二次土地分配まで				第二次土地分配から土地囲み政策まで			土地囲封転移政策以降				
A								17						7	8	16			
B								2	10	18							19		
C								1	3	5	14						11	12	13
D																	6	9	15

(表 3-5) は年代別に建てられたバイシンのタイプである。土地分配以前すべてがゲルに住んでいた。第一次土地分配以前はバイシンを建ててなかった。第一次土地分配時以降、バイシンが普及し始めた。最初のバイシンタイプは 2 行 4 室 C 型が建てられたことが分かる。第二次土地分配から土地囲封転移政策実施までの間では、南北廊下型 A タイプが多くみられる。土地囲み政策以降は 2 行 4 室型と 1 行 3 列型が多いことが明らかになった。



写真 3-1 2 行 4 室型住宅  
2013 年 6 月筆者撮影



写真 3-2 1 行 3 列型住宅  
2013 年 6 月筆者撮影



写真 3-3 東西廊下型住宅  
2013 年 6 月筆者撮影



写真 3-4 南北廊下型住宅  
2013 年 6 月筆者撮影

バイシンの増築と入口に着目してみれば、第二次土地分配以降のバイシンに増築が見られる(事例①②⑧⑩⑭⑰)。増築部分がすべてバイシンの横に設けられている東西増築であることがわかった。入口はほぼ南向きで、バイシンの南または東西側に設置されている。ただし、事例⑫⑬は風除室に東向きで設置されている。

### 3.4.3.居室の利用用途と呼び名

廊下型（南北廊下型 A）：事例⑦⑧⑩⑭（写真 3-4）

基本的に事例⑦と事例⑧は同じ平面である。事例⑦は入口が南に設置され、入ってすぐ廊下(Gu モンゴル語でゴドムジ)がある。その北側に冬用キッチン(Tgu モンゴル語でウ布林・トゴンゲル)があり、調理だけを行っている。廊下(Gu)の西側は南北に並んだ寝室(Hn モンゴル語でホノホ・ゲル)である。キッチン(Tgu)から西に入った部屋を祖父母用寝室(Hn)に使用し、南に設置された部屋は夫婦用寝室として使われている。東側に客室(Su モンゴル語でソーホ・ゲル)を設置しているが、家族が食事をする場所としても使われている。事例⑧は、入ってすぐ廊下、その北にキッチン(Tgu)がある。食事や調理すべてを行っているスペースである。東側に客室(Su)と寝室(Hn)が南北に並んでいる。キッチン(Tgu)から東に入る部屋を夫婦用寝室(Hn)として使い、南にある部屋は客室(Su)として利用されている。廊下の西側にもう一つ寝室(Hn)が設けられ、子ども部屋として使われている。事例⑩は南の入口から入って廊下(Gu)が設置され、廊下を挟んで東に客室(Su)、西に寝室(Hn)がある。さらに廊下を進むと東に東西に並んで2つの寝室(Hn)が設けられ、西にキッチン(Tgu)が設置されている。廊下の奥にシャワー室(Ug モンゴル語でビエンウガフゲル)が設けられている。廊下から西南の部屋は客用の寝室(Hn)で、東南の部屋は客室(Su)であり客を招待し、食事をする場所として使われている。廊下から北西の部屋はキッチン(Tgu)調理用に利用している。客室の北に並べている2つの寝室は祖母用寝室と夫婦用寝室として使われている。事例⑭は入口から入って玄関(Dh 現地の言葉でドハ)が設置されている。ドハ(Dh)から北に廊下が設置され、廊下を挟んで東に南北並んで北は祖父母用寝室(Hn)、南は寝室と名付け客用に使われている。西に南北並んで北は冬用キッチン(Tgu)で調理と食事を行う場所である。南は夫婦用寝室(Hn)が設けられている。

廊下型（東西廊下型 B）：事例②⑩⑭⑱（写真 3-3）

事例②と⑩は基本的に同じ平面である。事例②は東に入口(Dh)を設置し、入口から入って東西廊下(Gu)がある。廊下には洗濯機や洗面用の器具が置かれている。廊下(Gu)を通過して南へ入るともう1つの廊下(Gu)が設置され、廊下の東に祖父母が使う寝室(Hn)がある。西の部屋は冬用キッチン(Tgu)で調理と食事用に使われている。廊下から南に東西に並んで2つの寝室(Hn)が設置されている。南東部屋は子ども部屋用に設置したが、子どもたちが大きくなって嫁いたため、今は夫婦用寝室(Hn)として使われている。隣は客室に使われている。事例⑩は東に入口(Dh)が設けられ、そこから廊下(Gu)があって、洗面用具が置かれている。廊下の突きあたりは倉庫(Hm モンゴル語でフムルグ)が設置されている。廊下の南にもう1つ廊下(Gu)がある。廊下の東は冬用キッチン(Tgu)で調理用に使用している。西は祖父母用寝室(Hn)である。南に東西に並んだ部屋のうち東は客室用だが、普段は食事用に使われている。西は子ども部屋として使われている。事例⑭⑱の入口は東に設置されている。事例⑭は入口が東に設置され、入口から入って東西廊下がある。そこを通過して突きあたりにキッチン(Tgu)があり、調理と食事用に利用されている。廊下から南に入った部屋は客室(Su)として使われている。客室から西の部屋は祖母の寝室(Hn)として使い、そこからさらに南に入った部屋は若い夫婦と子どもの寝室(Hn)に使われている。事例⑱は入口(Dh)が東

に設けられ、そこを入れて北側はキッチン(Tgu)である。キッチンでは調理や食事を行う。入口から入って西の部屋は客室(Su)で、さらに客室(Su)の西には南北2つの寝室(Hn)が並んで南のほう子ども部屋、北のほう夫婦寝室(Hn)として使われている。北の寝室とキッチンの間にもうひとつの祖父母用寝室(Hn)が設置されている。

非廊下型(2行4室型C):事例①③⑤⑪⑫⑬⑭(写真3-1)

1、入口が東側に設けられた場合:事例③⑤⑭は基本同じ平面である。入口(Dh)を事例⑤は夏用キッチン(Tgj)として使っている。そこから入ってすぐ冬用キッチン(Tgu)が設けられている。事例③⑤⑭はこの部屋を調理用に使っている。キッチン(Tgu)から南に入った部屋は客室(Su)で、事例③の場合は物置場に使っている。事例⑤は客室と家族が食事をする部屋として使っている。事例⑭の場合は客用及び食事用に使用している。西側は南北には2つの寝室(Hn)が並んでいる。事例③の場合北は父母用の寝室(Hn)、南は祖父母用寝室(Hn)と客用、食事を行う場所として使われている。事例⑤の場合は、北の部屋を祖父母用寝室(Hn)で、南を父母が寝室(Hn)として使っている。事例⑭は、北の部屋を父母用寝室(Hn)、南の部屋を子ども部屋として利用している。

2、入口が西側に設けられた場合:事例①⑪である。事例①⑪は基本的に平面が同じである。事例①は、入口から入ってすぐ夏用キッチン(Tgj)が設置されている。キッチン(Tgj)では夏の間調理をしている。その東側の部屋は冬用キッチン(Tgu)である。南は寝室(Hn)で、子どもが夏休みと冬休みに帰ってきた場合に使う子ども部屋である。冬用キッチン(Tgu)の東の部屋は客室である。その南の部屋は夫婦用寝室である。事例⑪は、入口から入って、東北の部屋は冬用キッチン(Tgu)として調理や食事を行っている。冬用キッチンからさらに東側の部屋は祖父が寝室用に使っている。祖父の寝室から南の部屋は客用寝室で隣の西の部屋は客室(Su)である。

3、入口が南側に設けられた場合:事例⑫⑬は基本的に平面が同じである。入口(Dh)から入ってすぐ客室(Su)で、事例⑫⑬は同じく客用と食事用に利用している。客室の奥の部屋はキッチン(Tgu)で、調理用部屋として利用している。客室の隣に設置された寝室(Hn)は子ども部屋として使っている。この部屋の北奥の部屋は夫婦用寝室(Hn)となっている。

非廊下型(1行3列型D):事例⑥⑨⑮(写真3-2)

1、入口が中央の場合:事例⑥は、入口が南側中央に設置され、入ってすぐキッチン(Tgu)があり調理と食事を行う。東の部屋は客室(Su)として使われている。入口から入って西の部屋は若い夫婦と子どもの寝室(Hn)として使われている。事例⑨は事例⑥の平面と同じである。入口から入ってすぐキッチン(Tgu)があり、調理と食事をする。東の部屋は客室(Hn)で祖母の寝室用にも使われている。西の部屋は父母と子ども3人の寝室(Hn)として利用されている。

2、入口がそれ以外の場合:事例⑮の入口は南東に設置され、入ってすぐキッチン(Tgu)があつて、調理と食事を行う。中央の部屋は客室(Su)として使われている。左端の部屋は父母の寝室(Hn)である。



写真 3-5 Tgu ウ布林・トゴンゲル  
(冬用キッチン)  
2013年6月筆者撮影



写真 3-6 Su ソーホ・ゲル (客室)  
2013年6月筆者撮影



写真 3-7 Gu ゴドムジ (廊下)  
2013年6月筆者撮影



写真 3-8 Hn ホノホゲル (寝室)  
2013年6月筆者撮影



写真 3-9 Ug ビイエンウガフゲル  
(シャワー室)  
2013年6月筆者撮影



写真 3-10 Tgj ジョネトゴンゲル  
(夏用キッチン)  
2013年6月筆者撮影



写真 3-11 Dh ドハ (玄関口)  
2013年6月筆者撮影

調査地	平面タイプ			
バルガ モンゴ ル族				
凡例	①寝室に利用する    ②食事に利用する    ③調理に利用する    ④接客に利用する ⑤各室につなぐスペース    ⑥物置に利用する    ⑦洗面用に利用する    ⑧車庫用に利用する			

図 3-4 居室の利用用途

寝室は 2 つ以上設けられている。客用、父母用、子ども用寝室がそれぞれ設けられている。キッチン は 1 つまたは 2 つ（夏用と冬用）設けられている。キッチン用途は食事用と調理用と同じ空間で行っていることが多くみられる。キッチン を調理用だけにした場合、食事を客室と併用で使っている。

### 3.5.暖房器具

#### 3.5.1.暖房器具の種類

暖房器具は固定式暖房と移動式暖房の 2 種類に分けることができる。固定式暖房は、壁暖房（ピーシン pisin）、オンドル（ラガ lag）、温水暖房（ノアンチ nuanqi）、ストーブ（ジョーフ juuqa）の 4 種類である。移動式暖房は、ラジエータ（デンノアンチ）、ストーブ（ジョーフ）の 2 種類がある。ストーブ（ジョーフ）は固定式と移動式の両方がある。固定式のストーブはピーシンとラガの熱を入れるときに使う。移動式のストーブは熱源、調理用に使われる。

- 1、ピーシンは右旗のモンゴル族の呼び方。この地域ではほとんどがラガ（オンドル、後述）を設置せず、防寒用に壁全体に空洞を作って熱気を通す仕組みとなっている。壁の横にストーブを設置して熱を入れるか、直接壁に穴を開けて、その穴から燃料を燃やして熱がはいれるようにしている。
- 2、ラガはモンゴル語でハンジとも言うが、現地ではラガと言う。土で作られ、なかは熱が通るように空洞が作られている。ストーブから熱をいれるのと直接ラガに穴を開けて熱を入れる 2 つのタイプがある。煙がラガの中を通り、壁に設置した煙突から外に排出される仕組みとなっている。
- 3、ノアンチは中国語の発音であるが、現地のモンゴル族もノアンチと呼んでいる。温水を各室に繋がっているパイプに送り込み部屋全体を暖める仕組みである。
- 4、ジョーフはモンゴル語の発音で、石炭や牛糞などを燃料として使う。石炭や牛糞を燃やして室内を暖める熱源として使われるのと、ピーシンとラガに暖気を送るまたは、調理用に使う。
- 5、デンノアンチは長さが高さが 1 メートルぐらいの正方形の電気ラジエータで電気を利用して部屋を暖める。

### 3.5.2. 暖房器具と住宅の関係

#### 1、ピーシン

第一次土地分配政策の時に建てられたバイシンの東西壁にピーシンが設置されている。第二次土地分配政策の時に建てられたバイシンのピーシンは、東西と南北壁両方に設置されている。2000年以降に建てたバイシンのピーシンは、南北壁に設置されている。これは壁を挟んだ南北の部屋を同時に暖める。ピーシンを平面から見ると、東西と南北の2種類がある。ピーシンは、火を入れて壁全体に暖かい空気を送り込み、壁挟む両側の部屋を同時に暖める仕組みとなっている。壁を挟んで設置されるのが寝室と冬用キッチン（Tgu）である。空間としては部屋を南北に仕切った東西の壁にピーシンを設置するのが多く見られる。北にキッチン、南に寝室と南北に並んだ空間の場合、ピーシンは東西壁に設置されている（事例①②③⑤⑧⑪⑫⑬⑭⑯⑰）。キッチンと寝室が東西並ぶ場合、ピーシンは南北壁に設置されている（事例⑥⑦⑨⑮）。ピーシンを設置しているが使用していない事例もある（事例⑬⑭⑮⑯⑰）。

#### 2、ラガ

ラガは内モンゴルのほかの地域では冬用暖房施設としてよく使用されているが、新バルガ右旗では調査対象になった19世帯のなか事例③⑤⑨が使用している。使用率がかなり少ないである。この3つの世帯はピーシンとラガの両方を使用している。第一次土地分配時に建てられたバイシンにはラガの使用が見られる。ただし、ピーシンと併用している（事例③⑤）。ピーシンの入った壁の北にキッチンが設置されることが多く見られるが、ラガを設置しているバイシンの場合はキッチンの代わりに寝室が設置されている。ラガを暖めるストーブがピーシンとラガの両方を同時に暖める機能を果たしている。第二次土地分配時以降に建てられた1行3列タイプのバイシンでは、ラガが東側の部屋に設置されており、東側の部屋とキッチンを挟む壁にピーシンが設置されている（事例⑨）。

#### 3、ノアンチ

2000年以降に新しく建てたバイシンまたは、改築したバイシンに取り入れている。使用しているのは事例⑬⑭⑮⑯⑰⑱の7世帯である。ピーシンを設置しているがノアンチも使用しているのは事例⑫⑬⑭⑮⑯である。ピーシンの設置がなくノアンチだけを使用しているのは事例⑱⑲である。

#### 4、ジョーフ

バイシンとゲル両方に使っている。バイシンの場合は、ピーシンとラガの熱源、調理用として設置してある。石炭や牛糞などを燃料として使っている事例①②③⑤⑥⑦⑧⑨⑪⑫である。ゲルの場合は、土や鉄製の煙突がついているジョーフを熱源、調理用として使用している（事例④⑩）。

#### 5、デンノアンチ

10年前から使われている（事例⑬）。普段あまり使われてない客室などに設置され、客が来て寝る時だけ部屋を暖めるために使用している。



写真 3-12 デンノアンチ  
2013 年 6 月 筆者撮影



写真 3-13 ラガ (オンドル)  
2013 年 6 月 筆者撮影



写真 3-14 ピーシン (壁暖房)  
2013 年 6 月 筆者撮影



写真 3-15 ジョーフ (ストーブ)  
2013 年 6 月 筆者撮影



写真 3-16 ノアンチ  
2013 年 6 月 筆者撮影

表 3-6 年代別の暖房器具の利用状況

地域別	暖房器具種類	60年代	70年代	80年代	90年代	2000年代
バルガモンゴル族	ハンジ	-	-	3	-	1
	フーチャン	-	-	6	3	7
	ジョーフ	-	-	6	3	9
	ノアンチ	-	-	-	1	5

(表 3-6) 80 年代にバイシンが建てられ始めてから 2000 年までで、ピーシンの設置が一番多く設置されていることが分かる。2000 年以降に建てられたバイシンにはラガの設置が減っているがピーシンの設置が変わってない。そして、ピーシンとノアンチを併用で設置していることが現状である。

### 3.6.まとめ

家族の移動状況から分析すれば、A は祖父母、父母と子どもと一緒に草原地域で生活しているか草原地域と市街地で季節的に離れて生活しているかでさらに 4 つに分かれた。B は祖父母と父母世代が草原地域と一緒に生活しているか草原地域と市街地に季節的に離れて生活しているかで 2 つに分かれた。C は父母と子ども世代と一緒に草原で生活している。D は祖父母世代が草原で暮らしている。E は父母世代が草原で暮らしている。

放牧地と住宅の関係を 4 つに分類することができた。①拠点になる春営地の 1 箇所で行う場合は、バイシンとゲル両方を固定して使っている。ゲルは冬に倉庫用、夏に客用寝室と夏用キッチンとして使っている。②拠点と夏営地の 2 箇所で行う場合は、拠点でバイシンを使用し、夏営地に移動するときゲルを使う。③拠点、夏営地と冬営地の 3 箇所で行う場合には、拠点でバイシンを使用し、夏と冬営地ではゲルを使用する。④拠点、夏、冬、秋営地の 4 箇所で行う場合は、拠点でバイシンを使用し、夏、冬、秋にはゲルを使用していることが分かる。

土地分配政策以降、敷地内と敷地外で放牧を行っていることが判明した。敷地内では季節放牧と日帰り放牧を行っている。季節放牧にはゲルを利用している。敷地外は分配された土地以外に 3 箇所で行っていた。ガチャ所有の土地は冬積雪量が多く、家畜が放牧地の草を食べられないときに利用する。合作社管理の土地は合作社政策を利用している世帯が冬と秋に利用する。賃貸土地は分配された土地がない世帯が、土地を借りて放牧を行う。以上の敷地外の場合はゲルを使用していた。

土地分配政策によって、バイシンの建設時期を 4 つに分類することができた。1983 年の第一次土地分配政策以前は全てがゲルだけを使用していた。1983 年の第一次土地分配政策が始まってから 1996 年の第二次土地分配政策が始まるまでに 8 世帯がバイシンを建てた。1986 年の第二次土地分配政策以降 2000 年囲封転移政策が始まるまでに新しいバイシンを建てたのは 4 世帯、増改築をしたのは 4 世帯である。2000 年以降に新しくバイシンを建てたのは 7 世帯、増改築をしたのは 4 世帯である。

バイシンの平面を 4 タイプに分類することができた。廊下型と非廊下型で、廊下型は南北廊下型 A・東西廊下型 B の 2 種類、非廊下型は 2 行 4 室 (3 室) C タイプ・1 行 3 列 D タイプ

タイプの2種類に分けることができた。第一次土地分配政策のとき、2種類のバイシンが建てられた。1つは、非廊下型の2行4室タイプで、もう1つは、廊下型の東西廊下タイプの2種類である。南北廊下タイプと東西廊下タイプのバイシンの共通点は、キッチン(Tgu)が北西に位置し、客室(Su)が東南に位置することである。非廊下型で2行4室のバイシンの客室も同じく東南に位置している。南北廊下タイプのバイシンの入口は南に廊下と繋がって設置されている。東西廊下の入口は東側に東西廊下と繋がって設置されている。2行4室の入口はバイシンの東・西・南側の3箇所に設置されている。東と西に設置された入口は冬用キッチンと繋がっている。1行3列のバイシンの入口は南に設置され、キッチンと繋がっている。初めて建てられたバイシンタイプは2行4室C型で、一番多く建てられているバイシンタイプは南北廊下型Aである。第二次土地分配時以降にバイシンの増改築がみられる。増築は、東西増築である。

間取りから見ると、主要な空間は入口(Dh)、客室(Su)、寝室(Hn)、廊下(Gu)、キッチン(夏用キッチンTgjと冬用キッチンTgu)である。入口は玄関用と夏用キッチンに使われている。客室は客用寝室、客を招待する場所と食事用場所として使われている。寝室は2つ以上設けられている。各世代別で利用している。廊下は各部屋を繋ぐ役割と洗面台や物置にも使われている。キッチンは夏用と冬用に分けられている。キッチンは調理と食事用に使われているが、食事は客室や夏用キッチンまたはゲルを使う場合もある。各部屋の呼び名は、方向で付けられたのではなく役割から付けられている。

暖房器具は固定式暖房と移動式暖房の2種類に分けることができた。固定式暖房は、ピーシン、ラガ、ノアンチ、ジョーフの4種類である。移動式暖房は、ラデンノアンチ、ジョーフの2種類である。2000年以降のバイシンには、ピーシンとノアンチを併用で設置している傾向がみられる。

増築や改築したバイシンあるいは2000年以降に建てられたバイシンにはノアンチを使う場合が多く、ピーシンはこの地域独特の暖房用施設である。平面分析から見ると壁暖房が設置されている廊下型(南北廊下、東西廊下)と非廊下型の2行4室タイプのバイシンの暖房は東西壁に設置されている。非廊下型の1行3列タイプのバイシンの暖房は南北壁に設置されていることがわかった。

## 注

注1 中国では1950年代から土地改革が行われ、土地は集団所有制機関である生産隊(今のガチャに相当する範囲)が所有していた。1978年以降に生産請負制度(中国語で生産責任制とも言う。中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議によって打ち出された改革開放路線に基づいた制度)による家畜の私有化、土地分配が始まり、生産隊が廃止された。1983年に生産隊が所有していた土地をガチャに移管し、ガチャが土地所有権を持つことになった。そして、ガチャが所有する土地の使用権を牧畜民に家畜数や家族人数に応じて分配した。この土地使用権を牧畜民に分配したことを土地分配と呼んでいる。土地分配の対象は当地に居住している人で、公務員または牧畜以外の仕事をして収入がある人たちは対象外になった。1997年に2回目の土地分配が実施されたが、これは1983年の土地分配で不明確であった土地境界線を明確にしたものであった。

- 注2 19世帯を選んだ理由は、バルガモンゴル族でありながら各年代別に建てた固定住居をもつ家庭で調査に協力してくれる世帯を選んだ。
- 注3 牧草地は家畜を放牧できる分配された土地のこと。
- 注4 草刈地は分配された土地内で飼料用の草を植える場所である。
- 注5 五畜とは、牧畜民が飼育している羊・馬・ラクダ・牛・ヤギのことである。
- 注6 営地は四季別に移動する土地のこと。拠点はずべてが春営地にある。夏営地は敷地内の水草が豊富なところに設ける。秋営地はほとんど草刈地に設ける。冬営地は敷地内でより暖かい場所に設ける。
- 注7 朝、家畜を敷地内の草原に放して、夕方に暮らしている家に戻ってくる放牧。
- 注8 拠点とは、分配された土地内に建てた固定式住居バイシンのこと。
- 注9 季節ごとに家畜を連れて家から離れて1、2ヶ月間滞在する放牧。
- 注10 合作社は5～10戸の牧民が連携し、分配された土地を1つにして家畜も一つに集めて順番で広い土地内で季節移動をする。
- 注11 分配された敷地を鉄のフェンスで囲む戦略は、この地域では2000年以降に実施された。個人に土地を分配しましたが、家畜が隣の敷地内に入るなど原因から実施された戦略である。これが普及し始まったことは牧民の定住がより一層早くなったと考えられる。

## 第4章 エヴェンキ族自治旗におけるエヴェンキ族牧畜民の住居と生活様態

### 4.1 本章の目的

本稿ではエヴェンキ族が一番多く集住し、放牧を行っているエヴェンキ族自治旗輝ソム<sup>\*1</sup>を調査対象地にした。エヴェンキ族の起源についていろいろな説があるが呂光天の説によると、エヴェンキ族はもともとシベリアのバイガル湖周辺から南下して今の中国黒龍江省に入り、そこからフルンボイルに移住した。中華人民共和国設立後の1957年に中華人民共和国がフルンボイル市に移住してきたエヴェンキ族をモンゴル族の一部族ではなく独立した民族として決めた。

本稿では、草原地帯で放牧を生業としている牧畜民を対象に、牧畜エヴェンキ族の放牧方式や生活様態の基本状況を把握し、バイシンの間取りと部屋の平面変化、部屋の使い方と呼び方を明らかにする。

### 4.2.調査地の概要



図4-1 調査対象地域（フルンボイル市エヴェンキ族自治旗輝ソム）位置図

出典：「内蒙古自治区地図集：中国地図出版、2006年第9版、p.53」をもとに筆者作成

エヴェンキ族自治旗総面積は19,100 km<sup>2</sup>、人口は149,600人（エヴェンキ族は9,000人）である。旗は、4鎮（バヤントへ、イミン河、紅花、大雁）、1郷（バヤンタラダウール郷）、5ソム（輝、イミン、バヤンチャガン、シニへ東、シニへ西）に分かれる。輝ソム総面積は2,855 km<sup>2</sup>である。271世帯1345人である。エヴェンキ族は1,134人（84.31%）、エヴェンキ族以外はモンゴル族159人（11.82%）、漢民族23人（1.71%）、ダウール族26人（1.93%）、オルチョン族3人（0.22%）である。2014年9月16日から9月25日までエヴェンキ旗輝ソムでエヴェンキ族の20世帯<sup>\*2</sup>に対して現地調査（測量と聞き取り調査）を行った。資料収集のためにエヴェンキ民族博物館（バヤントへ鎮）、ダウール民族博物館（バヤンタラ・ダウール民族郷）、ブリアード民族博物館（シニへ東ソム）を訪問した。

### 4.3. 牧畜民の実態

#### 4.3.1. 家族の基本状況

聞き取り調査からエヴェンキ族自治旗輝ソムの 20 世帯の家族基本情報を作成した（表 4-1）。表は家族構成、家族数、世帯主年齢、民族、副業、敷地、家畜、現在所有している住宅の 8 項目に分けた。家族構成は同居している家族である。家族数最大で 6 人、最少で 2 人となっている。世帯主の最高年齢は 61 歳、一番若い世帯主の年齢は 29 歳である。民族は世帯主の民族であり、20 世帯のうち 17 世帯の世帯主はエヴェンキ族で、3 世帯の世帯主がモンゴル族である。事例④の世帯主はモンゴル族で、妻はエヴェンキ族である。1980 年に結婚して、1985 年に輝ソムに引っ越ししてきた。事例⑨と事例⑬の世帯主はモンゴル族で、妻はエヴェンキ族である。結婚して世帯主が婿入りした。調査地域の 80%以上がエヴェンキ族であり、多民族が混住している地域では、世帯主の民族よりこの地域の多数を占める民族の文化や習慣が引きついでいる。

表 4-1 調査対象家族基本情報

事例	世帯基本情報					敷地面積(畝*3)		五畜種類(頭数)			現在利用住宅				
	家族構成	家族人数	世帯主年齢	民族	副業	牧草地	草刈地	牛	羊	馬	パイシン	築年数	ゲル	個数	その他住
1	本人+子1	2	50	エヴェンキ	あり	2000	470	35	200	3	あり	2011	あり	5	0
2	母+本人+妻+子3	6	30	エヴェンキ	なし	2000	600	30	210	20	あり	1992	あり	1	0
3	母+本人+妻+子2	5	42	エヴェンキ	なし	2000	1500	70	300	0	あり	2011	あり	2	1
4	本人+妻+子1	3	61	モンゴル	なし	0	0	0	0	0	あり	1989	なし	0	0
5	本人+妻+子2	4	39	エヴェンキ	あり	1900	630	10	40	5	あり	1985	なし	0	0
6	本人+妻+子1	3	58	エヴェンキ	なし	1360	600	30	50	0	あり	1992	あり	1	0
7	父母+本人+妻+子2	6	32	エヴェンキ	なし	1200	1200	10	20	5	あり	1992	なし	0	0
8	本人+妻	2	49	エヴェンキ	なし	800	400	3	30	0	あり	1980	なし	0	0
9	本人+妻+子2	4	45	モンゴル	なし	1000	400	50	200	0	あり	2006	なし	0	0
10	本人+妻+子2	4	58	エヴェンキ	あり	500	1200	50	210	80	あり	1998	あり	2	0
11	本人+妻+子3	5	54	エヴェンキ	なし	500	3000	40	600	0	あり	2001	あり	1	1
12	母+本人+妻+子3	6	37	エヴェンキ	なし	1100	400	10	40	3	あり	2007	あり	1	0
13	本人+妻+子1	3	29	モンゴル	なし	500	1100	18	0	0	あり	1990	あり	1	1
14	母+本人+妻+子1	4	29	エヴェンキ	なし	1100	500	30	100	0	あり	1989	あり	1	1
15	本人+妻+子1	3	43	エヴェンキ	なし	0	0	3	0	0	あり	2003	なし	0	0
16	母+本人+妻+子2	5	39	エヴェンキ	なし	2800	800	80	50	30	あり	2008	あり	1	1
17	父母+本人+妻+子2	6	31	エヴェンキ	なし	2000	600	20	100	0	あり	2002	あり	1	0
18	本人+子3	4	56	エヴェンキ	なし	7000	2000	50	400	40	あり	1988	あり	2	0
19	本人+妻+子1	3	60	エヴェンキ	なし	3000	1500	80	800	20	あり	1992	あり	1	1
20	父母+本人+妻+子2	6	52	エヴェンキ	あり	8000	2000	200	2000	100	あり	2004	あり	5	1

本人は世帯主を意味する

牧草地、草刈地を所有していない事例は④⑮である。事例④は牧夫として雇用され、牧畜に従事している。事例⑮は病院の守衛でパイシンの周り（分配されてなくても放牧できる状況になっている）で牧畜をしている。牧業をしながら副業をしているのは事例①⑤⑩⑳である。事例①と事例⑳は観光業で 7 月の月上旬から 8 月の下旬までほぼ 2 か月間従事している。事例⑤は自動車の修理で、普段牧業をしているが、修理に来る客と電話で連絡をとって時間の調整をして運営している。事例⑩は小売店で家の中の一室を店として使って

いる。周辺の人々がソムや旗まで行くと時間がかかるので、ほとんどの人がこの店で日用品を買っている。敷地について事例④⑮以外は土地分配政策によって敷地を所有している。敷地は放牧地と草刈地の 2 種類がある。内モンゴルの遊牧民における五畜のうち羊・牛・馬 3 種類の家畜を飼っている。現在所有している住宅はバイシン、ゲル、市街住宅の 3 種類がある。バイシンの築年数から見ると一番古く建てられたのは 1983 年で、一番新しく建てられたのは 2011 年である。

#### 4.3.2.家族の移動状況

(表 4-2) から見れば、事例③⑨⑫⑮⑯は、一年を通して家族が草原地と市街地の 2 箇所です季節的に移動する生活を行っている。一方、事例①②④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑭⑰⑱⑳は、一年を通して家族が草原地だけで生活を行っている。家族の年齢から、50 代以上を祖父母、29 歳から 40 代を父母、高校生までを子どもにした。20 代は調査対象世帯にはいなかった。その上で祖父母・父母・子どもからなる世帯を A、父母・子どももしくは祖父母・父母からなる世帯を B、祖父母だけの世帯を C とした。A は 3 つにわかれた。A1 は草原地で祖父母・父母・子ども（未就学児）が一年通して一緒に生活している事例②⑦⑭⑰⑳である。A2 と A3 は市街地と草原地の 2 箇所です生活している事例である。A2 は 7 月と 8 月の 2 か月間、祖父母・父母・子どもは全員草原地で生活し、それ以外の月は祖父母と子どもは市街地の住宅で生活し、父母は草原地の住宅で生活する事例③⑯である。冬寒いため、子どもが冬休みに祖父母と草原に戻らない。A3 は 1 月と 2 月、7 月と 8 月に祖父母・父母・子どもが草原地で生活し、それ以外の月は祖父母と子どもは市街地で生活し、父母は草原地で生活している事例⑫である。B1 は、祖父母・父母が市街地に住宅を持たず草原地で全員が生活している事例①④⑥⑩⑪⑱⑲である。B2 は、草原地で父母・子ども（未就学児）世代が一年通して生活している事例⑤⑬である。B3 は、父母・子ども（高校生までの就学児）世代で、1 月と 2 月、7 月と 8 月に草原地で一緒に生活し、それ以外の月は子どもが市街地（親戚が面倒を見る）で生活し、父母は草原地で生活している事例⑨⑮である。C は、父母だけで市街地に住宅を持たず草原地で生活している事例⑧である。市街地に住宅を持つ世代は通学する子どもがいる世代のみである（市街地の住宅は賃貸を含めたもの）。子どもが通う学校の休みに応じて草原地に戻り、2 か所で生活していることがわかった。事例⑭は子どものとき市街地で親と一緒に生活していた住宅があったが、父をなくして母と家族全員草原地で生活している。

表 4-2 家族移動状況

月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	事例
A1	草原	◎ ○ ▲	②⑦⑭ ⑰⑳											
	市街	◎ ●	③⑬											
A2	草原	○	○	○	○	○	○	◎ ○ ●	◎ ○ ●	○	○	○	○	
	市街	◎ ●	⑫											
A3	草原	◎ ○ ●	◎ ○ ●	○	○	○	○	◎ ○ ●	◎ ○ ●	○	○	○	○	
	市街	◎ ●	⑫											
B1	草原	◎ ○	①④⑥ ⑩⑪⑱ ⑲											
B2	草原	○ ▲	⑤⑬											
B3	草原	○ ●	○ ●	○	○	○	○	○ ●	○ ●	○	○	○	○	⑨⑮
	市街	◎ ●	⑨⑮											
C	草原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑧

A祖父母・父母・子ども世代 B祖父母・父母もしくは父母・子ども世代  
 C祖父母世代もしくは父母世代 ◎祖父母世代(50代以上) ○父母世代(29歳から40代) ●子ども世代(高校生までの就学児) ▲子ども世代(未就学児) \*市街住居を使っていない

### 4.3.3.放牧様式と土地利用

(表 4-3) は調査対象になった 20 世帯の一年を通した放牧様式を表す。この地域では五畜のうち羊・牛・馬の三種類を飼っている。牧畜は放牧地と草刈地、ガチャの土地\*4 を利用する以外に自由放牧\*5、委託放牧\*6 と畜舎飼育\*7 に分けることができた。

事例④はもともとほかのところから引っ越しをしてきたため、土地の分配がなかった。世帯主がほかの家の家畜をその家の土地で一年中放牧して報酬をもらっている。羊一頭あたり 10 円で計算している。事例⑮は親から継がれた土地がなくガチャの病院で守衛をして給料をもらっている。放牧地を所有していないためバイシンの周りにある自分の敷地で 3 頭の牛を飼育している。

分配された土地は放牧地と草刈地の 2 つに分けて利用している。放牧地では春・夏・秋の季節ごとに家畜を季節放牧する。冬はほとんど放牧せず畜舎で餌を(干し草) 与える畜舎放牧である。草刈地は草の生えをよくするために家畜を放牧せず、9 月頃に草を刈って干

し草置き場に運んでおいて、冬を越すための餌として蓄えておく。夏の雨量が多く、草の生育状況が良い時には草刈地で草を刈った後に羊を放牧する家庭もいる。自分の分配された放牧地に放牧をする場合、羊と牛は朝放牧地へ放して、夜畜舎に入れる日帰り放牧を行っている。羊の群れに男性がついて放牧する。昼は自分の敷地内の井戸や川で飲水させる。羊を他人に委託放牧をしてもらうこともよく見られる。馬は自分の放牧地で自由に移動するが、場合によってはガチャの土地またはソムの土地範囲内で自由に移動する（自由放牧）。川で飲水するか、家の近くの井戸水で飲水させる。馬を飼っているのは事例①②⑤⑦⑩⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳で、すべての世帯が自由放牧をしている。

羊と牛は放牧地、草刈地、ガチャの土地を利用することが多い。事例②③⑤⑥⑧⑨⑪は一年間放牧地を利用している。事例①羊は、12月から4月まで放牧地、5月から11月まで委託放牧をしている。牛は、1月から6月まで放牧地、7月から12月まで草刈地を利用している。事例⑦は12月から5月まで羊が放牧地で、6月から11月まで委託放牧をしている。事例⑦の牛は、9月から5月まで放牧地を利用し、6月から8月までガチャの土地を利用している。事例⑩は分配された土地が少ないため一年間ガチャの土地を利用している。事例⑫の羊は12月から4月まで放牧地、5月から11月まで委託放牧を利用している。牛は、12月から3月まで畜舎飼育、4月から11月まで放牧地で放牧をしている。事例⑬の羊と牛は、12月から4月まで畜舎飼育をして、5月から11月まではガチャの土地を利用している。

事例⑭の羊は、12月から4月まで畜舎飼育をして、5月から11月まで委託放牧をしている。牛は、12月から4月まで畜舎飼育をして、5月から11月までガチャの土地を利用し放牧を行っている。事例⑯の羊と牛は、12月から5月まで畜舎飼育をし、6月から11月まで放牧地を利用している。事例⑰の羊は、12月から5月まで畜舎飼育を利用し、6月から11月までガチャの土地を利用している。牛は、11月から5月まで畜舎飼育をし、6月から10月までガチャの土地を利用している。事例⑱の羊と牛は、11月から5月まで畜舎飼育をして、6月から10月まで放牧地を利用している。事例⑲の羊と牛は、9月から5月まで草刈地を利用して、6月から8月までガチャの土地で放牧をしている。事例⑳の羊は、9月から5月まで畜舎飼育をして、6月から8月まで放牧地を利用している。牛は9月から5月まで畜舎飼育をして、6月から8月までガチャの土地で放牧をしている。

表 4-3 放牧方式

月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
事例/種類													
1	羊	A				E				A			
	牛	A				B							
	馬					D							
2	羊					A							
	牛					A							
3	馬					D							
	羊					A							
5	牛					A							
	馬					D							
6	羊					A							
	牛					A							
7	羊	A				E				A			
	牛	A				C				A			
	馬					D							
8	羊					A							
	牛					A							
9	羊					A							
	牛					A							
10	羊					C							
	牛					C							
	馬					D							
11	羊					A							
	牛					A							
12	羊	A				E				A			
	牛	F				A				F			
	馬					D							
13	羊	F				C				F			
	牛	F				C				F			
14	羊	F				E				F			
	牛	F				C				F			
16	羊	F				A				F			
	牛	F				A				F			
	馬					D							
17	羊	F				A				F			
	牛	F				C				F			
18	羊	F				A				F			
	牛	F				A				F			
	馬					D							
19	羊	B				C				B			
	牛	B				C				B			
	馬					D							
20	羊	F				A				F			
	牛	F				C				F			
	馬					D							

A放牧地 自由放牧    B草刈地    E委託放牧  
 Cガチャの土地    D    F畜舎飼育

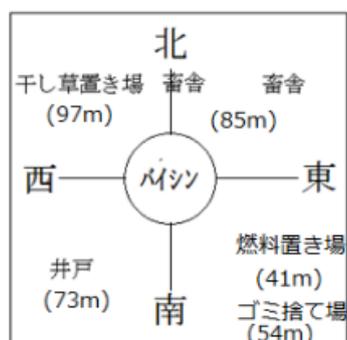
#### 4.4. 牧畜民の住居

##### 4.4.1. バイシンとの位置関係

一般的にバイシンの周囲には燃料置き場（アルガラ\*8）、井戸、干し草置き場、畜舎、ゴミ捨て場がある。それらがバイシンから見てどのような方位、距離にあるかを調べた（表 4-4）。

表 4-4 バイシンと周辺の関係

拠点からの距離と方角										
事例	燃料(アルガラ)		井戸		干し草		畜舎		ゴミ捨て場	
	距離(m)	方角	距離(m)	方角	距離(m)	方向	距離(m)	方角	距離(m)	方角
1	46	東	200	南西	90	北	80	北	100	東
2	50	南東	250	南西	120	北東	100	北東	100	南東
3	30	北東	50	南西	125	北東	100	北東	25	南東
4	—	—	20	西	—	—	—	—	30	南東
5	18	東	30	北東	60	北	60	北	30	南東
6	30	北	10	北	20	北西	40	北東	25	東
7	50	北	20	南西	70	北西	100	北西	20	南東
8	40	南東	30	南西	20	北	2	北	25	南東
9	50	北東	50	南西	600	北西	500	北西	20	東
10	30	南東	100	南東	30	北東	30	東	60	東
11	60	東	65	南西	65	北東	87	北東	50	東
12	37	南東	50	南西	100	北西	83	北東	80	南東
13	35	北東	100	南西	60	北	50	北	60	南東
14	37	南東	60	南西	35	北東	40	北東	40	東
15	50	南東	20	南西	60	北西	—	—	65	南東
16	50	南東	25	南西	100	北	85	北	80	東
17	40	南東	60	東	55	北西	52	北	50	南東
18	70	南東	80	東	60	北西	60	西	50	南東
19	43	北東	40	南	100	北西	70	北西	60	南東
20	60	南西	200	北東	170	北西	160	北西	100	南東



（図中の距離はバイシンから畜舎等までの平均距離である）

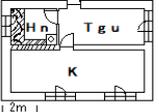
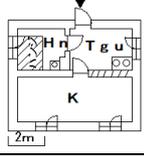
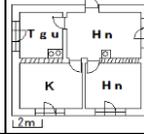
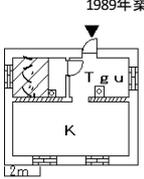
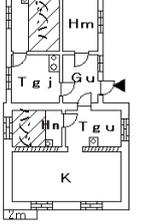
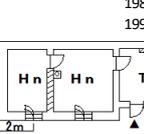
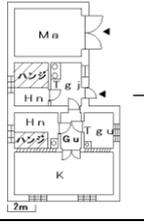
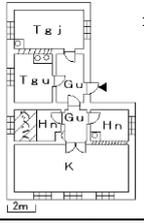
図 4-2 位置関係

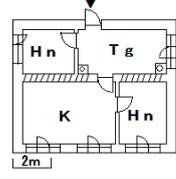
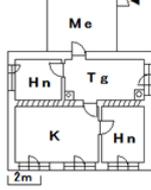
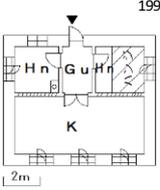
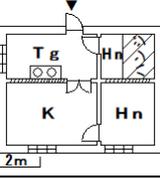
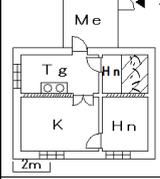
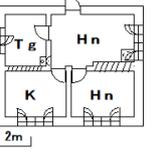
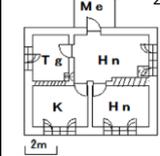
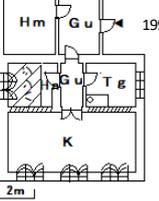
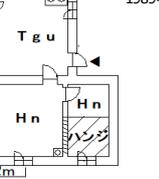
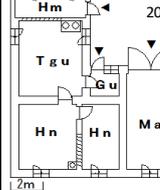
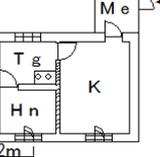
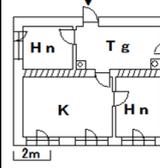
燃料（アルガラ）置き場を北に設置したのは 2 世帯、北東 4 世帯、東 3 世帯、南東 9 世帯、南西 1 世帯で、47%の家庭が南東の方向に設置している。井戸は北に 1 世帯、北東に 2 世帯、東に 2 世帯、南に 1 世帯、南西に 12 世帯、西に 1 世帯で、60%の家庭が南西の方向に設置している。干し草置き場は北東に 5 世帯、北に 5 世帯、北西に 9 世帯で、47%の家庭が北西に設置している。畜舎は北に 6 世帯、北西に 4 世帯、西に 1 世帯、東に 1 世帯、北東に 6 世帯で、北と北東に各 33%の家庭が設置している。ゴミ捨て場は東に 7 世帯、南東に 13 世帯で、65%の家庭が南東の方向に捨てている。最も多い方角を示したのが(図 4-2)である。

ヒアリング調査によると、この地域の牧畜民は季節ごとにゲルをもって移動していたとき、冬営地のゲルとゲル周辺の位置関係で、ゲルの入口は南東あるいは南にあり、畜舎と干し草置き場はゲルの北に位置していた。畜舎と干し草置き場を北に設置しているのは、モンゴルの高原地域は冬寒いのでゲルの北からくる寒気を防ぐためである。ゴミ捨て場は南東に位置している。モンゴル高原の冬の風は北西からくるためゴミ捨て場は風下である南東に設置することが多い。これらを見るとバイシンが普及して固定したにも関わらず、ゲルを所有して季節放牧をしていた位置関係とほぼ変わってないことが分かる。

#### 4.4.2. バイシンの建設時期

(図 4-3) に示したようにバイシンの変化過程を見るため 4 つの時期にわけた。土地分配以前（1983 年以前）、第一次土地分配から第二次土地分配まで（1983 年～1996 年）、第二次土地分配から補助金制度<sup>9)</sup>まで（1997 年～2007 年）、バイシン補助金制度（2008 年～）以降である。

事例	土地分配 以前	第一次土地分配から第 二次土地分配まで	第二次土地分配から補助金 制度まで	バイシン補助金制度
	1983年以前	1983年～1996年	1997年～2007年	2008年～
1				5個 観光用 夏用キッチン  +  2011年築
2		 1992年築	→	1個 夏用キッチン 
3				 2011年築 2個 夏用キッチン 客用寝室 
4		 1989年築  1990増築	→	
5		 1985年築 1998年購入	→	
6		 1992年築	 2002年増築	1個 冬用倉庫 
7		 1992年築	→	
8		 1983年築	→	

9			2010年築	 	2014年増築	
10			1998年築		2006年増築	  <span>夏用キッチン</span>
11			2007年築		2012年増築	  <span>夏用キッチン 客用寝室</span>
12			2001年築		2002年増築	  <span>夏用キッチン</span>
13			1990年築			 <span>夏用キッチン 客用寝室</span>
14			1989年築		2014年増築	  <span>夏用キッチン 冬用倉庫 夏用子ども部屋</span>
15			2003年築			
16				2009年築	  <span>冬用倉庫</span>	

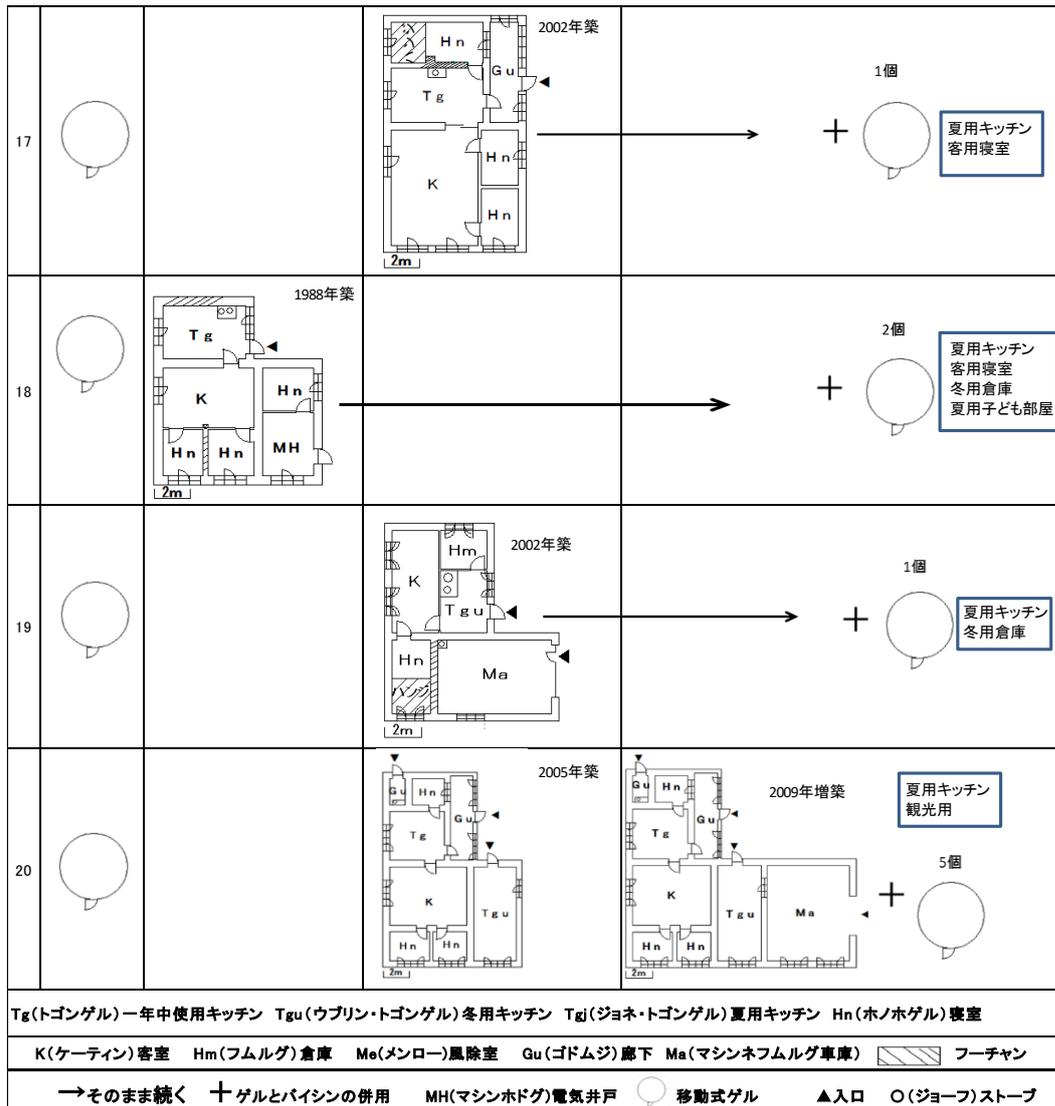


図 4-3 バイシンの平面

第一次土地分配以前はすべてがゲルに住んでいた。第一次土地分配から第二次土地分配までにバイシンを建てたのは事例②④⑤⑥⑦⑧⑬⑭⑱である。この中で北側へ増築<sup>\*10</sup>したのは事例④⑥⑭である。第二次土地分配から補助金制度までにバイシンを建てたのは事例⑩⑪⑫⑮⑰⑲⑳である。補助金制度以降に建てたのは事例①③⑨⑯で、これらはすべて補助金で建てたバイシンである。補助金で建てたバイシンは狭く、平面プランも決まっているため、後から北側に増築しやすいようにビニールや木材で Me を増築するなど工夫している例がある（事例⑨）。すでに建てられたバイシンの中にも北側へ増築した例がある（事例⑩）。政府の補助金で建てる住宅は 3 回に渡って建てられている。第 1 回目の補助金でバイシンを建てた事例はこの輝ソムにはない。2 回目の補助金でバイシンを建て始めている。2 回目は 56 m<sup>2</sup>（事例①③⑨⑯）、3 回目は 60 m<sup>2</sup> のバイシンで、平面プランがだいたい決まっている。本人の自己負担は 2 回目の時は 1 万円（16 万円相当）、3 回目の時は 2 万円（33

万円相当) となっている。

#### 4.4.3.平面タイプ

バイシン平面 A、B、B`、C、D の 5 種類からみれば、A は入口が北側に設置され、北側の部分が増築されていない事例である (事例①②③⑮⑯)。B は増築される前は A と同じ平面であり、北側へ増築された事例である (事例④⑨⑪⑫)。B` は増築ではなく、最初から B と同じ平面で建てた事例である (事例⑦⑧⑬⑰⑱⑲)。C は北側の増築よりさらに北側、または東西に増築した事例である (事例⑥⑩⑭⑳)。D は入口が南側に設置された 1 行 3 列 (3 室が東西に並び入口が西の部屋に設置されているバイシン) の事例である (事例⑤)。

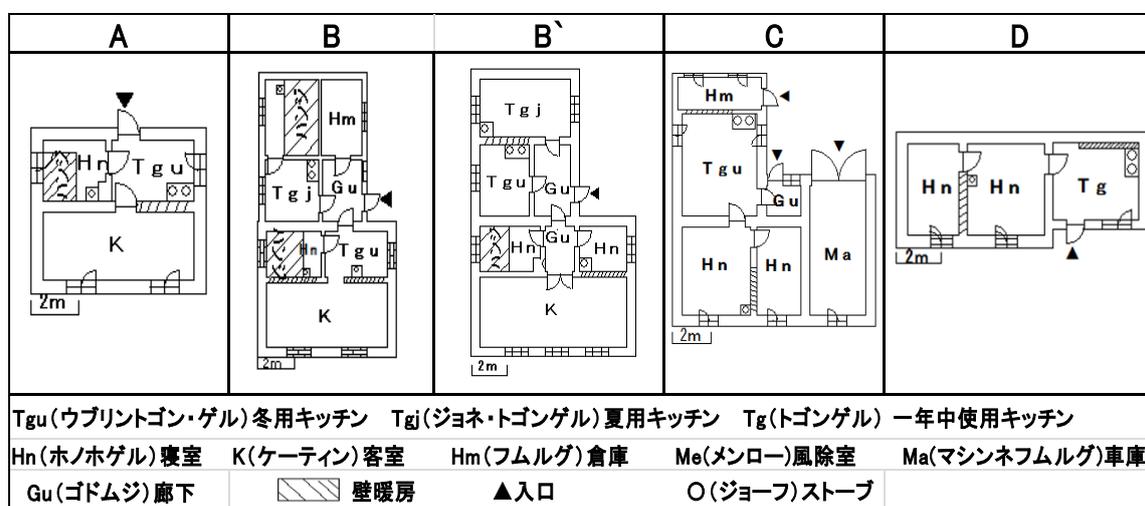


図 4-4 バイシンの平面パイプ

(図 4-4) の分析から A の間取りは 2 行 3 室と 4 室である。K が南側に設置され、Tg が北側に設置されることが多い。ほかの空間はすべて Hn になっている。K は客用寝室、客の招待、家族の食事用、子ども部屋として使用されることが多い (事例①②③⑮⑯)。B は A を北に増築したバイシンで、入口は増築部分に設置され、増築部分の室数は 4 室 (南北に分かれて、北側と南側に各 2 室を設けるバイシンのこと) (事例④) である。これ以外に A の北側に Me のみを増築したのは事例⑨⑪⑫である。B` は増築ではなく、最初から B と同じ平面で建てられている。B の増築部分と比べれば、室数は 1 室 (事例⑱)、2 室 (事例⑬)、3 室 (南北に分かれて、北側に 2 室、南側に 1 室または南側に 2 室、北側に 1 室を設けるバイシンのこと) (事例⑦⑧⑰⑲)、1 室の場合は Tg が設けられる (事例⑱)。2 室の場合は、入口が Gu に設置される場合ともう 1 室が Hm となっている (事例⑬)。3 室と 4 室になる場合は、入口が Gu に設置される (事例⑦⑧⑰⑲)。C は増築された B と B` の北側または東西に Ma または Hm が増築されている (事例⑥⑩⑭⑳)。D は 1 行 3 列のバイシンで入口が南側に設置されている。入口は Tg に設けられ、炊事用と客招待用に使われている。ほか

の空間は Hn となっており、家族と客用の寝室に使われている（事例⑤）（写真 4-1、4-2、4-3、4-4、4-5）。

表 4-5 年代別バイシンのタイプ

年代区分 事例 タイプ	土地分配以前								第一次土地分配から 第二次土地分配まで				第二次土 地分配か ら補助金 制度まで		補助金制 度以降					
	A									2						15			1	3
B									4						11	12		9		
B'									7	8	13	18			17	19				
C									6	14					10	20				
D									5											

（表 4-5）は年代別に見たバイシンのタイプである。土地分配以前すべてがゲルに住んでいて、バイシンを建ててなかった。第一次土地分配時から第二次土地分配の間 A、B、B'、C、D タイプがそれぞれ建てられているが、そのなか、B'、C タイプが多くみられる。第二次土地分配から補助金制度までの間では、B、B'、C 型が多いことが明らかになった。補助金制度以降は、A 型が多く建てられている。



写真 4-1 A タイプ住宅  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 4-2 B タイプ住宅  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 4-3 B' タイプ住宅  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 4-4 C タイプ住宅  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 4-5 D タイプ住宅  
2014 年 9 月筆者撮影

#### 4.4.4.居室の利用用途と呼び名

バイシンの内部空間は **Tg** (トゴンゲル、モンゴル語でキッチン)、**Tgu** (ウ布林・トゴンゲル、モンゴル語で冬のキッチン)、**Tgj** (ジョネ・トゴンゲル、モンゴル語で夏のキッチン)、**Hn** (ホノホゲル、モンゴル語で寝室)、**K** (ケーティン、中国語で客室)、**Hm** (フムルグ、モンゴル語で倉庫)、**Me** (メンロー、中国語で風除室)、**Ma** (マシネフムルグ、モンゴル語で車庫)、**Gu** (ゴドムジ、モンゴル語で廊下) の9つである\*11。

**Tg** は一年中使用するキッチンである。**Tgu** は冬の寒い時に炊事や食事用に使われる。**Tgj** は夏の間炊事や食事用に使われている。バイシンの中に **Tg** が設置されている場合は、冬夏分けずに使われている。**Tgu** だけが設置されている場合は、冬だけに使って、夏はゲルをキッチンとして利用している。**Tgu** と **Tgj** 両方が設置されている場合は、夏用と冬用とキッチンを分けて使っている。**Tg** と **Tgj** (事例⑥)、または **Tg** と **Tgu** (事例⑳) が設置されている場合、事例⑥の **Tg** は冬用として使われている。夏には **Tgj** と併用で使う場合もある。事例⑳の **Tg** は夏用として使われている。冬には **Tgu** と併用で使う場合もある。**Hn** は高齢者、子ども、夫婦用寝室である。**K** は客を招待し、客用寝室に使うことが多くみられるが、子ども用寝室や食事用にも使われることがある。**Hm** は食料などを蓄える場所や物置に使われている。**Ma** は車庫で、自家用車購入後、増築される場合もある。**Me** は風除室で、正方形の形である。**Me** (メンロー) と **Gu** (ゴドムジ) を区別せず使っている場合があった。

**H** は2つ以上設置されている。南側の陽あたりのいいところに設置されることが多い。**Tg** は食事用と調理用の2役を果たしている。食事用が客室で行われることもある。車庫用と物置部屋は増築部分に多く設置されている (図4-5)。

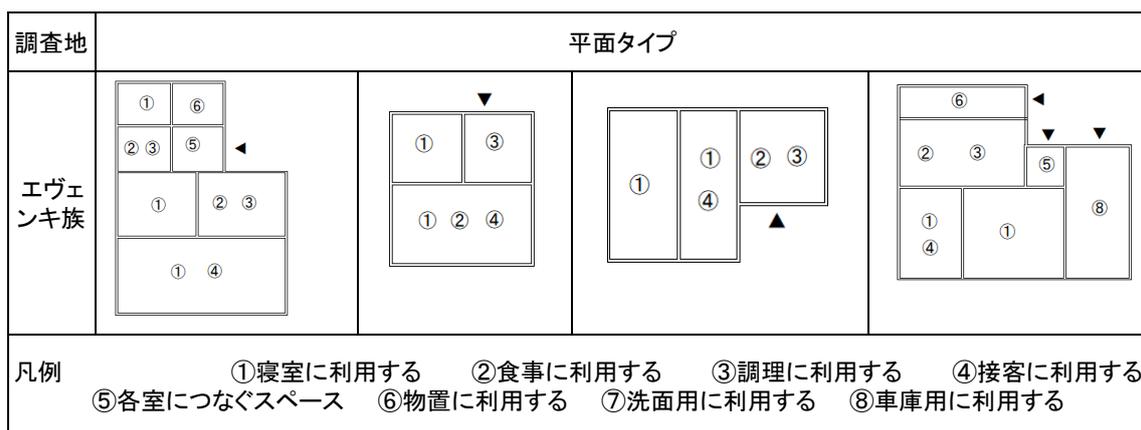


図 4-5 居室の利用用途



写真 4-6 Tgu (夏用キッチン)  
ン)



写真 4-7 Tgj (冬用キッチン)



写真 4-8 K (客室)  
2014年9月筆者撮影



写真 4-9 Hn (寝室)  
2014年9月筆者撮影



写真 4-10 Me (風除室)  
2014年9月筆者撮影

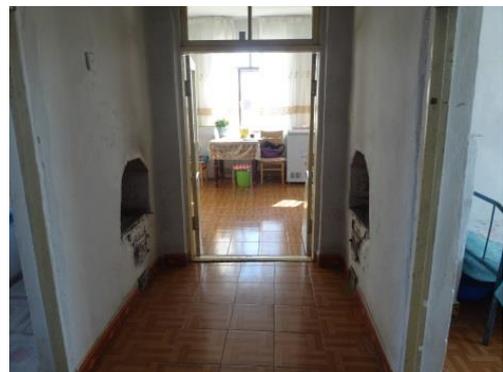


写真 4-11 Gu (通路)  
2014年9月筆者撮影

既存ゲルに近接してバイシンを建設した事例はなく、バイシンを建てた後、ゲルを併用している場合があった。ゲルを併用しているのは（事例①②③⑥⑩⑪⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳）である。事例①と⑳はゲルを5個、事例③、⑩、⑱は2個、事例②、⑥、⑪、⑫、⑬、⑭、⑯、⑰、⑱はゲルを1個持っている。事例①と⑳は観光業を営んでいるため5つのゲルを建てている。ゲルは夏の暑い時期にキッチンとして使われたり、子どもたちが夏休みに帰ってきたときに寝室用に使ったり、客用の寝室に使われている。冬に折りたたんで使わない家庭もあれば、冬だけ倉庫用に使う家庭もいる。

## 4.5.暖房器具

### 4.5.1.暖房器具の種類

暖房器具の種類はハンジ（オンドル）、フーチャン（壁暖房）、ノアンチ（温水暖房）、ジョーフ（ストーブ）の4種類がある（写真4-12、4-13、4-14、4-15、4-16、4-17）。ジョーフはフーチャンとハンジの熱源と料理用に使う。

1、ハンジはモンゴル語である。ハンジは土で作られ、中は熱が通るように空洞が作られている。ジョーフから熱をいれるのとハンジに穴を開けて牛糞をその穴で燃やし熱源とする2つのタイプがある。煙が空洞を通り、煙は壁に設置した煙突から外に排出される仕組みになっている。ハンジを使用している事例は①②④⑥⑦⑧⑩⑪⑬⑰⑱の11世帯である。

2、フーチャンは中国語である。防寒用に壁全体に空洞を作って熱気を通す仕組みとなっている。壁の横にジョーフを設置して熱を入れるか、壁に穴を開けその穴で燃料（牛糞）を燃やして熱源にしている。フーチャンは事例⑳以外19世帯が使用している。

3、ノアンチは中国語である。温水を各室に繋がっているパイプに送り込み部屋全体を暖める。温水暖房は事例⑰⑳が使用している。事例⑰は、フーチャンの設置平面が少ないため、ノアンチと併用にしている。

4、ジョーフはモンゴル語である。石炭や牛糞などを燃料として使う。石炭や牛糞を燃やしてフーチャンとハンジに暖気を送るのと調理用に使っている。ジョーフはすべての世帯が使用している。



写真 4-12 フーチャン (壁暖房)  
2014年9月筆者撮影



写真 4-13 フーチャン  
2014年9月筆者撮影



写真 4-14 ジョーフ (壁式ストーブ)  
2014年9月筆者撮影



写真 4-15 ジョーフ (ストーブ)  
2014年9月筆者撮影



写真 4-16 ハンジ (オンドル)  
2014年9月筆者撮影



写真 4-17 ノアンチ (温水暖房)  
2014年9月筆者撮影

#### 4.5.2. 年代別で見た暖房器具の利用状況

ジョーフはバイシンが建てられる前からゲルの中で室内を温め、調理用に使っていた。ハンジはバイシンが建てられると同時に設置されていた。室内を温め、就寝用に使っていた。ハンジと一緒にジョーフが作られる。ジョーフからハンジに火を入れるためである。バイシンが普及し始めたときからフーチャンが設置され、ハンジやジョーフだと一室だけを温めるが、バイシンの空間が増えることによって、同時に2つの部屋を温めることができるフーチャンが広く設置されてきた。第二次土地分配以降はバイシンの平面が複雑になり、すべての部屋を同時に温めるノアンチの設置も普及されてきた。(表 4-6)の暖房器具の使用率をみると、第一次土地分配時の80年代に建てたバイシンには、フーチャンの設置率がハンジより多いことが分かる。第二次土地分配時からバイシン補助金制度までの90年代のバイシンには、フーチャンとハンジの設置がほぼ同じことが分かる。補助金制度以降の2000年代のバイシンにはフーチャンの設置が増え、ハンジの設置が減っている。一方新たにノアンチの設置が始まっている。

表 4-6 暖房器具の変化

地域別	暖房器具種類	60年代	70年代	80年代	90年代	2000年代
エヴェンキ族	ハンジ	-	-	3	5	4
	フーチャン	-	-	5	5	9
	ジョーフ	-	-	5	5	10
	ノアンチ	-	-	-	-	2

#### 4.5.3. 暖房と平面関係

ノアンチを設置したバイシンの場合は、壁にフーチャンが入っていない事例は⑰⑳である。フーチャンを使っているバイシンの東西壁にフーチャンを設置した場合は、南側と北側の両部屋を温めることができる。事例①②③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑯である。これが半数以上を占める。南北壁にフーチャンを設置した場合は、東側と西側の部屋を同時に温める機能がある。事例⑤⑮⑱である。両方入っている事例は⑭と⑲である。

東西壁にフーチャンが入っているということは暖房を入れるために東西壁が作られたと考えられる。東西暖房入りの壁があるバイシンは必ず南北に分かれる空間になっている。東西壁が設けられてないバイシンには、南北壁にフーチャンが設置されていることが分かる。モンゴル高原では冬に北西風が強いため、東西壁に暖房を設けるとより煙道への煙が通りやすくなると考えられる。図面から見れば、両側の部屋を暖めるために部屋を仕切る壁にフーチャンを設置していることから、バイシンの平面がフーチャンによって変化したと考えられる。

バイシンの平面が変わることによって、フーチャンが東西壁と南北壁に変わることであ

る。ハンジとジョーフの場合は一室しか温めることができず、フーチャンの場合は2室、3室、4室も温めることができる。しかし、平面変化が複雑になることにつれて、すべての部屋を同時に温める機能がある温水暖房（ノアンチ）がだんだん普及していく傾向がみられる。

#### 4.6 まとめ

1、輝ソムのエヴェンキ族は草原地帯で放牧を生業としている牧畜民で、世帯主の80%以上がエヴェンキ族である。家族は、草原と市街の2か所で生活している。30代から40代の父母の100%が草原地で生活し、50代以上の祖父母と高校生までの子どもの80%が草原で生活している。残りは学校が市街地にあるため孫の世話をする祖父母が学校のある時期、市街地で生活している。

2、五畜のうち羊、牛、馬を飼っている。分配された土地を放牧地と草刈地に分けている。放牧地では家畜を放牧し、草刈地は冬の餌として蓄えて置く草を生えさせ、9月に刈って草置き場に置く。分配された土地があっても放牧せず、5月から12月までの間、放牧を依頼する委託放牧を利用している人もいる。分配された土地以外にガチャの土地がある。分配された土地が少ない、または気候により雨量が少なく、草の生えが良くなかった場合はガチャの土地を利用する。畜舎飼育は厳しい寒い冬を越すために家畜を畜舎内で、秋に刈って蓄えた干し草や飼料を与えて飼育する。自由放牧は主に馬を飼っている世帯で自分の分配された土地以外にガチャの土地とソムの土地の広い範囲内で自由放牧をさせている。

3、バイシンの周辺の位置関係からみると、バイシンの周辺に燃料置き場、井戸、干し草置き場、畜舎、ゴミ捨て場を設置している。調査対象の20世帯から分析してみると、バイシンの北東、北、北西に干し草置き場と畜舎が設置されているが、冬の北西や北から吹く寒風を防ぐためである。南東にゴミ捨て場と燃料置き場が設置されており、北西からの風を避けて風下に置かれている。南西に井戸が設置されている。これら位置関係は移動放牧の冬営地のゲル周辺の位置関係とほぼ変わらない。

4、バイシンの平面はA、B、B<sup>′</sup>、C、Dの5種類に分けることができた。Aは入口が北側に設置され、北側の部分が増築されておらず、Bは増築される前はAと同じ平面であり、北側へ増築されている。B<sup>′</sup>は増築ではなく、最初からBと同じ空間で建てている。Cは北側の増築よりさらに北側、または東側に増築して、Dは入口が南側に設置されている。

Bの増築部分の平面面積は増築前の部分であるAの平面面積より小さいことがわかった。またAの空間はK・Tg・Hnに分けられ、入口がすべて北側に設置されている。Kは南に設置され、客用寝室と子ども部屋、食事用に使われている。Tgは北の入口から近い位置に設置され、炊事や食事をする空間として使われている。増築される場合、Tgが増築部分へ移動されている。Hn用空間が2つ以上で、増築部分にもHnが設置されている。Bの増築された部分の空間はTg・Hn・Ma・Hm・Guになっている。B<sup>′</sup>は増築ではなく、最初からBと同じ間取りで建てている。CはBとB<sup>′</sup>がさらに北へ増築、または東西に増築され、倉

庫と車庫用の空間が設けられている。Tg は増築によって、増築部分に移動している。K は広い平面と日当りのいい南の方に設置されているため、増築部分には移動していない。この地域では、バイシンの増築が南側ではなく、北側に増築されているのが特徴である。

エヴェンキ族自治旗では公社の設立による 50 年代から遊牧民が固定住居に住み始めている。調査の対象になった輝ソムでは、土地分配政策の実施による 80 年代からバイシンが建てられ、普及した。第一次土地分配時には、A、B'、D が建てられ、第二次土地分配時には A、B' のバイシンが建てられている。A が B に増築される。バイシン補助金制度以降は A が建てられている。A は B に、B' は C にと増築される。

5、暖房器具はハンジとフーチャンが多く使われている。一事例を除いてすべてフーチャンを設置しており、ハンジを設置しているのは半数を占める。築年数からみれば、築年数が新しいほどハンジの設置が少なくなっている。ジョーフはハンジやフーチャンに火を入れるために使われていると同時に、炊事用にも使われている。フーチャンは暖房を入れるために東西または南北の壁が作られたと考えられるが、ほかの暖房器具は平面に合わせて設置されることが多い。

6、土地分配制度やバイシン補助金制度の実施から調査時までの 30 年間を見てみると、土地が分配されたため移動範囲が制限され、固定化が推進されている。移動遊牧に適したゲルも移動がなくなるにつれ、バイシンに変わっている。またバイシンを補う空間としてゲルを利用している。たとえば、夏にはキッチン、子ども部屋、客用として使われ、冬には倉庫用に使われている。さらにゲルが牧民たちの住居から観光用に転換される傾向もみられる。国の補助金でバイシンを建てるが、補助金には限度があり、不足分は自己負担になる。そのため、所得が低い世帯は借金が増え生活に負担がかかっている。そして床面積も決まっており、2 行 3 室、4 室 A のバイシンが多く建てられている。補助金で建てられたバイシンは狭いため、あとから増築をする家庭が多くなっている。車が普及し始めると北側または東側に車庫が増築される傾向がみられる。

## 注

注 1 輝ソムはエヴェンキ族自治旗の西に位置し、旗の中で一番エヴェンキ族が集住しているソムである。

注 2 原則として世帯主がエヴェンキ族であり、固定式住居をもつ家庭で、調査に協力してくれる世帯を選んだ。

注 3 畝は土地の面積の単位で、中国では 1 畝は 667 m<sup>2</sup> である。

注 4 ガチャの土地とは、土地分配の時、当ガチャの牧畜民に家畜数や家族数によって土地を分配した後、残ったガチャの土地のことである。

注 5 自由放牧はこの地域で飼っている馬が分配された個人の土地以外にガチャやソムの土地自由に移動できることをいう。

注 6 委託放牧は家畜を別の人に委託して、飼育してもらうものである。一般的には、羊は 5 月から 11 月の間、一頭 10 円で委託し、12 月から翌年 5 月までは自分の畜舎で飼う。

- 注 7 畜舎飼育は冬の寒い、積雪の多い時期、羊や牛などを放牧せず畜舎で餌を与えて飼うことである。
- 注 8 アルガラはモンゴル語で、家畜の糞をいう。モンゴル族はほとんど牛の自然の中で乾いた糞を草原から拾ってきて、家の近くで丸いまたは四角の形で重ねて蓄えて置く。それを調理、暖房用の燃料として使う。
- 注 9 バイシン補助金は 2000 年以降中国で実施された住居補助である。時期として 2009 年までと 2009 年から 2012 年の間、そして 2013 年から 2016 年までである。対象者は、低所得者や貧困世帯、住居の老朽化に伴って、住居の建て替えを促進する政府の政策である。補助金の限度は 5 千元（約 9 万円）から 2 万元（約 33 万円）である。バイシンの平面が 56 m<sup>2</sup>と 60 m<sup>2</sup>と決められている。
- 注 10 建物の床面積を増やす建築行為を増築とする。居室以外に風除室、倉庫、車庫なども増築とする。
- 注 11 本文中の用語にモンゴル語と中国語が混在しているのは、現地の牧民が使っている用語をそのまま使用したためである。

## 第5章 エヴェンキ族自治旗におけるダウール族牧畜民の住居と生活様態

### 5.1. 本章の目的

ダウール(dagur)族は中国少数民族の一つで、人口は2010年センサスによると131,992人である。主に内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区、黒龍江省に分布している。内モンゴル自治区フルンボイル(kölonboir)市では、主にモリンダワ(morindawa)ダウール族自治旗とエヴェンキ(ewengki)族自治旗に集住している。フルンボイル市は内モンゴル自治区の中で最も少数民族が多く混住しているところである。確認されている民族は、バルガ(bargu)モンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族、オロチョン(orčon)族、漢族、朝鮮族などである。その中で、牧畜業を営んでいるのはバルガモンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族である。

ダウール族は17世紀ころに今の中国黒龍江(アムール川)流域北岸から嫩江流域に沿って南下した。その後、清朝によって八旗に編成され、さらにロシアと接する黒龍江地区の統治のために移住させられた。中華人民共和国設立後の1957年、黒龍江地区からモリンダワダウール族自治旗を経て、エヴェンキ族自治旗に移住した。17世紀頃黒龍江北岸で暮らしていた時期は、定住し、農耕、牧畜、狩猟と漁業を生業としていた。牧畜は主に牛と馬で、牛は土地を耕すときに使い、馬は狩猟時の交通手段として使っていた、嫩江周辺では川魚を捕って生活していた。1957年以降、ダウール族がフルンボイル市に移住してからは、草原地域、農耕地域、森林地域に広がって居住した。

本稿では草原地帯で放牧を生業としているダウール族の牧畜民を対象とし①牧畜民の放牧地と放牧方式の関係性、②バイシン平面分析によるバイシンのタイプ分け、部屋の平面変化と部屋の名称及び使い方、③使用している暖房器具の状況を明らかにする。



図5-1 調査対象地域(フルンボイル市エヴェンキ族自治旗バヤンタラダウール民族郷)

\*1

## 5.2. 調査地の概要

エヴェンキ族自治旗の総面積は 19,111 km<sup>2</sup>、2000 年の全国人口調査によると、フルンボイル市で暮らすダウール族は 70,287 人、エヴェンキ族自治旗では 14,239 人である。旗は 4 つの鎮（バヤントへ bayantoqai、イミン imin 河、紅花、大雁）、1 つの民族郷（バヤンタラ bayantala ダウール）、5 つのソム（輝、イミン、バヤンチャガン bayančagan、シニへ siniken 東、シニへ西）にわかれる。バヤンタラダウール民族郷はエヴェンキ族自治旗の北部に位置し、東西距離は 24.2 km、総面積は 418.48 km<sup>2</sup>である。人口は 2,198 人（2006 年の調査による）、そのうち 1,489 人はダウール族で総人口の 66.3%である。気候は、冷温帯の大陸性気候である。年間平均気温は-2.4℃、年間降水量は 300~450 mm で、無霜期間は 113 日である。

郷にはバヤンボラル (bayanbulag)、バヤンノール (bayannagur)、バヤンチョグ (bayančog)、バヤンウンドゥル (bayanöndör)、バヤンイラン (bayanilan)、バヤンナウエン (bayannawen) の 6 つのガチャがある。ガチャは人民公社時代の生産隊に相当する集団所有制機関であり、現在は最下位の行政区画である。

2014 年 9 月 7 日から 9 月 15 日まで、バヤンタラダウール民族郷でダウール族の 19 世帯<sup>\*2</sup> に対して現地で測量（現住居や住居周辺の建築物の実測）、建築物の外観と内観の写真撮影と聞き取り調査を行った。聞き取り調査の内容は、家族構成、人数、世帯主の年齢、民族、収入、家畜については種類、数、市街地住居については有無と保有件数、バイシンについては築年数、各室の利用用途、名称、暖房器具については種類と名称、土地については土地分配の有無、放牧地の使い分けと面積、住宅との距離、土地所有権、利用権である。

## 5.3. 牧畜民の実態

### 5.3.1. 家族の基本状況

以下、家族の状況、放牧方式、収入の 3 点にまとめる。

家族の状況（家族構成、家族人数、世帯主年齢、民族）、家畜の種類（頭数）、現在利用している住宅の 3 項目に分けた（表 5-1）。家族構成は同居している家族である。家族人数の最多は 5 人で最少は 1 人である。世帯主（本人）の最高年齢は 72 歳、一番若い世帯主の年齢は 34 歳である。民族は世帯主の民族であり、19 世帯のうち 17 世帯の世帯主はダウール族で、2 世帯の世帯主は漢族とエヴェンキ族である。事例 4 の世帯主は漢族で、妻はダウール族である。事例 6 の世帯主はエヴェンキ族で、妻はダウール族である。

飼育している家畜は五畜のうち羊、牛、馬の 3 種類である。その中で牛を飼っている世帯は 17 世帯（89.5%）、羊を飼っている世帯は 12 世帯（63.2%）、馬を飼っている世帯は 3 世帯（15.8%）である。ほとんどの世帯が牛を飼っているのは、牛乳を毎日売って収入源にしているためである（事例③④⑤⑥⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱）。事例⑦は、牛を飼っているが、乳を売ってない。これ以外に犬、ロバ、豚、鶏、鴨を飼っている。豚、鶏、鴨は食料源になる。事例⑱⑲は鶏と鴨を売って収入を得ている。

表 5-1 家族基本情報

事例	家族の情報				家畜種類(頭数)				現在利用住宅				
	家族構成	家族人数	世帯主年齢	民族	牛	羊	馬	その他	バイシン有無	種類	ゲル有無	個数	市街地住宅
1	本人+子2人	3	58(男)	ダウール	×	×	×	犬1	○	土	×		
2	本人+妻	2	70(男)	ダウール	×	15	×	ロバ1	○	土	×		
3	本人+妻+子2人	4	61(男)	ダウール	20	1000	12	犬2	○	煉瓦	○	1	○
4	本人+妻	2	70(男)	漢族	2	×	×	×	○	土	×		
5	本人+妻+子2人	4	37(男)	ダウール	10	20	×	×	○	土	×		
6	本人+妻+子夫婦+孫1	5	72(男)	エヴェンキ	38	110	15	×	○	土	○	1	
7	本人+父+母	3	58(男)	ダウール	5	200	×	×	○	土	×		
8	本人+妻+子2人	4	58(男)	ダウール	10	×	×	犬1	○	土	×		
9	本人+子+孫1人	3	52(男)	ダウール	6	20	×	犬1 豚1	○	土	×		
10	本人	1	62(女)	ダウール	10	×	×	犬2	○	土	×		
11	本人+妻+子1人	3	37(男)	ダウール	15	×	×	犬1	○	煉瓦	×		
12	本人+妻+子2人	3	42(男)	ダウール	11	×	×	犬4 豚1	○	煉瓦	×		○
13	本人	1	34(男)	ダウール	10	30	×	犬1	○	煉瓦	×		
14	本人+妻+子2人	4	34(男)	ダウール	12	100	×	犬1	○	土	×		
15	本人+妻+子1人	3	46(男)	ダウール	50	×	×	犬2	○	煉瓦	×		
16	本人+妻	2	60(男)	ダウール	20	100	20	犬2	○	煉瓦	×		
17	本人+子夫婦	3	60(女)	ダウール	30	200	×	犬1 鴨20	○	土	×		
18	本人+妻	2	59(男)	ダウール	10	70	×	犬1 鴨30 鶏16	○	煉瓦	×		○
19	本人+妻+子1人	3	48(男)	ダウール	15	7	×	鶏5 犬3 豚2	○	煉瓦	×		

○有 × 無

現在利用している住宅はバイシン、ゲル、市街地住宅の3種類である。市街地とは、旗の行政機関が集中している地区のことであり、郷の行政機関が旗から60km離れている。居住の拠点であるバイシンは市街地とは離れた草原に所在している。ゲルはバイシンの周辺にある場合とない場合がある。市街地にも住宅を所有する例がある。

すべての世帯がバイシンを利用している。ゲルを利用しているのは事例③と⑥である。事例③は春、子羊の出産のときに子羊を入れるために利用している。また冬に倉庫として利用している。事例⑥は、夏のキッチンと客用寝室に利用している。また秋に草刈地で短期間住む際利用している。市街地に住宅を所有しているのは事例③⑩である。事例③⑩はそれぞれ市街地にマンションを購入し、事例③は冬の寒い時期は家畜を牧夫に頼む。牧夫は、放牧を依頼した人の放牧地で、その人の家畜を住み込みもしくは通いで放牧し、月給またはそれに相当する羊をもらう職業である。また、自分の家畜と放牧を依頼した人の家畜と一緒に依頼人の放牧地で放牧する場合もある。事例⑩は、知人や親族の人に短期間または季節的に家畜を委託して、飼育してもらう委託放牧をしている。委託放牧は委託先の放牧地で行う。事例⑫は子どもの通学のため母親が市街地で住宅を賃貸し、仕事をしながら生活している（平日は市街地、週末は草原に戻っている）。

### 5.3.2. 収入

郷全体の土地が狭いため、羊の頭数が少なく、畜産（羊）による収入も少ない（表5-2）。羊を飼っている世帯は事例②③⑤⑥⑦⑨⑬⑭⑯⑰⑱である。羊を飼うためには放牧地がなければできない。羊による収入は年に一回羊を売る（羊一頭の値段は600元～1000元、日本円で約8000～13000円）と羊毛（一頭の羊から出る羊毛は3～4kgで、だいたい一頭当たり40元、日本円で約520円）を売ることである。

事例①②⑦以外の世帯は乳用牛を飼って、乳を毎日業者に売って収入にしている。事例⑦は牛を飼っているが、乳用牛ではない。牛乳 1kg を 3.6 元（60 円）で業者が買い取っている。年金収入があるのは事例⑩⑬である。事例⑩はハイラル市で公務員として働いてい

表 5-2 収入源

事例	収入源						
	畜産羊 (頭)	乳用牛 (頭)	販売牛乳 1日/kg	年金	子どもからの 仕送り	牧夫	出稼ぎ
1	×	×	×	×	×	○	×
2	15	×	×	×	○	×	×
3	1000	20	100	×	×	×	×
4	×	2	8	×	○	×	×
5	20	10	40	×	×	×	×
6	110	38	200	×	×	×	×
7	200	×	×	×	×	×	×
8	×	10	40	×	×	×	×
9	20	6	30	×	×	×	×
10	×	10	40	○	×	×	×
11	×	15	70	×	×	×	×
12	×	10	50	×	×	×	○
13	30	10	40	○	×	×	×
14	100	12	50	×	×	×	×
15	×	50	200	×	×	×	×
16	100	20	100	×	×	×	×
17	200	30	120	×	×	×	×
18	70	10	45	×	×	×	×
19	7	15	60	×	×	○	×
	有○ 無×						

た。退職後、移住してきたが、土地分配後であった。年金を月 1,000 元（17,000 円）受給しながら牛を住居周辺地 B で放牧している。事例⑬の親は土地分配されたが、本人は大学卒業後、旗の労働局で契約社員として働いていたため、兄弟が土地を相続した。退職後、年金を受給しながら、兄弟の放牧地を借りて放牧をしている（G）。

子どもからの仕送りがあるのは事例②④である。事例②は、分配された土地が狭く、老夫婦 2 人で労働力も少ないため、草刈地を設けていない。羊 12 頭と子どもからの仕送りで暮らしている。事例④は、移住してきたため土地分配されず、牛 2 頭を住居周辺地 B で放牧している。働いている子どもからの仕送りなどで生活している。

牧夫を収入源にしているのは事例①⑱である。事例①は、放牧地も家畜もなく、牧夫として収入を得ている。事例⑱は、分配された土地が狭く、牛の乳を売っている。

### 5.3.3. 放牧様式と土地利用

土地分配後、敷地を放牧地と草刈地に分けて使っている。両方を利用していない事例は①④⑤⑩⑫⑬⑮である。放牧地は利用し、草刈地は利用していない事例は②⑦⑧⑱である。

家畜を放牧する場所は、土地使用权を有する土地、行政の所有地、他人の所有地の 3 つのパターンがあり、以下のように 7 種類に分けられる（表 5-3）。A、B、C は土地使用权を

有する土地で行う放牧方式である。D、E は行政の所有地を利用して行う放牧方式である。F、G は他人の所有地で行う放牧方式である。A は土地所有権が分配された自分の放牧地で放牧する場合<sup>\*3</sup>、B は住居周辺地<sup>\*4</sup>で放牧する場合、C は住居周辺の自分の敷地内で畜舎飼育<sup>\*5</sup>を行う場合、D は郷が所有している放牧地<sup>\*6</sup>で放牧する場合、E はガチャが所有している放牧地で放牧する場合<sup>\*7</sup>、F は委託放牧を利用する場合、G は借地で、他人の土地を借りて自分で家畜を放牧する場合である。基本は分配された土地で放牧をする A である。最初の土地分配は、当時の家族人数や家畜の頭数によって分配されている。後で家族が増えたりすると土地が狭くなることがある。また、当時この地域にいなかったため土地分配されなかった人も存在する。そのため A 以外が生じている。

郷の所有地 D は馬だけ無料で使うことができる。東西 25 km の範囲以内であれば自由に放牧できる。ガチャの所有地 E は季節ごとに料金を払って、ガチャから指定された土地内で放牧することができる。

羊の場合、放牧地 A を一年中使っているのが事例②③⑦⑱で、ガチャの所有地 E を一年中使っているのが事例 5 である。11 月から 4 月まで畜舎飼育 C、ほかの月は放牧地 A を使っているのは事例⑨⑰で、畜舎飼育 C と委託放牧 F を季節的に使っているのは事例⑥⑭⑯である。11 月から 5 月までは委託放牧 F で他の月に放牧地 A を使っているのは事例⑱である。牛の場合、放牧地 A を一年中使用しているのは事例③⑥⑦⑧⑨⑪⑭⑯⑰⑱住居周辺地 B を一年中使用しているのは事例④⑩⑫で、ガチャの所有地 E を一年中使用しているのは事例⑤⑮である。馬の場合、郷の所有地 D を一年中使用しているのは事例③⑥⑯である。一年中借地 G で羊と牛を放牧しているのは事例⑬である。

表 5-3 放牧地と放牧方式

事例	放牧地 面積 (畝)	草刈地 面積 (畝)	放牧地と住居の 関係			月 家畜 種類												
			含	離	距離 (Km)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	—	—				×	×											
2	300	—		○	10	羊	A											
3	1084	1260		○	20	羊	A											
						牛	A											
						馬	D											
4	—	—				牛	B											
5	—	—				羊	E											
						牛	E											
6	500	1050	○			羊	C			F						C		
						牛	A											
						馬	D											
7	700	—	○			羊	A											
						牛	A											
8	450	—	○			牛	A											
9	220	310		○	10	羊	C			A						C		
						牛	A											
10	—	—				牛	B											
11	300	600		○	25	牛	A											
12	—	—				牛	B											
13	—	—				羊	G											
						牛	G											
14	800	300		○	15	羊	C			F						C		
						牛	A											
15	—	—				牛	E											
16	460	1000		○	10	羊	C			F						C		
						牛	A											
						馬	D											
17	700	2000	○			羊	C			A						C		
						牛	A											
18	400	700	○			羊	F			A						F		
						牛	F			A						F		
19	370	—	○			羊	A											
						牛	A											

**A**放牧地      **B**住居周辺地      **C**畜舎飼育      **D**郷の所有地  
**E**ガチャの所有地      **F**委託放牧      **G**借地      — 放牧地, 草原地なし  
 ×家畜なし      1畝=6.67㎡  
 含: 放牧地の中に住居が含まれている場合  
 離: 放牧地と住居が離れている場合      距離: 放牧地と住居の距離

## 5.4. 牧畜民の住居

### 5.4.1. 平面タイプ

バイシン平面を増築と入口の観点からまず、A型、B型、C型と大別し、増築の観点を加味するとA型とC型には増築と新築時から増築した住居と同じ平面のものに分かれる。ここでは前者をA-I型とC-I型、後者をA-II型とC-II型とした。Bに関する増築であるタイプをB-I型とした。図(5-2)写真(5-1、5-2、5-3、5-4、5-5、5-6)。A型は北側に入口が設置され、横縦壁で平面を仕切った4室以上の部屋がある2行4室の基本タイプである。A-I型はA型を北へ増築したタイプである。A-II型は最初から増築タイプA-I型と同じ平面で建てられたタイプである。A-I型、A-II型とも入口は増築部分に設置される。B型は、南側に入口が設置され、東西方向に部屋が並ぶ基本タイプであり、2室並ぶタイプ(一行2室)と3室並ぶタイプ(一行3室)がある。B-I型は、一行2室の場合は3室に増築され、一行3室の場合は4室に増築されたタイプである。C型は入口が東側もしくは西側に設置され、横または縦壁で平面を仕切った3室以上の部屋がある基本タイプである。C-I型はC型を東西方向へ増築したタイプである。C-II型は最初から増築C-I型と同じ平面で建てられたタイプである。C-I型、C-II型とも入口は増築部分に設置される。

A型は入口が北側にあり、南の居室はK(客室)、Li(奥の部屋)と呼ばれ用途は寝室である。入口から近い位置にTg(キッチン)とHn(寝室)を設けている(事例③⑥⑨)。A-I型の平面はA型を増築したもので、増築部分に1室、2室、3室の居室が設置されている(事例③⑥⑨)。南の居室は日当たりが良いためK(客室)、Hn(寝室)にすることが多く、Tgは増築部分に移動されている。入口はTgの近くに設けられる場合が多いため、増築部分に設置される。A-II型は増築されず最初からA-I型の平面と同じであり、南側にK、Hnを設置している。Tgは入口から近い位置に設けている。Me(廊下)が設置された場合、入口からMeを通過してTgに入るようになっている(事例⑦⑧⑩⑪⑬⑮⑯⑰⑱)。

B型の一行2室は、Tgに南向きの入口を設け、西側にHnを設ける事例が多い(事例①⑬⑮⑰⑱)。一行3室のGa(外の部屋)の用途はキッチンである。Gaに入口を設け、Gaの両側にHnとKを設けている。B(西の部屋)の用途は寝室、J(東の部屋)の用途は客室、Ho(北の部屋)の用途は客用寝室である(事例②③⑤⑯)。B-I型は、B型の一行3室が4室に増築されたものである。増築部分はMa(車庫)として使われている(事例⑫)。Tgは中央の居室に設置され、入口はTgに設けられている。両側の居室はHnとして使われている。

C型の平面は入口が東向きまたは西向きに設置されている。南に1室K、北に2室HnとTgを設置している(事例④⑨)。C-I型は、C型を増築したもので、増築部分にはMe(風除室)やMa(車庫)、Ck(倉庫)などが設置されている。入口は増築部分に設置されるが、A-I型とは異なり、Tgは増築部分に移動してない(事例④⑨⑭)。C-II型はC-I型と同じ平面で建てられ、K、Tg、HnがC型と同じ場所に設けられている。入口もC-I型と同じ位置に設置されている(事例1)(表5-4)。

ダウル族の住居の入口は南、北、東、西向きがあり、増築によって入口の向きが変わる場合もある。モンゴル族のバイシンの場合、入口は南向きに固定されており、大きく異なる。

<b>A</b>		<b>B</b>		<b>C</b>	
事例3,6,9		事例1,2,3,5,13,15,16,17,19		事例4,9	
<b>A-I</b>	<b>A-II</b>	<b>B-I</b>	<b>C-I</b>	<b>C-II</b>	
事例3,6,9	事例 7,8,10,11,13,14,15, 16,17,18,19	事例12	事例4,9,14	事例1	
凡例	Tg(トゴンゲル) キッチン, Tgu(ウ布林・トゴンゲル)冬のキッチン				
	Tgj(ジョネ・トゴンゲル)夏のキッチン, Du(ドンドゲル)中央の部屋				
	Gu(ゴドムジ)廊下, MI(マリンゲル)畜舎, Ck(ツァンクー)倉庫				
	Hn(ホノホゲル)寝室, Mh(マシンホドグ)電気井戸, Me(メンロー)風除室				
	K(ケーティン)客室, Cf(チーフアンウー)食事部屋, Ma(マシンネフムルグ)車庫				
	Li(リウー)奥の部屋, Xw(シャオウー)小さい部屋, Dw(ダウー)大きい部屋				
	Ho(ホイトゲル)北の部屋, B(バランゲル)西の部屋				
	Hm(フムルグ)倉庫, J(ジュンゲル)東の部屋, Ga(ガダンゲル)外の部屋				
○ジョーフ ▲入口 ◀フーチヤン ◻元の平面					

図 5-2 バイシンタイプ

表 5-4 居室名称

Tg	Tgu	Tgj	Hn	K	Ho
トゴンゲル	ウ布林・トゴンゲル	ジョネ・トゴンゲル	ホノホゲル	ケーティン	ホイトゲル
togugan ger	ebüln togugan ger	junnu togugan ger	qonoqu ger	keting	qoitu ger
キッチン	冬のキッチン	夏のキッチン	寝室	客室	北の部屋
Ga	B	J	Du	Li	Cf
ガダンゲル	バランゲル	Jジュンゲル	ドンドゲル	リウー	チーフアンウー
gadana ger	baragun ger	jegün ger	dunda ger	liwu	chifanwu
外の部屋	西の部屋	東の部屋	中央の部屋	奥の部屋	ご飯を食べる部屋
Hm	Ck	Xw	Dw	Me	Ma
フムルグ	ツァンクー	シャオウー	ダウー	メンロー	マシンネフムルグ
kömörge	cangku	xiaowu	dawu	menlou	masinnu kömörge
倉庫	倉庫	小さい部屋	大きい部屋	風除室	車庫
Gu	MI	Mh			
ゴドムジ	マリンゲル	マシンホドグ			
gudumji	malun ger	masin qudog			
廊下	家畜小屋	電気井戸			



写真 5-1 C-II 型  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-2 C-I 型  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-3 B 型  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-4 B-I 型  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-5 A-I 型  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-6 A-II 型  
2014 年 9 月筆者撮影

#### 5.4.2. バイシンの建設時期

バイシンが建てられた時期を土地分配以前（～1983年）、第一次土地分配から第二次土地分配まで（1983年～1996年）、第二次土地分配からバイシン補助金制度<sup>\*8</sup>まで（1997年～2008年）、バイシン補助金制度以降（2009年～）の4段階に分けた図（5-3）。以下事例ごとに1～19までの番号を振る。

事例1は、1960年代にチチハルから移住してきて、1962年に新築された人民公社<sup>\*9</sup>が所有する土造の2室のバイシン（B型）を借りて住んでいた<sup>\*10</sup>。1983年に借りていた人民公社のバイシンを購入して、撤去し新築した（C-II型）。そして1998年に改築<sup>\*11</sup>した（C-II型）。

事例2は、1960年代にチチハルから移住してきて、2室のバイシンを購入して住んでいた（平面などの詳細不明）。2006年に今のバイシン（B型）を購入した。このバイシンは1960年代に建てられたバイシンである。

事例3は、モリンドワダウール族自治州旗から1969年に移住してきた。移住してきた時はゲルで生活していた。1998年に土造3室のバイシン（1984年に新築したもの、B型）を購入した。2002年に元のバイシンを売却し、新築した（A-II型）。そして、2008年に増築した（A-I型）。

事例4は、1960年代に黒龍江省から移住してきて、土造の1室のバイシンを購入して住んでいた（平面などの詳細は不明）。1996年にバイシンを購入し（1978年に新築したもの、C型）、同時に増築した（C-I型）。

事例5は、1998年に結婚したのち1962年に親が建てた3室のバイシン（B型）で暮らしている。

事例6は、1950年代に黒龍江省から移住してきて、土造の2室のバイシンを購入した（平面などの詳細は不明）。1979年にバイシン（A型）を新築し、2002年に増築した（A-I型）。

事例7は、1978年にバヤンチャガンソムから移住してきて、土造の2室バイシンを購入した（平面などの詳細は不明）。1982年に今のバイシン（A-II型）を新築した。

事例8は、ゲルで生活していた。その後、人民公社のバイシン（平面などの詳細は不明）を借りていたが、2004年に今のバイシンを購入した（1989年に新築したもの、A-II型）。

事例9は、1986年にモリンドワダウール族自治州旗から移住してきた。そしてバイシン（C型）を購入し、増築した（C-I型）。さらに2000年にバイシンを新築し（A型）、2007年に増築した（A-I型）。

事例10は、退職後2003年に、市街地へ出稼ぎに行った人のバイシンを借りて暮らした。2014年に今のバイシンを購入した（1986年に新築したもの、A-II型）。

事例11は、1962年にチチハルから移住してきた。最初、地窖子（ディインズ diyinzi）と呼ばれる地下または半地下で室内にハンジが設けられた竪穴式住居で生活していた。位置は集落より西方にある丘の上で、地上部分の高さは45cm程度、穴の深さは140cm程度、面積は72㎡程度であった。ここで1990年まで生活をしていた。その後もディインズは草刈時期に利用されていた。1992年にバイシン（A-II型）を新築し、2009年に補助金制度を

使って今のバイシン（A-II型）を新築した。

事例 12 は、親と一緒に生活していたが、2013 年にバイシンを購入した（1992 年に新築したもの、B-I 型）。

事例 13 は、1962 年に親がバヤンチャガンから移住してきて、ディインズに住んでいた。1975 年に 2 室の土造のバイシン（B 型）を購入し、1984 年にバイシン（A-II 型）を新築した。さらに 2008 年に今のバイシン（A-II 型）を新築した。

事例 14 は、1978 年に黒龍江省から移住してきて、バイシン（A-II 型）を新築した。2002 年にバイシンを売却し、今のバイシンを購入した（1976 年に新築したもの、C-I 型）。

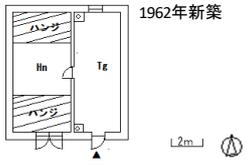
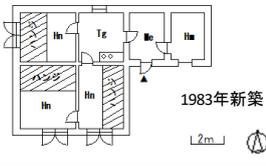
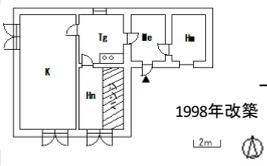
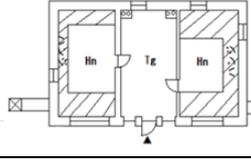
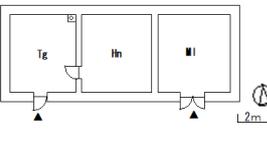
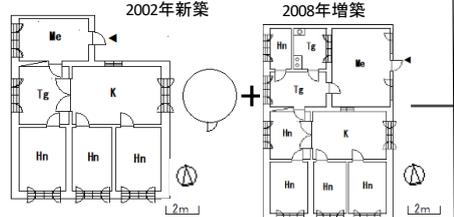
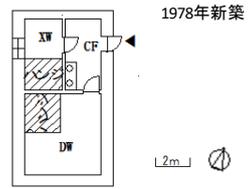
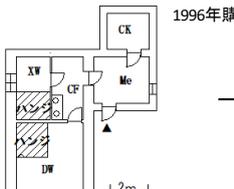
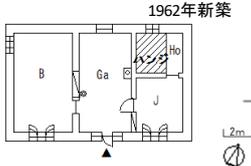
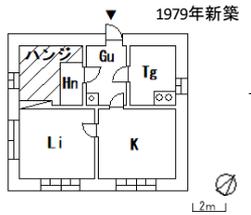
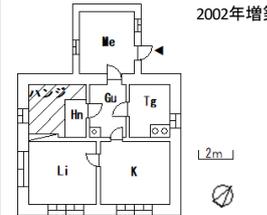
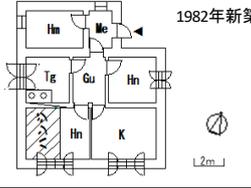
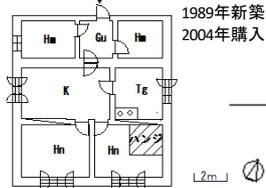
事例 15 は、1958 年にチチハルから移住してきて、ディインズに住んでいた。1975 年に 2 室のバイシン（B 型）を新築した。さらに 2000 年に今のバイシン（A-II 型）を新築した。

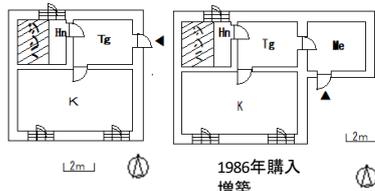
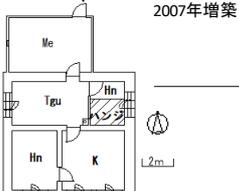
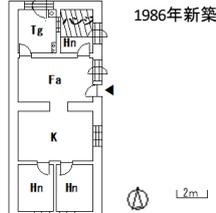
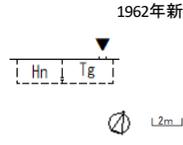
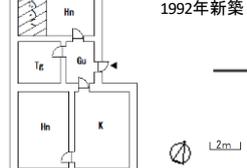
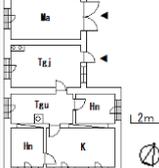
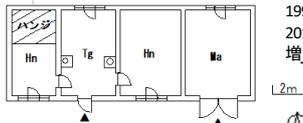
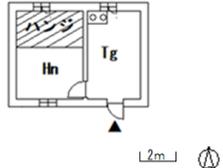
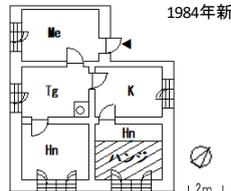
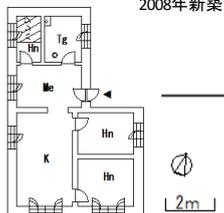
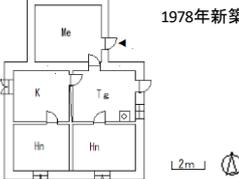
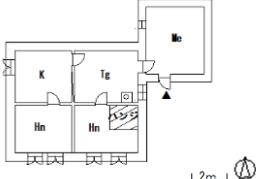
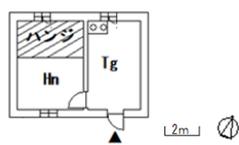
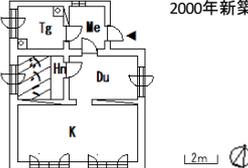
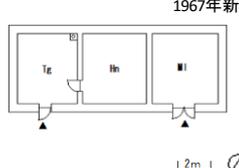
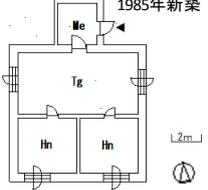
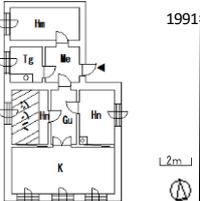
事例 16 は、1947 年にチチハルから移住してきた。人民公社のバイシンを借りて生活をしてきたが（平面などの詳細は不明）、1967 年に 3 室のバイシン（B 型）を新築し、1985 年にさらにバイシン（A-II 型）を新築した。そして、1991 年に今のバイシン（A-II 型）を新築した。

事例 17 は、1960 年代モリンダワダウール族自治旗から移住してきて、人民公社のバイシンを借りて住んでいた（平面などの詳細は不明）。1980 年に 2 室の土造のバイシン（B 型）を新築した。2000 年にバイシンを購入した（1988 年に新築したもの、A-II 型）。

事例 18 は、ハイラルで働いていたが、退職後親から相続した土地に戻り、2009 年に今のバイシン（A-II 型）を新築した。

事例 19 は、チチハルから 1970 年に移住してきて、バイシンを借りて生活していた（平面などの詳細は不明）。1999 年に 2 室のバイシン（B 型）を購入した。2009 年に今のバイシン（A-II 型）を新築した。

事例	土地分配以前	第一次土地分配から第二次土地分配まで	第二次土地分配から補助金制度まで	パイシン補助金制度
	1983年以前	1983年～1996年	1997年～2008年	2009年～
1	1962年新築 	1983年新築 	1998年改築 	→
2	1960年代新築 2006年購入 			→
3	1984年新築 1998年購入 	2002年新築 2008年増築 		→
4	1978年新築 	1996年購入増築 		→
5	1962年新築 			→
6	1979年新築 		2002年増築 	+ 
7	1982年新築 			→
8		1989年新築 2004年購入 		→

9	 <p>1986年購入 増築</p>	 <p>2000年新築</p>	 <p>2007年増築</p>
10	 <p>1986年新築</p>	<p>2012年購入</p>	
11	 <p>1962年新築</p>	 <p>1992年新築</p>	 <p>2009年新築</p>
12	 <p>1992年新築 2013年購入 増築</p>		
13	 <p>1975年購入</p>	 <p>1984年新築</p>	 <p>2008年新築</p>
14	 <p>1978年新築</p>	 <p>2008年新築</p>	
15	 <p>1975年新築</p>	 <p>2000年新築</p>	
16	 <p>1967年新築</p>	 <p>1985年新築</p>	 <p>1991年新築</p>

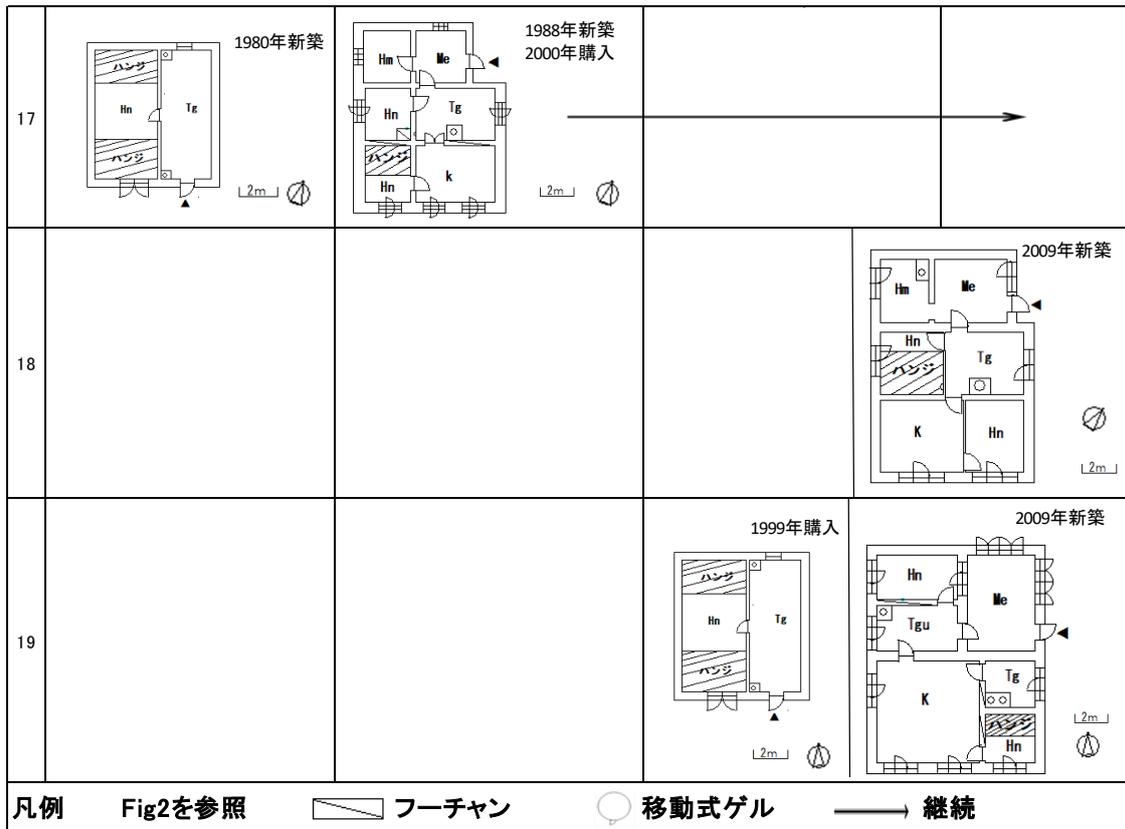


図 5-3 バイシンの間取り変容

表 5-5 年代別に見たバイシンのタイプ

年代区分 タイプ事例	～1983年							1983年～1996年					1997年～2008年			2009年～		
	6																	
A	6																	
A-I												3	6	9				
A-II	7	14						8	10	11	13	16	17	3	13	15	18	19
B	1	2	5	13	15	16	17	3						19				
B-I								12										
C	4							9										
C-I								4	9					14				
C-II	1																	

(表 5-5) は年代別に見たバイシンのタイプである。この地域の人たちは 50 年代から 60 年代の間に移住してきた人たちが多かった。その中には、堅穴式住居であるディインズに住む人がいた。ディインズはダウール族の伝統的な住居ではないが、1960 年代から 1970 年

代に行われた文化大革命の時、反革命と批判され、身の危険を感じた人は山に逃げディインズという竪穴式住居に住むようになった\*12。その後、移住してきた人たちが臨時住居として使っていた。

1983年以前は2室と3室のB型が多くみられる。第一次土地分配から第二次土地分配の間では、A-II型が多くみられる。第二次土地分配から補助金制度までの間は、A-I型とA-II型が多い。この時期に新築されたバイシンは少なく、前のバイシンに引き続き住んでいることが多い。補助金制度以降は、A-II型である。

#### 5.4.3. 居室の利用用途と呼び名

居室には、中国語とモンゴル語の呼び名を付けている。名称は利用用途、方向、居室の大きさによって付けられている。Tg(Tgj, Tgu)、Hn、Hm、Ma、Gu、Ml、Mhはモンゴル語で居室の利用用途によって付けられている。Ho、Ga、B、J、Duはモンゴル語で方向によって付けられている。K、Cf、Ck、Meは中国語で、利用用途によって付けられている。Liは中国語で方向によって付けられている。Dw、Xwは中国語で、居室の大きさによって付けられている。

表 5-6 居室名称の分類

種類 言語	用途	方向	大きさ
モンゴル語	Tg Hn Hm Ma Gu ML MH	Ho Ga B J Du	—
中国語	K Fa CK Me	Li	Dw Xw

TgとGaは一年中炊事や食事用に使われ、CfとDuも食事用に使われている。Tgjは夏、Tguは冬に炊事や食事用に使われる。Hn、Dw、Xw、Ho、Li、B、Jは客、高齢者、子ども、夫婦用寝室である。Kは客を招待し、客用寝室に使うことが多いが、家族用の寝室や食事用にも使われる。Hm、Ckは食料などを蓄える場所や物置に使われている。Maは車庫や物置に使われている。Mhには家畜飲用水もしくは生活用の飲用水に使われる電気井戸が設置されている。Meは風除室である。Mlは家畜小屋である。Guは通路として使われている(表5-6)。

Meは中国語の門楼(menlou)である\*13。魯晋住居(山西省と山東省の住居のこと)には門楼がある。フルンボイル市では昔から旅蒙商(lvmengshang)という山西省と河北省から草原に出向き商売をする人たちがいた。ダウール族住居に見られるMeの設置には魯晋住居のMeが影響していると指摘されている。

表 5-7 居室名称とバイシントップとの関連

タイプ 事例	A	A-I	A-II	B	B-I	C	C-I	C-II
1					Tg Hn			K Tg Hn Me Hm
2					Tg Hn			
3		K Tg Hn Me	K Tg Hn Me		Tg Hn Ml			
4						Xw Dw CF		Xw Dw CF Ck Me
5					B Ga J Ho			
6	K Tg Hn Li Gu	K Tg Hn Li Gu Me						
7			K Tg Hn Me Gu Hm					
8			K Tg Hn Gu Hm					
9		K Tg Hn Me						K Tg Hn Me
10			K Tg Hn Fa					
11			K Tg Hn Ma Gu					
12					Tg Hn Ma			
13			K Tg Hn Me		Tg Hn			
14			K Tg Hn Me					K Tg Hn Me
15			K Tg Hn Me Du		Tg Hn			
16			K Tg Hn Me Hm Gu		Tg Hn Ml			
17			K Tg Hn Me Hm		Tg Hn			
18			K Tg Hn Me Hm					
19			K Tg Hn Me		Tg Hn			

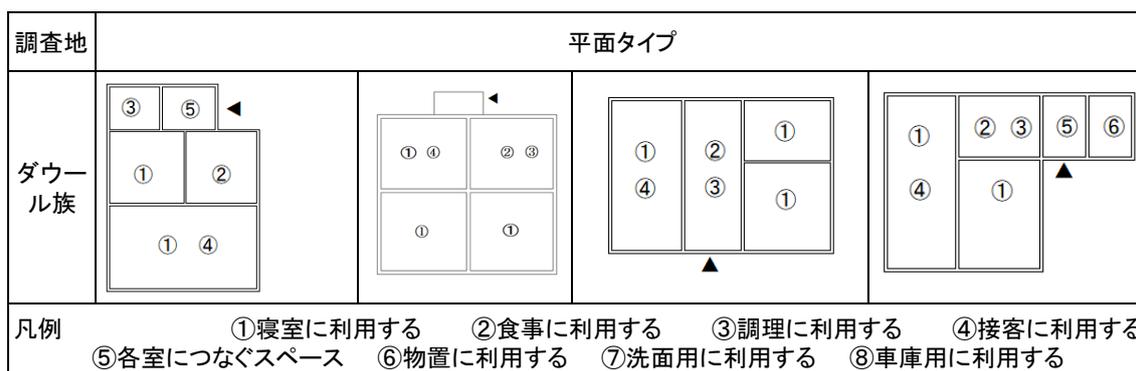


図 5-4 居室の利用用途

寝室は 2 つ以上設けられている。客用、父母用、子ども用それぞれ設けられている。キッチンには 1 つまたは 2 つ設けている。キッチンは食事用と調理用を同じ空間で使っている。増築されたバイシンには食事用と調理用が 2 つの間取りに分かれている。調理用キッチンが増築部分に設置されている。また物置空間が設けられていることが分かる。

A 型、A-I 型、A-II 型バイシンにすべて設置されている居室は K、Tg、Hn（事例③⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑯⑰⑱）である。表(5-7)、写真(5-7、5-8、5-9、5-10)。A-I 型の増築部分には、Tg、Hn、Me が設置されている（事例③⑥⑨）。もともと一つだったキッチンが増築によって炊事用と食事用の 2 つの部屋に分かれている（事例③）。1 つだった寝室が家族用、子ども用、客用に分かれている（事例③）。Me は元々モンゴル地域にはないもので、中国から伝わってきたと思われる（事例③⑥⑨）。B 型、B-I 型は、2 室の場合、Tg、Hn が設置される（事例①②③⑤⑫⑬⑮⑯⑰⑱）。居室が増えると Ma、Ml が設けられる（事例③、⑫、⑯）。

Ma は車の普及にともなって、増築されたと考えられる。Hn が 2 室以上になると K の役目も果たしている (事例②⑤⑫)。C 型、C-I 型、C-II 型の基本となる部屋は K、Tg、Hn である (事例①④⑨⑭)。東西方向に増築される場合 Me、Hm、Ck が設置されている (事例①④⑨⑭)。Hm、Ck は荷物の増量によって、増築されたと考えられる。

A 型と A-I 型は、利用用途によるモンゴル語の名称と利用用途による中国語の名称、方向による中国語の名称が使われている。A-II 型は利用用途による中国語の名称と利用用途によるモンゴル語の名称が使われている。また、方向によるモンゴル語の名称が使われている。B 型は利用用途によるモンゴル語の名称以外に、方向によるモンゴル語の名称が使われている。C 型の部屋は大きさによる中国語の名称と利用用途による中国語の名称が使われている。漢族が利用しているためだと思われる (事例④は世帯主が漢族)。C-I 型は利用用途によるモンゴル語の名称と利用用途による中国語の名称が使われている。大きさによる中国語の名称も使われている。同一室に対して、2 呼称がある例は倉庫のことで、それぞれ Hm、Ck である。



写真 5-7 Gu ゴドムジ (玄関)  
2014年9月筆者撮影



写真 5-8 Me (風除室)  
2014年9月筆者撮影



写真 5-9 Tg (キッチン)  
2014年9月筆者撮影



写真 5-10 Hn (寝室)  
2014年9月筆者撮影

## 5.5.暖房器具

### 5.5.1.暖房器具の種類

調査対象地域は寒く、暖房がなければ生活できない。その暖房は壁、床などと一体になっている場合が多く、暖房の種類と平面タイプの関係进行分析する。

ジョーフ(juuqa) (ストーブ) は暖房器具で、ノアンチ(nuanqi) (温水暖房)、ハンジ(qanjü) (オンドル)、フーチャン(huoqiang) (壁暖房) は建物と一体となった設備である表 (5-8)、写真 (5-12、5-13、5-14、5-15)。

表 5-8 暖房器具とバイシンタイプとの関連

暖房種類 タイプ 事例	ジョーフ	ノアンチ	ハンジ	フーチャン
A	6	0	6	6
A-I	3,6,9	3	6,9	3,6,9
A-II	7,8,10,11,13,14, 15,16,17,18,19	3,10,13	7,8,10,11,13, 15,16,17,18, 19	7,8,10,11,14, 15,16,17,18, 19
B	1,2,3,5,13,15,16, 17,19	0	1,2,5,13,15, 17,19	5,16
B-I	12	0	12	0
C	4	0	4	0
C-I	4,14	0	4,14	14
C-II	1,9	0	1,19	0

- 1、ジョーフは、フーチャンとハンジの熱源及び料理用に使う。石炭や牛糞などを燃料として使い、フーチャンとハンジに暖気を送る。ジョーフはすべての世帯が使用している。
- 2、ノアンチは、石炭を燃やして水を温め、温水を各室に繋がっているパイプに送り込み部屋全体を暖める。ノアンチは事例③、⑩、⑬で使用されている。
- 3、ハンジは土で作られ、中には熱が通るように空洞が作られている。ジョーフから熱を入れるのとハンジに穴を開けて石炭や牛糞をその穴の中で燃やし熱源とする 2 つのタイプがある。煙が空洞を通り、煙は壁に設置した煙突から外に排出される仕組みになっている。ハンジを使用している事例は①、②、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱の 18 世帯である。
- 4、フーチャンは防寒用に壁全体に空洞を作って熱気を通す仕組みとなっている。壁の横にジョーフを設置して熱を入れるか、壁に穴を開けその穴で燃料（石炭や牛糞）を燃やして熱源にしている。フーチャンを設置しているのは事例③、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱の 14 世帯である。

暖房器具とバイシンタイプの関連を見ると、ジョーフは各タイプすべてに設置されている。ノアンチは A-I 型 A-II 型に設置されている。ハンジは A-II 型と B 型、B-I 型に多く設置されている。フーチャンは A-II 型に多く設置されている。



写真 5-12 ハンジ (オンドル)  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-13 ジョーフ (ストーブ)  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-14 フーチャン (壁暖房)  
2014 年 9 月筆者撮影



写真 5-15 ノアンチ (温水暖房)  
2014 年 9 月筆者撮影

### 5.5.2. 年代別で見た暖房器具の利用状況

第二次土地分配以降はバイシンの平面が複雑になり、すべての部屋を同時に温めるノアンチが設置されることになった。

(表 5-9) の暖房器具の年代別変化をみると、60 年代からバイシンが建てられ始めたときからハンジとフーチャンが設置されている。どの年代でもハンジの設置率がフーチャンより多いことが分かる。2000 年代以降には、ハンジとフーチャンが減少も増加も見られなく、新たにノアンチの設置がハンジもしくはフーチャンと併用で設置されている。

表 5-9 暖房器具の年代別変化

地域別	暖房器具種類	60年代	70年代	80年代	90年代	2000年代
ダウール族	ハンジ	2	3	5	3	4
	フーチャン	2	1	3	1	3
	ジョーフ	2	3	5	3	6
	ノアンチ	-	-	-	-	1

### 5.6.まとめ

本研究では、フルンボイル市バヤンタラダウール民族郷のダウール族の家族の状況、放牧方式、収入、バイシンタイプ、バイシンの間取り変容、居室の名称と利用、暖房設備とバイシンのタイプとの関係を考察した。以下5点に要約する。

1、家畜種類は五畜のうち羊、牛、馬の3種類を飼っている。分配された敷地を放牧地と草刈地に分けて使っている。家畜の放牧に使用される土地は7種類である。畜産(羊)による収入は、羊と羊毛を売ることである。ほとんどの世帯は乳用牛を飼って、乳を売って収入源にしている。これ以外に、年金、牧夫、仕送り、出稼ぎなどで生活している。現在、すべての事例がバイシンを持ち、2世帯だけがゲルを持っている。

2、バイシンの平面は大きくA型、B型、C型に分かれる。A型はA-I型の増築タイプと増築でないA-II型に分かれる。B型はB-I型の増築タイプに分かれる。C型はC-I型の増築タイプと増築でないC-II型に分かれる。A型は北側に増築され、A型、A-I型、A-II型とも入口は北側もしくは東側にある。B型は東西に増築され、入口はB型、B-I型とも南向きになっている。C型は東側もしくは西側に増築され、C型、C-I型、C-II型とも入口は東側もしくは西側にある。モンゴル族のバイシン入口は南側、南向きに設置される。調査対象地域のダウール族のバイシンはこの点が異なる。

3、バイシンタイプの推移を見ると、土地分配以前と第一次土地分配の時はA型、B型、C型が多かった。第二次土地分配の時は増築であるA-I型とC-I型が多かった。補助金制度以降は再びバイシンが新築されているがA-II型が多くなっている。

4、すべてのバイシンに設置してある居室TgとHnは利用用途によるモンゴル語の名称である。新築や増築、改築によって、居室が増えると、利用用途による中国語の名称が多く使われている。居室の増加でHnが設置され、寝室用、客用寝室に使われていることが明らかになった。

5、バイシンタイプと暖房設備の関連性を見ると、どの年代のバイシンでもハンジを付けていることが分かる。ハンジはダウール族にとって、バイシンの一部になっていると判断でき、バイシンの平面タイプが変わってもハンジの設置が引き継がれている。フーチャンは、ハンジより遅い年代に建てられたバイシンA-II型に多い。ノアンチの設置は2000年代以降のバイシンに見られる。

## 注

- 注 1 バヤンタラダウール民族郷は、エヴェンキ族自治旗の北に位置し、旗の中で一番ダウール族が集住している。主に放牧業を営んでいる。
- 注 2 調査対象はダウール族で、バイシンを所有しており、牧業を営んでおり、牧畜民の生活様態とバイシンの間取りについて、データ収集ができる対象であり、調査に協力してくれる世帯を選んだ。
- 注 3 土地分配は、個人に土地使用権を分配するものだが、放牧地の中に住居が含まれて分配される場合と、住居と放牧地が離れて分配される場合がある。表 5-3 では前者を「含」、後者を「離」と表現し、後者の場合、放牧地と住居の距離を示した。後者の場合、分配される土地面積は、住居及び放牧地面積の合計で計算される。
- 注 4 住居の周辺には牛などを飼う土地が付随している場合があり、これを住居周辺地という。
- 注 5 畜舎飼育は冬の寒い、積雪の多い時期、羊や牛などを放牧せず畜舎で餌を与えて飼うことである。
- 注 6 郷の行政機関、病院、学校などが集積している地区の土地は郷が所有しており、放牧地としている場合もある。この放牧地はこの地区に隣接しているガチャの牧畜民が使える。
- 注 7 牧畜民に使用権を分配していないガチャ所有の土地を共同で使える放牧地にしたもの。ガチャの牧畜民が自然災害時に使ったり、土地の狭い人たちが利用したりする。
- 注 8 バイシン補助金制度は 2000 年以降、中国で実施された住居補助制度である。時期としては 2008 年までと 2009 年から 2012 年まで、2013 年から 2016 年までである。調査対象地では、2009 年から実施されている。対象者は、低所得者や貧困世帯で、老朽化した住居の建て替えを促進する政府の政策である。低所得者の基準は毎年異なるが、調査当時年間収入 3 千元（日本円で約 4 万円）以下と決められていた。2009 年には、補助金の対象となるバイシンの床面積は 56 m<sup>2</sup>と決められ、個人負担は 5 千元から 1 万元（8 万～16 万円相当）であった。2013 年以降は、床面積が 60 m<sup>2</sup>と決められ、個人で負担するのは 2 万元（33 万円相当）となっている（事例⑩）。
- 注 9 人民公社とは、中国全域で 1958 年から 1980 年代まで続いた生産組織と行政組織を合体した社会の基礎組織単位である。内モンゴルでは家畜の集団所有、集団労働、集団生活を行い、生産成果を平等に分配するとしていた。
- 注 10 人民公社時代、人民公社が所有するバイシンは個人と人民公社の間で契約し、賃貸していた。その時代、個人所有のバイシンもあり、それについては個人の判断で売買、賃貸を行っていた。
- 注 11 改築とはバイシンの床面積は変えず、間取りを変えることをいう。
- 注 12 事例⑩の人から聞き取り調査で得た情報である。
- 注 13 Me (menlou) は中国語で、外部と室内をつなぐ通路で、外部の寒気を室内に入れないように遮断する風除室である。

## 第六章 フルンボイル草原地域における多民族牧畜民の住居

### 6.1. 本章の目的

内モンゴルの草原で、モンゴル族以外の複数民族が、近距離で牧畜を営んでいる地域は、フルンボイル市でしか見られない。個々の民族に関する研究は存在しているが、同じ気候で、同じ生業に携わる異なる民族の住宅を取り上げ、共通点と相違点を検討した研究はない。

本章は、同じ草原地帯で、同じ放牧をしている 3 つの異なる民族バルガモンゴル族、エヴェンキ族やダウール族の住居平面と間取り、部屋の利用と呼び名を比較検討することを目的とする。

### 6.2. 放牧様式

#### 6.2.1. 放牧方法

表 6-1 放牧方法

	季節放牧	日帰り放牧	畜舎飼育	自由放牧	委託放牧
バルガモンゴル族	○	○	○	○	○
エヴェンキ族	○	○	○	○	○
ダウール族	—	○	○	—	○
○ あり      — なし					

表 6-1 は、第 3 章の 3.3.2、第 4 章の 4.3.2 と第 5 章の 5.3.3 をもとに筆者作成したものである。放牧方式が 3 民族とも共通するのは、日帰り放牧、委託放牧と畜舎飼育である。バルガモンゴル族とエヴェンキ族は季節放牧と自由放牧が共通である。異なる点は、ダウール族が季節放牧と自由放牧を利用していない。季節放牧は短期移動のため移動先では、ゲルの需要がみられる。ダウール族は、もともとゲルを使う伝統がなかったため季節放牧が必要されなかった可能性がある。自由放牧は馬を飼っていないため必要でなかったと考えられる。

#### 6.2.2. 放牧地利用

表 6-2 放牧地利用

分類	自己所有地		行政所有地		共有地	他人の地
	放牧地	住居周辺地	ガチャの土地	ソムの土地	合作社の土地	他人の土地
バルガモンゴル族	79%	15%	11%	5%	16%	5%
エヴェンキ族	70%	5%	35%	5%	—	5%
ダウール族	65%	15%	10%	5%	—	20%
— なし						

表 6-2 は、第 3 章の 3.3.4、第 4 章の 4.3.2 と第 5 章の 5.3.3 をもとに筆者作成したものであ

る。表（6-2）から見れば敷地は、自己所有地、行政所有地、共有地、他人の土地に分かれている。自己所有地である放牧地と住居周辺地で、3民族とも放牧地と住居周辺地を利用している。行政所有地であるガチャの土地とソムの土地は3民族とも利用している。他人の土地は、3民族とも利用している。異なる点は、共有地である合作社の土地は、バルガモンゴル族だけが利用している。

3民族の中で、エヴェンキ族はガチャの土地利用が多く、自然災害や土地がない世帯が主に利用する。バルガモンゴル族は禁牧と休牧政策を広く使われているため少ない数の家畜を住居周辺地に放牧している。ダウール族は土地が狭く、五畜の中で乳用牛を多く飼っているため住居周辺に放牧を行っている。他人の土地利用ではダウール族が一番多く利用している。土地が少ないまたは土地を所有していない世帯が多く、家畜を放牧させるために他人の土地を借りている。

### 6.3. 牧畜民の住居

#### 6.3.1. バイシンの建設時期

表 6-3 バイシンの建設時期

政策年代	土地分配以前	第一次土地分配	第二次土地分配	補助金制度
	1983年以前	1983年～1996年	1997年～2008年	2009年以降
バルガモンゴル族	0	8	7	1
エヴェンキ族	0	9	7	4
ダウール族	10	9	3	3

表 6-3 は、第 3 章の 3.4.2、第 4 章の 4.4.3 と第 5 章の 5.4.2 をもとに筆者作成したものである。第一次土地分配と第二次土地分配の政策によって、建設時期を 4 つに分けた。(表 6-3) から見れば、第一次土地分配以前バルガモンゴル族とエヴェンキ族はバイシンをほぼ建ててなく、ダウール族はこの時期に 3 分の 1 がバイシンを建てていることが分かる。第一次土地分配時には、バルガモンゴル族とエヴェンキ族の半数がバイシンを建て始めるが、ダウール族は比較的新しいバイシンを少なく建てている。第二次土地分配時には、バルガモンゴル族とエヴェンキ族の 3 分の 1 が新しくバイシンを建ててるが、ダウール族は新しく建てたバイシンが少ない。2000 年以降住宅補助金政策が実施されてから、バルガモンゴル族が新しく建てたバイシンが一番少なく、エヴェンキ族とダウール族は同じく 5 分の 1 が新しいバイシンを建てている。

第一次土地分配政策によって、バルガモンゴル族とエヴェンキ族がバイシンを建て始めていることが分かる。そして、第二次土地分配政策によって、バルガモンゴル族とエヴェンキ族ではバイシン普及がより一層進められたことが見受けられる。

6.3.2. 平面タイプ

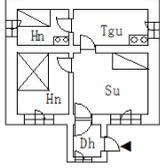
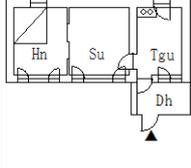
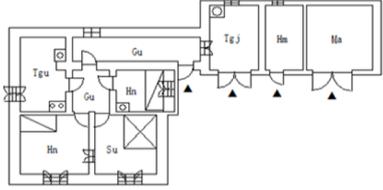
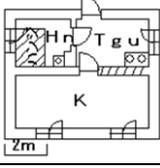
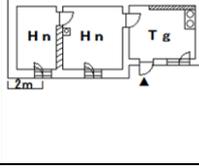
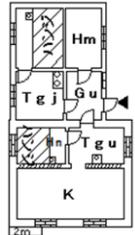
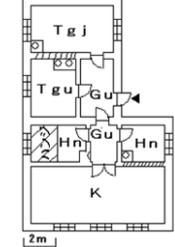
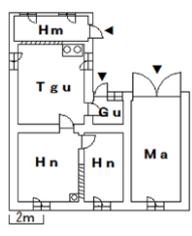
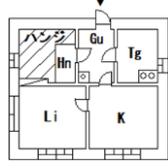
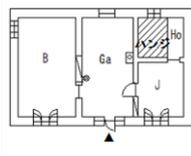
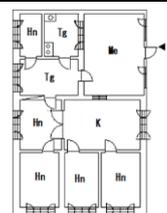
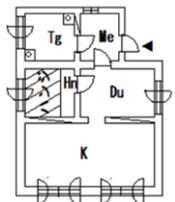
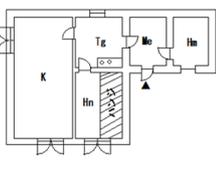
		タイプ			
バルガモンゴル族		2行4室(C)			1行3列(D)
					
				東西増築(B)	
					
エヴェンキ族		2行3室(A)			1行3列(D)
					
	北へ増築(B)		増築と同じ(B')	東西と北へ増築(C)	
					
ダウール族		2行4室(A)			1行3列(B)
					
	北へ増築(A-I)		増築と同じ(A-II)	東西増築(C-II)	
					

図 6-1 住居タイプの比較

図 6-1 は、第 3 章の 3.4.1、第 4 章の 4.4.2 と第 5 章の 5.4.2 をもとに筆者作成したものである。3 民族の住居を増築と入口の設置に着目し比較(図 6-1)してみれば、1 行 3 列のバイシン（東西に並んでいて、中央の居室に入口が設置されている。両側に居室があり、南側から入るバイシンのこと）と 2 行 4 室（北に 2 室と南に 2 室が並ぶバイシンのこと入口が横または南に設置されている）、2 行 3 室（南に 1 室北に 2 室または南に 2 室北に 1 室が並ぶ平面タイプのバイシン）のバイシンそして、東西増築のバイシンが 3 民族とも共通である。エヴェンキ族とダウール族では、北へ増築（建物の床面積を増やす建築行為を増築とする。居室以外に風除室、倉庫、車庫なども増築とする）バイシンと東西増築バイシンが共通である。北へ増築したバイシンの増築部分には居室が設置されている。東西増築した部分には倉庫と車庫を設置することが多くみられる。

エヴェンキ族とダウール族には、入口の設置が南、東、西、北向きとなっている。3 民族とも南向きと東西向きが共通している。ダウール族とエヴェンキ族では、入口が北向きであることが共通である。

### 6.3.3. 居室の利用用途と呼び名

表 6-4 部屋の名称分析の比較

地域	言語	用途	方向	大きさ
バルガモンゴル族	モンゴル語	Gu Tgu Tgj Hn Su Ug Ma Hm	-	-
	ロシア語	Dh	-	-
エヴェンキ族	モンゴル語	Tg Tgu Tgj Hn Hm Gu Ma MH	-	-
	中国語	K Me	-	-
ダウール族	モンゴル語	Tg Tgu Tgj Hn Hm Gu Ma ML	Ho Ga B J	-
	中国語	K Fa CK Me	Li	XW DW

①バルガモンゴル族、エヴェンキ族とダウール族の 3 民族で部屋の名称が共通するのは、Tgu ウブリン・トゴンゲル（冬のキッチン）、Tgj ジョネ・トゴンゲル（夏のキッチン）、Hn ホノホゲル（寝室）、Ma マシンネフムルグ（車庫）、Hm フムルグ（倉庫）、Gu ゴドムジ（廊下）

②エヴェンキ族とダウール族の部屋の名称が共通するのは、Me メンロー（風除室）、K ケーティン（客室）、Tg トゴンゲル（キッチン）

③バルガモンゴル族だけで使っている部屋の名称は、Su ソーフゲル（寝室）、Ug ウガーフゲル（シャワールーム）、Dh ドハ（風除室）

④エヴェンキ族のバイシンだけに設置されている空間は、MH マシンホドグンゲル（電気井

戸室) である。

⑤ダウール族のバイシンだけで使われているの部屋の名称は、Ho ホイトゲル (北の部屋)、Ga ガダングル (外の部屋)、B バラングル (西の部屋)、J ジュングル (東の部屋)、LI リウー (中の部屋)、Fa ファンウー (ご飯を食べる部屋)、CK ツァンクー (倉庫)、XW シャオウー (小さい部屋)、DW ダウー (大きい部屋)、ML マリングル (家畜小屋) である。

(表 6-4) から見れば部屋には、主に中国語とモンゴル語の呼び名を付けている。名称は利用用途、方向や部屋の大きさによって付けられている。Tg、Tgu、Tgj、Hn、Hm、Ma、Gu、ML、MH、Su、Ug はモンゴル語で部屋の利用用途によって付けられている。Dh はロシア語で利用用途によって付けられている。Ho、Ga、B、J はモンゴル語で方向によって付けられている。K、Fa、CK、Me は中国語で、利用用途によって付けられている。LI は中国語で方向によって付けられている。XW、DW は中国語で、部屋の大きさによって付けられている。

バルガモンゴル族とエヴェンキ族では、部屋の名称は中国語で付けられているのが少ないことが分かる。ダウール族では日常会話がモンゴル語、ダウール語以外に中国語を広く使われているからだと考えられる。方向、大きさで称呼しているバイシンは古いバイシンで中国人のバイシンの居室の名称と同じことが分かる。

調査地	平面タイプ			
バルガモンゴル族				
エヴェンキ族				
ダウール族				
凡例	①寝室に利用する    ②食事に利用する    ③調理に利用する    ④接客に利用する ⑤各室につなぐスペース    ⑥物置に利用する    ⑦洗面用に利用する    ⑧車庫用に利用する			

図 6-2 部屋の利用用途の比較

図 6-2 は、第 3 章の 3.4.3、第 4 章の 4.4.4 と第 5 章の 5.4.3 をもとに筆者作成したものである。3 民族で部屋の利用用途を分析してみれば（図 6-2）1 つの空間を 2 役に使っているのは、バルガモンゴル族、エヴェンキ族とダウール族で、食事用部屋と調理用部屋を一つの空間として使っている。また、寝室と接客用部屋が一つの空間となっている。寝室を 2 つ以上設けている点が 3 民族の部屋利用用途の共通点である。そして、一つの空間を 3 役に使っているのは、バルガモンゴル族とエヴェンキ族で、寝室、食事用部屋と接客用部屋が一つの空間として使っている。

間取りが 4 つ以上設置されているバイシンには廊下、倉庫、洗面用室、車庫などが設けられている。1 行 3 列のバイシンでは、調理用キッチンが真ん中に設置されている。増築や南北に分かれる 2 行 3 室（4 室）バイシンの場合、キッチンが北に設置されている。

## 6.4. 暖房器具

### 6.4.1 暖房器具の変化

表 6-5 暖房器具の利用状況の比較

地域別	暖房器具種類	60年代	70年代	80年代	90年代	2000年代
バルガモンゴル族	ハンジ	-	-	3	-	1
	フーチャン	-	-	6	3	7
	ジョーフ	-	-	6	3	9
	ノアンチ	-	-	-	1	5
エヴェンキ族	ハンジ	-	-	3	5	4
	フーチャン	-	-	5	5	9
	ジョーフ	-	-	5	5	10
	ノアンチ	-	-	-	-	2
ダウール族	ハンジ	2	3	5	3	4
	フーチャン	2	1	3	1	3
	ジョーフ	2	3	5	3	6
	ノアンチ	-	-	-	-	1

表 6-5 は、第 3 章の 3.5.2、第 4 章の 4.5.2 と第 5 章の 5.5.2 をもとに筆者作成したものである。表 6-5 は、バイシンが建てられた時期に暖房器具が設置され、年代別暖房器具の利用状況を示している。バルガモンゴル族とエヴェンキ族では、バイシンを建てた時期が遅いため暖房器具の設置も遅いことが分かる。バルガモンゴル族ではハンジの設置率が少ないことが明らかである。その代わりにフーチャンの設置が多い。ダウール族のバイシンには、ハンジの設置が多いため、フーチャンの設置が少ないことが分かる。ジョーフは暖房器具に熱気を送る役割以外に調理用に使われているためバイシンが建てられる同時にジョーフも設置されている。そのためどの地域でも、どの時期でも 100%利用されていることが分かる。ノアンチは 90 年代後半以降に新築バイシンに設置されている。間取りが増えることに

よってノアンチの需要があったと思われるが、バルガモンゴル族のバイシンにはノアンチとフーチャンを併用で設置し、ダウール族のバイシンには、ノアンチとハンジを併用で設置する傾向がみられる。

## 6.5.比較によるフルンボイル草原地域における居住空間の特徴

### 6.5.1 3民族との比較による共通点

- ①放牧方法では、日帰り放牧、畜舎放牧と委託放牧は3民族とも共通である。バルガモンゴル族とエヴェンキ族は、季節放牧と自由放牧が共通である。
- ②放牧地利用では、放牧地、住居周辺地、ガチャとソムの土地、他人の土地利用が共通である。
- ③住居の建設時期では、バルガモンゴル族とエヴェンキ族は第一次土地分配政策実施する前にゲルを利用している。その以降にバイシンを建て始めている。
- ④バイシン平面では、3民族とも、1行3列、2行3室(4室)、東西増築のバイシン平面タイプが共通する。エヴェンキ族とダウール族のバイシンでは、北へ増築、増築でないバイシン平面タイプが共通する。
- ⑤入口では、3民族とも、南と東西向きに設置している。エヴェンキ族とダウール族の入口は北向きに設置されている。
- ⑥居室の名称では、3民族ともモンゴル語と中国語の名称をつけている。
- ⑦部屋の利用用途から、3民族とも共通の空間として利用されているのは、接客用に設けた客室と寝室が同じ空間として使われている。食事用と調理用部屋が一つの空間として利用されている。寝室を2つ以上設けていること。
- ⑧1行3列のバイシンには真ん中の部屋にキッチンを設置し、寝室は東西に設置している。2行3室(4室)のバイシンにはキッチンが北の方に設置され、寝室は南の陽あたりのいいところに設置していること。
- ⑨暖房器具では、80年代以降のバルガモンゴル族とエヴェンキ族のバイシンにはハンジ、フーチャンとジョーフが設置されている。3民族の2000年以降のバイシンには、ノアンチの設置が始まっている。

### 6.5.2 3民族との比較による相違点

- ①放牧方法では、ダウール族が季節放牧と自由放牧を行っていない。
- ②放牧地利用では、バルガモンゴル族が共有地である合作社の土地を利用している。
- ③住居の建設時期では、ダウール族は、第一次土地分配政策以前からバイシンを利用していたこと。
- ④バイシン平面では、バルガモンゴル族のバイシンには、北へ増築と増築でないタイプが見られない。
- ⑤入口では、バルガモンゴル族のバイシンの入口が北に設置されていない。

- ⑥居室の名称では、バルガモンゴル族の居室名称には、中国語の名称が使われていない。モンゴル語以外にロシア語がつけられている。ダウール族の居室名称には方向と大きさによって中国語の名称が付けられていること。
- ⑦部屋の利用用途から、バルガモンゴル族とエヴェンキ族のバイシンでは、寝室、食事用と接客用部屋が一つの空間として利用されていること。
- ⑧暖房器具では、ダウール族の暖房器具はバイシンが建設されるときから（60年代）ハンジ、フーチャン、ジョーフが設置されている。2000年以降のバルガモンゴル族のバイシンにノアンチとフーチャンが併用で設置されている。ダウール族のバイシンには、ノアンチとハンジが併用で設置されている。ダウール族のバイシンにはハンジの設置が多い。バルガモンゴル族のバイシンにはフーチャンの設置が多いこと。

## 第7章 結論

### 7.1. 調査地3民族の要約

本章では、内モンゴル自治区フルンボイルの草原地域における同じ放牧をしている3つの異なる民族バルガモンゴル族、エヴェンキ族やダウール族の生活様態、牧畜地概況、住居平面と間取り、部屋の利用を把握した上でフルンボイルの草原地帯の居住空間の変容過程を検討することを目的としている。

第1章では、本論文の背景と目的を明確にし、伝統住居や固定住居に焦点を絞って既往研究を整理し、研究方法や調査概要を述べた。

第2章では、フルンボイル草原地域の3民族の歴史背景と各地域の基本情報を整理した。

第3章から第5章において、フルンボイル草原地域の新バルガ右旗のバルガモンゴル族、エヴェンキ族自治旗の輝ソムのエヴェンキ族とバヤンタラダウール民族郷のダウール族で生活様態や基本状況、そして住居平面と居室の利用状況を把握するため調査を実施した。各調査では、主につ聞き取り調査、および住居や配置図の実測を行っている。

第6章では、3つの調査地の放牧方式、土地利用と住居の平面、居室の利用用途及び呼び名と暖房器具を整理した上で、フルンボイル草原地域における異なる3民族の特徴を比較し、その相違点と共通点をまとめた。

本章では、第3章から第5章までの各章を要約し、フルンボイル草原地域全体の住居の特徴を出し、居住空間の変容を明らかにした上で今後の課題を述べる。

まず、第3章では、フルンボイル市新バルガ右旗アラタンエメル鎮において牧畜民19世帯を対象に調査を実施した。調査地では、2013年時点で、バイシンの普及率がほぼ100%である。これは定住化が進み、住居が拠点を持つことを意味する。でも、調査地では、対象事例の1事例がバイシンのみ、もう1事例がゲルのみを使用しているのを除き、すべてがバイシンとゲルを併用している。バイシンは拠点に設置され、ゲルは季節放牧に使用している。季節放牧を行わないときには、バイシンの近くに建て、夏用キッチン、客用寝室と倉庫として使われている。バイシンが最も早く導入されたのは1982年で、二度目の土地分配政策によって急速に普及している。

牧畜形態は、土地分配以降、年間を通じた放牧サイクル季節放牧を行っている。春と冬営地はほとんど拠点に設置し、夏と秋にはゲルと家畜を持って、夏営地と秋営地に少なくとも3か月間移動放牧を行う。拠点では日帰り放牧を行っている。土地分配が定住化を進めた原因の一つであると考えたら、2000年以降の禁牧と休牧政策はさらに定住化を進めた原因になると思う。

バイシン平面タイプに関しては、バイシンを4タイプに分類できた。東西廊下型、南北廊下型、2行4室の非廊下型と1行3列の非廊下型に分けることができた。第1次土地分配時に2行4室の非廊下型と東西廊下型である。南北廊下型と東西廊下型のキッチン(Tgu)が

北西に位置し、客室(Su)が東南に位置する。2行2列の非廊下型の客室も同じく東南に位置している。南北廊下型の入口は南に廊下と繋がって設置されている。東西廊下型の入口は東側に廊下と繋がって設置されている。2行4室の入口は東・西・南の3箇所、東と西に設置され、冬用キッチンと繋がっている。1行3列のバイシンの入口は南に設置され、キッチンと繋がっている。

間取りから見ると、主要な空間は入口、客室、寝室、廊下、キッチンで、寝室は2つ以上設けられている。家族世代別に利用している。廊下は各部屋を繋ぐ役割と洗面台や物置にも使われている。キッチンは夏用と冬用に分けられている。キッチンは調理と食事に使われているが、食事は客室や夏用キッチンまたはゲルを使う場合もある。各部屋の呼び名は、方向で付けられたのではなく役割から付けられている。

暖房器具は固定式暖房と移動式暖房の2種類で、固定式暖房は、ピーシン、ラガ、ノアンチ、ジョーフの4種類である。移動式暖房は、デンノアンチ、ジョーフの2種類である。この地域ではピーシンとノアンチ2種類の利用が多く見られる。

増築や改築したバイシンまたは、2000年以降に建てられたバイシンにはノアンチを使い始める。ピーシンはこの地域独特の暖房用施設である。平面分析から見ると壁暖房が設置されている廊下型と2行4室の非廊下型の暖房は東西壁に設置され、1行3列の非廊下型の暖房は南北壁に設置されていることを把握した。

次に第4章では、エヴェンキ族自治旗の輝ソムにおける牧畜を営む20世帯を対象に調査を実施し、牧畜形態、住居の平面と利用に関して以下のことを明らかにした。

調査当時2014年にはエヴェンキ族自治旗・輝ソムでは、公社の設立による50年代から遊牧民が固定住居に住み始めている。第一次土地分配時にバイシンが普及し、調査対象地では、最も早く導入されたバイシンは1983年である。この地域ではバイシンの普及と共にゲルは住まいから観光ように転換され、バイシンと併用に使用されることになっている。

牧畜形態では、季節放牧が見られず、長距離長期間の移動がほぼない。分配された土地を放牧地と草刈地に分けている。放牧地では日帰り放牧を行い、草刈地では冬の餌として蓄えて置く草を植え、9月に刈って置く。5月から12月までの間、委託放牧を利用している人もいる。分配された土地以外にガチャの土地がある。土地が少ない、または気候により雨量が少なく、草の生えが良くない場合に利用する。畜舎飼育は厳しい寒い冬を越すために家畜を畜舎内で、秋に刈って蓄えた干し草や飼料を与えて飼育する。馬はガチャの土地とソムの土地の広い範囲内で自由放牧をさせている。

バイシン平面タイプに関しては、入口と増築に着目し5タイプに分類した。Aは入口が北側に設置され、北側の部分が増築されておらず、Bは増築される前はAと同じ平面であり、北側へ増築されている。B'は増築ではなく、最初からBと同じ空間で建てている。Cは北側の増築よりさらに北側、または東側に増築して、Dは入口が南側に設置されている。Tgは増築によって、増築部分に移動している。Kは広い平面と日当りのいい南の方に設置されているため、増築部分には移動していない。この地域では、バイシンの増築が南側ではなく、北側に増築されている。

バイシン補助金制度により、床面積が決まっている、3室、4室のバイシンが多く建てられている。補助金で建てられたバイシンは狭いため、あとから増築をする家庭が多くなっている。

暖房器具はフーチャン、ハンジ、ノアンチ、ジョーフの4種類である。ジョーフは室内を暖め、調理用に使われるため、バイシン建てられる時から設置されている。ハンジよりフーチャンの設置率が高い。フーチャンは壁暖房のため壁を挟む両室を同時に温める機能がある。ノアンチは2000年代以降バイシンに普及し始めた。

続いて、第5章では、エヴェンキ族自治旗のバヤンタラダウル民族郷における牧畜を営む20世帯を対象に調査を実施し、牧畜形態、住居の平面と利用に関して以下のことを明らかにした。

ダウル族は元々固定住居バイシンに住み狩猟、採集、漁業などを営んできたが、草原地帯に移住し牧畜を営むことになる。でも1950年代の公社時代にバヤンタラダウル民族郷に移住し、調査対象事例で最も早くバイシンを建てたのは1962年である。ゲルの併用は一事例のみである。

牧畜形態では、放牧地と住居周辺地では日帰り放牧を行い、冬の寒い時期には畜舎飼育を行っている。土地や家畜を分配されなかった家庭が多く。ガチャや郷の土地を借りて放牧を行う事例もいる。または、乳用牛を飼って、乳を売って収入源にしている。

バイシン平面タイプに関しては、大きくA型、B型、C型の3つに分かれる。A型はA-I型の増築タイプと増築でないA-II型に分かれる。B型はB-I型の増築タイプに分かれる。C型はC-I型の増築タイプと増築でないC-II型に分かれる。A型は北側に増築され、A型、A-I型、A-II型とも入口は北側もしくは東側にある。B型は東西に増築され、入口はB型、B-I型とも南向きになっている。C型は東側もしくは西側に増築され、C型、C-I型、C-II型とも入口は東側もしくは西側にある。

すべてのバイシンにキッチンと寝室が設置され、利用用途によるモンゴル語の名称を使用している。新築や増築、改築によって、居室が増えことで、利用用途による中国語の名称が多く使われている。居室の増加により寝室が設置され、寝室用、客用寝室に使われていることが明らかになった。

暖房器具はフーチャン、ハンジ、ノアンチ、ジョーフの4種類である。どの年代のバイシンでもハンジを付けていることが分かる。ハンジはダウル族にとって、バイシンの一部になっていると判断でき、バイシンの平面タイプが変わってもハンジの設置が引き継がれている。フーチャンは、ハンジより遅い年代に建てられ、ノアンチの設置は2008年以降のバイシンに見られる。

## 7.2.フルンボイル草原地域における牧畜業を営む3民族の住居平面の変化及び使い方の要約

第6章では、牧畜業を営む3民族の住居平面の変化から以下のような結論が出た。①従来

の移動式放牧は長距離長期間移動していたのが、縮小されることに伴い、年間を通じた放牧が季節を通じた季節放牧に変化する。これは、放牧地の使用権分配によって生じた放牧方法であると考えられる。そして、固定化拠点の普及により、日帰り放牧と畜舎飼育の放牧方法が適応するようになる。でも一方で、牧草の悪化や家畜頭数の限度により、当該地域では、放牧地の範囲を拡大するために共有地、他人の土地と行政所有地を利用する現状が見られる。②季節放牧は短期間移動のため、移動先ではゲルの需要が見られる。でも、ダウール族は、狩猟、漁業、農業、放牧の多様な経営生産方式を融合した生業を行っていたため、移動式放牧を行ってなかった。これに伴いゲルの必要性もなくなり、季節放牧も行われなかった原因であると考えられる。③バイシンの建設時期からみれば、ダウール族は昔から狩猟、農業、漁業をやってきたため、早い時期から固定住居バイシンに住んでいてゲルは使ってなかった。しかし、バルガモンゴル族とエヴェンキ族地域では遊牧に適した移動式住居ゲルを利用していたため、バイシンを建て始めたのは、第一次土地分配政策以降である。バイシンが普及したにもかかわらず、ゲルは季節放牧用、拠点で夏用キッチンや客用寝室または観光用に従来の住居から変貌していることを確認できた。④住宅平面で共通するバイシンタイプのなかで、1行3列タイプはダウール族の伝統バイシンの平面と同じく、あとからバイシンが普及したバルガモンゴル族とエヴェンキ族の1行3列のバイシンには影響したと考える。2行4室(2行3室)のバイシンタイプはダウール族のバイシンには70年代後半からみられているため、バルガモンゴル族とエヴェンキ族の2行4室タイプのバイシンとだいたい同じ時期から建てられていると思われる。⑤増築では、ダウール族とエヴェンキ族のバイシンには北へ増築がみられたのは、ダウール族の伝統住居では倉庫や畜舎を母屋の両側で建てることが多い。そのため、北にスペースが生じ、増築には北へ増築が最適だったと考える。バルガモンゴル族のバイシンの周辺地では、冬に北から来る風が多いため、畜舎、餌置き場などが防寒用にバイシンの北に設置されている。そのため、増築の場合東西増築が最適だったと推測される。⑥入口では、バルガモンゴル族のバイシンの入口はほぼ南向きに設置されていることは、ゲルの入口は南、東南向きという設置文化がバイシンに継がれたと考えられる。⑦居室の名称では、ダウール族が圧倒的に中国語の名称を使っているのは、定住が早く、生業が牧畜業に転換する前に農業や林業を営んでいたからだと考えられる。そして、バルガモンゴル族の部屋の名称にはロシア語が使用されていることからバイシンの間取りにはロシアのバイシン平面が影響していることもありうると考える(しかし本稿では資料不足のため今後の課題とする)。⑧居室の利用から、最低限の生活平面は3つの間取りであることが分かる。しかし、一つの空間で2つ、3つの用途を果していた空間が増築によってそれぞれ個別空間として設置されていることが分かる。⑨バルガモンゴル族とエヴェンキ族のバイシンでは、寝室、食事用と接客用部屋が一つの空間として利用していたのは、ゲルの空間利用がバイシンの居室の利用に現れていることが確認された。⑩暖房器具では、2室以上の寝室を持つ多室バイシンでは、ノアンチによる全室集中暖房が経済的に十分可能であるにもかかわらず、ハンジとフーチャンを1つ確保し、ノアンチとハンジまたはノアンチとフーチャンが併設されていることから暖房の効率化と部屋の機能の充実の双方をはるか工夫と考えられる。ダウール族の伝統住居は、ハンジ中心な空間となっているため、今のダウール族のバイシンにもハンジの設置が継がれていると考えられる。一方バルガモンゴル族とエヴェンキ族のバイシンにはハンジの設置が普及しなかったのは、もともとのゲルにはハンジの文化がなかったからだと考える。

### 7.3. 今後の課題

本論文の実地調査を行うときに調査対象地である旗に隣接する場所を拠点にして、ゲルを建てて生活しているいわゆる移民村を発見、そこで聞き取り調査を行った。移民村は、内モンゴル自治区では2001年に「実施生態移民和扶貧移民试点工程的意見（生態移民と貧困扶助移民試験プロジェクト実施の意見）」政策が発表された。<sup>1)</sup> 調査当時2013年に新バールガ右旗のアラタンエメル鎮の移民村では、50以上の世帯が何百メートルの距離でゲルを建てて生活をしてきた。エヴェンキ族自治旗のブルフムデル (bulhumdel) ガチャでは、乳牛飼育の移民村が設置され、だいたい60世帯がいる。野村<sup>2)</sup>のシリソグ盟の移民村の研究では、生態移民政策のもとで移住に伴い、生業は乳牛飼育と転換されている。政府から移民村での居住用地、乳牛3頭の購入費用、牛舎建設のための補助金で、住居は自ら建てる必要があった。そこで、従来持っていたゲルを仮設住宅として使用されていると強調している。

以前のデータを基にまた、さらなる調査を行い、内モンゴル全域の9つの盟とそれぞれの旗に設置されていた移民村の設置状況や現状、住居と生活全般を考察する必要があるため、内モンゴルの移民村の住居変容を明らかにすることを今後の課題である。

### 参考文献

- 1) 初春霞・孟慧君：内蒙古生态移民面临问题及其对策思考，北方经济，p. 57, 2005
- 2) 野村理恵・中山徹・今井範子・姫茹・咏梅：牧畜民の定着化過程におけるホトの形成と居住形態の変化，日本建築学会計画系論文集，2010，75，pp1141-1149

### 謝辞

まず、本論文の作成において、調査にご協力いただいた内蒙古大学蒙古学学院のバヤンモンド教授及び地元の方々にお礼申し上げます。そして、調査にアドバイスや協力をいただいた奈良女子大学の武藤康弘教授及び調査に同行していただいた奈良女子大学卒業生イジョウさんに心より感謝申し上げます。